

る、それも非常な天才で、もあつて、ぶら／＼して居るのは未だ可いが、何等人に立ち勝つた點も無いくせに、少しも努力しないと云ふ者に至つては、實に天下の厄介者である、此の様な者は、一生何事も出来ずに、人の風下に隨いて終る人間である、斯の如き懶惰の人、薄志弱行の人は、到底今後の激烈なる社會に立ちて、其の生存を全ふすることは出来ない、一體何事でも、眞にやらうと思へば出来るのである、夫れが若し出来ないと言ふのは、其の實なさないものである、即ち始めツから、自分には出来ないものと決めて居るのである、彼の英雄ナポレオンは數萬の大軍を率ひてアルプス山を越えた、夫れはナポレオンにのみ出来て、其の他の人には出来なかつた事なのではない、素より決行しさをすれば、何人にでも出来たことなのである、唯だアルプス山を、越えられぬものと頭から決めてしまつて、意氣地なくも決行しなかつたのである、だから越えようと思つて眞劍にかゝれば、誰れにでも越えられたに違ひない、即ち能はざるに非ずして、爲さざるなりの方である、言ふまでもなく信念は力であるから、

決行すれば必ず出来ると言ふ、此の信念なるものが實に大切である、されば人は金剛不壞の大自然を以て、何事にも眞面目に努力することが大切である、蓋し努力は、あらゆる場合に必要なことで、凡そ家庭に於けると、社會に於けると別に變らない、デ家庭に就て特に言へば、眞面目なる努力の精神なき夫婦は、一家を亡ぼすに至るは勿論である、どんな些細なことでも、やる氣が無ければ出来ぬ、たとへば茶碗に盛つた飯一膳、食ふことさへ困難であらねばならぬ、世間には随分無性な、箸にも棒にも掛からぬ妻君がある、例せば御飯が濟んでも、立ち上がることを面倒がつて、何時までも食卓を其の場に出したまふ、煙草などを吹かして居るのがある、又た亭主の着物や子供の着物などが何のやうに汚れて居ても洗はふとはせず、座敷の中が幾ら散らかつて居ても形づけることをしなく、火鉢の火が消えて居ても夫れを起さうとせぬやうなのがある、其のくせ彼等は毎日遊んで居る、そして近所の妻君達と、用も無い雑談に時を移す、或は子供と一緒にぶら／＼と遊び歩く、或は煙管を一時間ぐらゐヒネク

リ廻はしてポカンとして居る、且つ又た新聞や小説などを擴げて小半日も讀む、やがて飽きると今度は晝寢を始める、それから暫らくにして目が覺め、亭主が歸宅する頃になつて、漸く夕飯の仕度に取り掛かる、此の様な妻君は、無聊に苦しみつゝ、猶ほ且つ仕事をしようとは思はないのである、否な彼の女に言はせたら、別に何も仕事が無いのだものと申譯するかも知れぬ、併し仕事の無いと言ふ筈はない、若しやる氣になれば、仕事は幾らでもある、然るにやる氣が無いから、仕事が目に附かぬのである、斯うした暇の多い生活には、兎角惡魔が魅入り易い、俗に小人閑居して不善を爲すと言ふが、誰れでも閑居して居れば不善を爲すものである、否な彼のフヒテの言つたやうに、閑居と言ふこと夫れ自身が、すでに立派な罪惡である、唯だ遊んで居ると言ふことが、之れ取りも直さず不善である、斯くして不善は更に不善を生み、ロクな事を企てない、曾ては自分が未だ娘であつた頃、懇意にした男の事などを考へる、やがて其の男の寫眞を出して見たり、手紙などを出して讀んだりする、そして人妻として有

るまじき考へを、つひ起こすと言ふやうなことになる、或は又た良人の机の引き出しなどをあけて、良人の秘密を探つて見たりする、斯う言ふ妻君は實に危険極まるもので、甚だ油斷のならぬ妻君である、たとひ夫れ程には極端でなくとも、仕事の厭やな骨惜しみの妻君は、到底主婦としての任務を充分に果すことが出来ない、ところで努力心の缺乏して居る妻君は、兎角また申譯が多くて困る、辯解が多くて困る、素より自分が始めツから責任を帯びて、事をチャンと仕てのける覺悟が無いから、何か人に言はれると直ぐに申譯をする、申譯によつて、自分の責任を免れようとする、甚だ卑怯な話である、故に如何なる事にしろ爲すべきことを、飽くまで爲し遂げようと言ふ精神のあるものは、決して申譯や説明をしない、謂ふところの不言實行、唯だ黙つてやる、斯くても充分に行かず、猶ほ人から何か言はるゝ事があつても、开は自己の至らざるが爲めと感じて、何等の申譯もしなければ、また少しも人を恨むやうなことがない、それで無くては行かぬ。

たとひ子供を教育するにしても、大いに努力の性能を養ふやうにしなくてはならぬ、蓋し意志の強固な、獨立自營の人でなければ、世の中に勝ちを制することは出来ぬ、そして獨立自營の人は、素より努力の人でなければならぬ、凡そ世の中に立つて事を爲すには、單に知識ばかりあつても駄目である、何事をも飽くまでやつてのけると言ふ、努力性能が大切である、故に子女を教育する場合には、彼等の力で出来得べきことは、何事でも自分でやらせるやうにするのが宜い、謂はゞ些細なことにまで、人の助けを當てにするやうでは困る、たとへば學科の下しらべでも、衣服の仕未でも、室の掃除でも、自分の履物や傘などの處置でも、凡べて之れを自身でやらせるやうに躰けなくてはならぬ、早い話が、一寸した事にも一々女中や書生の手を煩はす坊ツちやま嬢ちやま主義は、最も宜しくないのである、されば坊ツちやま育ちが、世の中に出るから、大事を成すことの出来ないのは、自立自營の志操乏しく、萬事に依頼心が強い爲めである、と言ふのは皆んな小ひさい時に、何事も人手にのみ頼る習慣が付いて居

て、自から努力して爲すの習慣が養はれて無かつた爲めである、つまり親の育てようが悪るのである、たとひ如何に惻かな子供でも、此の努力性能が養はれて無いと、將來になつてから一向役に立たなくなる。しかも夫れが人の中に立つて、いよ／＼仕事をせねばならぬ時に、勢ひまごつて後れを取るやうになるから、先づ何を措いても躰けと言ふことに注意すべきである、蓋し人間が精神修養をせねばならぬと言ふことは、元來人間の性は善であるが、惡の誘惑に負け易いほど弱くして且つ缺點を有するからである、若し人間の心が緩んで居ると、直ぐに誘惑の手がつけ込む、故によく此の缺點弱所を知らなければならぬ、素より修養の第一歩は實に自分の缺點を知ることである、そして缺點を知ると同時に、其の長所も知ることである、即ち己れ自身を知ることである、しかも長所は之れを發達せしめ、且つ短所缺點は之れを改善しなければならぬ、それが修養であり又た努力である、然るに人間は自惚が多いから、自分の長所を知るとは容易であるが、其の短所缺點を知るとは至難である、されば彼の

孔子も「己まんなかな、我れ未だよく其の過まちを見て内に同じ認むる者を見ざるなり」と言つて嘆息した。併し自己を知ることの適当な分量は、此の世に於て人らしからんことを望み、又た人らしいことを爲さんと欲する人には必要である、しかも特に自己信頼を形成するには、最も緊要なことの一つである、それからフレデリックバースも又た曾て友人に「御身は御身が爲し能ふことを餘りによく知る、併し御身が爲し能はざる事を知る迄には御身は肝要なる何事をも爲し能はぬ、尙ほ亦た衷心平和を得ることは出来ぬのである」と言つたが、實際吾々は長所は餘りによく知つて居るが、けれども自分の其の短所に氣がつかぬ、否な唯だ長所だと思ふのみであつて、それが實際わが長所であるか否なかも眞には判明して居ない、其のくせ自分の短所は、知り過ぎるほど識つて居ても、之れを改めようとはせぬのであるから、即ち全く知らぬものと同じ結論を得るに至るのである、蓋し自分をもつと役に立つ人間であり、又たもつと立派な人間であると思つて安心して居ても、其の缺點の爲めに端しなくも失敗する場合は多い、

故に吾々は先づ自己の缺點を知つて、夫れを改めることに努力しなければならぬ。

惟ふに吾々は天賦の人格を完成して、人間としての職分を十分に盡さねばならぬ、それが吾々人間の目的である、素より階級の如何、人々の如何に依つては、其の目的や理想が違ふかも知れぬが、兎も角も聰明なるべき人間は、自分みづからの完成を理想とせねばならぬ、デ自からを完成するのは、即ち修養を積むの努力である、然るに修養なるものの際限極度の無いことは、大聖孔子が「我れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず」と言つて、修養か人間の全生涯に渡るべきことを明かにしたのでも知られる、凡そ何人に限らず、順境に居る時は、修養とか努力とか言つて居る者もあるが、一旦逆境に立つと、修養も努力も忘れて悲觀するものが多い、斯やうなウロタへた態度では人間として活き甲斐の無いものであり、逆境は之れ人間を完成させようとする天の試練であると思はねばならぬので、困難から善

果を得る事こそ眞に必要なものであらねばならぬ、されば艱難汝を玉にすと言ふこと
もある通り、實際困難に遭遇して十分心身を鍛錬した人は、益々これを善用して人格の
向上を計るものである、プラトンは公平なる罰は神の最善なる恵みであると言つて居
る、ゲーテは如何なる困難も詩に化せられぬものは無いと言つて居る、冬の寒冷の後に
は春の暖かさが来る、逆境こそは人間の修養の最好時期である、人は正義の爲めには死
ぬことをさへ感謝せねばならぬ、逆境に修養の努力せよ、夫れは人間に取つて何よりも
有益なことである、順境の修養は誰れもする、逆境に感謝する程度の修養に吾人は到
達せねばならぬ、蓋し吾々は何人と雖も注意と自制とを要しない程、自然の儘で善良
なる性情を持ち得ることは出来ぬ、又た如何なる性情も適當に修養して、之れを善良
にすることの出来ぬほど不良のものはない、唯だ容易に悪癖を矯正し得る人と、非常
なる努力を有する人との差があるのみである、たとへば達人とか哲人とか言はれる人
は、何れも其のおのづからなる努力に依つて自制し、之れを善用して居る、即ち道徳

を行ふこと、雲の飛ぶが如く水の流れるが如く、自然にして且つ自由である、素より
舊怨を忘れ敵を愛すと言ふことは非常な克己自制が必要である、非常な努力が必要で
ある、人間修養の極致は其所に到達せねばならぬ、夫れ情は吾々が人生と言ふ船を前
進させる風である、且つ理性は其の進路を定める水先案内である、風なくて船は進ま
ぬ、水先案内なくて方向は定まらぬ、其の風の方向を正しく巧みに善用するやうにせ
ねばならぬ、即ち情を發する儘にせず理性を以て善導し美化せねばならぬ、又た適宜に
慾望を自制すると同時に之れを善用するのが人格完成の一大要件である、素より自制
克己は徳性の根柢である、若し吾人をして聳動と激情に手綱を與へ、其の發動するま
ま放任し盲動せしめたらば大變である、其の瞬間より吾人の道徳的自由は束縛され、
意思は其の自由を失ひ、しかも人生の船は生活の流れに翻弄されて、一時的な最も強
い慾望の奴隷となり悲境に沈まねばならぬ、さればフレデリックポーションも「自己
を統治することは、個人に取つて唯一の眞正なる自由である」と言つた、勿論我儘勝

手は自由ではない、寧ろ本能慾に束縛されて之れが奴隸となるのである、故に道德の極致は自由にあらねばならぬ、又た人間の完成は人間幸福の極致である、ところで人間の幸福が富にあり、或は権力にありと思はれて居たのは誤まりである、言ふまでもなく富は失はれ、権力は衰へるものである、然るに永遠に失はれざるものは人格であり、生命である、しかも修養に依つて純眞の情と廉潔の心とが習慣となり、开が貞操と徳と中庸との間に出来上がったのが謂はゞ間然するところ無き理想的の人格である、従つて其所に汲めども盡きぬ生命の泉が湧く、斯く其の人格を建設し、其の生命を握むことが、人間の眞なる幸福であらねばならぬ、故に理想的人間完成の一は自製の極致にある、衝動的でなく、逐次まづ頭腦に浮かび出づる慾望に依つて彼方此方に驅らるゝことなく、自から制し、自から心の平均を失はず、そして集まれる諸感情の聯合決議に依つて統治されねばならぬ、此の感情の會議に於て各自の行動は十分討議され、靜かに決定されねばならぬ、开は素より智識、少なくとも道德的教育が生ま

とする努力である、彼のスペンサーは吾人の言に裏書して居る、要するに努力と言ふことを離れては何事も出来ないのみならず、努力は夫れ自身に偉大なる人生的價值を持つて居る、蓋し努力なき生涯は價值なき生涯である、謂はゞ醉生夢死的の生涯である、故に吾々は常に努力と言ふことを忘れてはならぬと同時に、又た人にも此の精神を吹き込むように努めねばならぬ。

第十八章 自覺上より見たる人間論

吾人は深く自己を反省して、自己の價值を知り、自己の適従するところを知り、自己の當さに爲すべきところを知り、自己は之れに依るにあらざれば到底満足し得べからざる底を知り、此の點は自己が之れを爲すにあらざれば何人にも爲し得ざるところなるを知り、自己は能く之れを爲すの任に堪ふことを知りし場合、茲に猛然たる自

信の一念が起ころ、素より自信は自己の價值を感ずるところに生ずる一念である、蓋し自己の價值を知るは、我れは我れの當さに果すべき天分を果しつゝあり、我れは此の天分を果すものなるが故に、世界の何人と雖も、我れを侵すこと能はずてふ、一種烈々たる信念あるが爲めである、換言すれば眞面目に自己の天分を考へて、熱誠以て之れを果すところに、強い自覺と大なる自信とが起こつて來るのである、されば彼のカーライルも、偉人の特質を論ずるに當り、开は全く眞面目と熱誠との二つであると言つたが、此の二つのもの程、吾人の自信を強めるものはない、吾人の力を感せしめるものはない、蓋し之れ有つて始めて、よく自己の使命を自覺し、且つ之れ有つて始めて、まつたく自己の使命を果し得るからである。

凡そ世の中に、自信のない人間程、哀れなものはない、故に自信のない者は、常に他人の言動に依つて支配せられ、他人の模倣ばかりに務めて居る。しかも常に唯だ運命の左右するがまゝに、他人の教ふるがまゝに行動すること、恰も浮萍の水のまに／＼

漂よふが如きものである、如何に學問があつても才能があつても、之れでは一個の人格としての價值がない、たとひ开は學あり才ありと雖も、要するに一個の機能に過ぎぬ、素より自信なく自己の主張なき者は人で無い、然るに不幸にして世間は滔々として此の種の人に充ちて居る、惟ふに彼等が生活の第一原則は、「常に周圍の空氣を讀むに敏速なれ、そして其の空氣に順應すること更に敏速なれ」と言ふことである、蓋し彼等が周圍の空氣に依つて支配せらるゝことは、恰も練り人形が、練り師の糸に依つて支配せらるゝが如きものである、たとへば夏目漱石氏の「虞美人草」中、才人小野さんなる者が夫れである、彼れは現代の代表的才子である、併し彼れは暗いところに生れた、そして暗いところから明るいところへ出るまでには大分苦しんだ、其の經過に就て作者は「水底の藻は、暗い所に漂ようて、白帆ゆく岸に日の當ることを知らぬ、右に揺るごうが、左りに靡かうが、翔るは波である、唯だ其の時に逆らはなければ濟む、馴れては波も氣にならぬ、波は何物ぞと考へる暇もない、なせ波がつらく己

れに當るかは、無論問題には上らぬ、上つた所で改良は出来ぬ、唯だ運命が暗い所に生えて居ると言ふ。そこで生えて居る。唯だ運命が朝な夕なに動けといふ、だから動いてゐる——小野さんは水底の藻であつた」と叙べて居る、素より水底の藻は、やがて水面で花を持つやうになるかも知れぬ、併し何時も根が無いのである、彼れが根の無い藻である如く、世間多くの輕薄才子は、皆な根を持つて居ない、自己と言ふものが無い、自信と言ふものがない、主張がなく根據がない、此の種の人間は、或は無事に一生を終るかも知れぬ、又た世間からも天晴才子と謳はれるかも知れぬ、けれども彼等は人間として、抑も何れだけの價値があるか、蓋し人間の生活の特色が、自覺的生活にあつて、且つ其の目的が、自我の實現にあるとするならば、自覺なく自己なく、唯だ浮き世の波のまに／＼動めいて斃れるものは、まつたく人としての價値なき者である、故に自覺なく自信の無いと言ふことは、何う考へても無價値なものである。

そればかりでなく自信のないものは、人に使はれる人とはなれるかも知れないが、人を使ふ人とはなれない、人の頭になることは覺束かない、單に人の跡を追ふことは出来ようが、自から人の先きに立つて仕事をするとは出来ない、しかも一生、人の尻にばかり付いて送らなければならぬ、ところで又た、蓋し自信の無いものは、とかく誘惑され易い、一旦踏み出した自己の道を、斷然として進み行くことが出来ない、されば人の言行によりて、始終左右せらるゝを免れない、随つて朝夕に變る人の評判に依つて、思はず朝夕に自己の行動が變る、此の如く無主義無節操な人間の手によりて、未だ曾て大業の果された例めしがなく、且つ新らしき何事も企てられたことがない、斯う言ふ者は、世の中に有つても無くてもよい人間である、然しながら自信の有無と言ふことは、格別家庭との關係はない、だが特に家庭の上に就て言へば、相當に言ふべきことはある。

惟ふに自信の無いものは、人としての價値がないと同時に、良人としても妻として

も、父としても母としても素より價值がない、故にに良人たり父たる者が、自信なく主義なき人であれば、妻子に取りては甚だ頼み甲斐の無い人である、當てにならぬ人である、信用の出来ぬ人である、それから妻たり母たる人が、自信なく主義なき人である場合にも亦た同様である、蓋し一家の柱石たる主人公は、言ふまでもなく自信力の強い人でなければならぬ、且つ如何なる場合に於ても斷然として自己の主義を押し通す程の強者でなければならぬ、之れは勿論いふ迄もない、併し妻君と雖も然うてなければならぬ、素より女は温和であり、從順の徳を心得て居なければならぬ、けれども夫れば、決して自信と相容れないものではない、眞に妻としての任務を果し、全く母としての天分を盡す上に、飽くまで強い自信を要する、此の點に就て、自信の無い妻自信の無い母は、妻たり母たるの資格を缺いて居る、勿論つまらぬところに、意地を張るのが自信ではない、素より自信とは自己の義務を感じ、自己の義務を果すところに、おのづから毅然として生ずるものであらねばならぬ、だからして自惚とは全

く違ふ、言ふまでもなく自惚は極力これを排斥しなくてはならない、併し自信は飽くまで強くなければいかぬ、自信なき妻君は他人の朝夕の評判によりて良人を評價する、惡意を以て良人の悪口を言ふ者の言をも信する、何事にまれ人の言ふことによりて自分の考へを左右する、斯う言ふ妻君は、又た人のおだてにも乗り易い、そして間違つたことをやる、故に人として自信の無いと言ふことは、眞に大なる缺點であらねばならぬ。

次に自信なき者は、自己の位置や境遇や性質なども考へずに、譯もなく人の眞似をしたがつて困る、假りに人が指輪を買へば、自分も指輪が欲しくなる、又た人が流行の着物を着れば、自分も流行の着物が着たくなる、それから人が芝居に行くと言へば、自分も直ぐに行つて見たくなる、デ何所の奥さんは、今度あんな帯を買つたから、自分もあれに負けないのを買ひ度いとか、また彼處のカミさんは、あんな着物を拵へたから、自分もあれに劣らぬのを拵へ度いと言ふやうな譯で、亭主が必要な物が買

へずに困つて居るのも、子供がボロを着て居るのも構はずに、唯だ自分のみ獨り、其の様なことに騒ぎ立てる、之れ自信の無い妻君である、輕薄な妻君である、身の程を知らぬ妻君である。一家の事を思はぬ妻君である、ところが徳性の涵養によつて築き上げられた自信力のある妻君は、たとへば地の下に深く喰ひ入つて居る大磐石の如く、他人の言説や周囲の空氣などによつて些の微動だもしない、だから自信と言ふものは、妻君に在つても必要である、たとひ人は何うであらうと、自分には其んな物は要らぬ、自分にはもつと、爲すべき大事なことがある、と言ふくらゐな見識が無くては困る、其の様な立派な心がけを有つて居なくては、素より一家の主婦たるの資格がない、ところで此の自信なるものは、爾かく妻君に於て必要なばかりでなく、子供に對しても亦た然うである、されば子供が徒らに人の眞似をしたがつたり、又た人の風俗を羨んだりしても、其の言ふが儘に夫れを妄りに許してはいかぬ、故に母たる人は、充分の自信を以て、子供に對して訓戒を與へる必要がある、勿論眞似でも善い眞似は

構はぬ、併し子供は寧ろ惡い事を眞似たがるものであるから、夫れに對しては充分抑制しなければならぬ、ところが既に母からして自信を失つて居て、無批判に「さうか、よし／＼」と、其の言ひなり次第に子供の要求を容れるやうでは仕方がない、素より自分に自信力が無ければ、やがて子供も亦た自信力が無くなるから、大いに心すべきことである。

第十九章 精神状態の基調より見たる人間論

氣質とは、人の心的また體的活動に影響を與ふる（時としては开を支配する）個人生得の特性を言ふ、換言すれば人の刺戟に對する感情の強弱遲速の原因をなし、意志的固執力の強弱を固有的に決する本來生具の心質を稱する、蓋し氣質の如何なるものに就ては、古來學者の種々視察または實驗によりて研究するところであるが、今日

まだ尙ほ一定の説明を設定することが出来ない、然しながら氣質は、其の本性に於て、遺傳的のものなる傾向著しき特殊性であり、しかも體質の關係より起こる生具の心質なることは、一般に學者の認むるところである、併し氣質は、其の本來の素質は、生得的または遺傳的のものでありとするも、境遇と教育とに依つて大いに影響せらるゝものであるから、善良なる氣質の涵養は、其の境遇を選び、教育を正しくすること最も肝要である、ところでカントは氣質を感情的 質と執意的氣質とに區別し、淡血質（即ち多血質）と濃血質（即ち膽汁質）と冷血質（即ち粘液質）は執意的氣質に屬すとした、又たヴントは情緒の強度と速度の關係より之れを四種に區別し、其の弱にして速かなるものを多血質とし、強にして速かなるものを膽汁質とし、弱にして遅きものを粘液質とし、強にして遅きものを憂鬱質とした、惟ふに氣質と言ふのは、吾人が生れつきの生理的組織、神経的組織の如何に依つて生ずる精神状態である、しかも氣質が人の思想感情、引いては其の事業や運命までも支配する力は、甚だ偉大なものであつ

て、おもに知的活動を専らとする哲學者の學說でさへも、其の根本の調子は、殆んど其の氣質によつて規定さるゝとさへ言はるゝ程である、素より氣質の差違は吾人の趣味、嗜好、好尚、認識、記憶、推理、判断等の一切に差異を來たすものである、蓋し吾人の境遇とか運命とか言ふものも、氣質の如何に依つて非常に動かされる、實に氣質なるものは、偉大なる人生的意義を持つて居るものである、ところで心理學上、氣質を大別して多血質、神経質、膽汁質、粘液質の四とする。

第一、多血質——此の質の人間は、外部の刺戟に對して、神経が甚だ鋭敏であつて、且つ感情を動かすことが甚だしい、其の心は常に動搖して落ち付きが無い、熱し易く又た冷め易い、彼れは常に快活である、鬱ぎ込むと言ふやうな事がない、悲しければ直ぐ泣く、可笑しければ大笑する、癪に障はれば向ッ腹を立てる、甚だ子供らしいところがある、だから人に接するには大層よい、人に憎まれない、人に不愉快な感じを與へない、しかも常に愉快で、面白くて、晴ればれとしたところがある、何時も其の

額ひに苦悶の皺を刻んで居るやうな事がない、だから多血質の人のみより成る家庭は、常に愉快である、笑ひ聲が絶えない、非常に花やかな又た賑やかなところがある、故に多血質は女に最も望ましいものである、併し男子の多血質は、餘り賞めたものではない、重みが無くて困る、威厳が無くて困る、意志が弱くて困る、そして又た何時も縮りなく、笑ひ興じてばかり居るやうなものも弱る、それから一寸した事に悲しんで見たり、泣いて見たり、怒つて見たりするやうでは、甚だ不見識である、素より男子に求むべき氣質は他にある、併し婦人は多血質が宜い、言ふまでもなく多血質の婦人は快活で、愛嬌があつて、顔に憂ひなく、音聲に曇りなく、よく人の心を和らげ、愉快ならしむることが出来る、蓋し婦人は之れでなくてはならぬ、然るに若し妻君が、神経質なぞであつて、常に蒼白い顔をして、目尻を吊り上げて居るやうでは、周圍に居るものが遣り切れない、第一家庭の空氣が曇つて来る、素より婦人が人生の花として、男子の慰藉者として、家庭の世話女房として價值ある所以は、彼等が甚だ快活優

美で、伶俐敏捷で、よく人の心を愉快にし、よく微細の點に世話が行き届く點にある、そして之れ主として多血質より来る賜物である、然しながら極端なる多血質は、女に於ても聊か考へものである、餘り心の動き易いものは、危険なところがある、彼れには遠き慮んばかりも無ければ、素より計劃も豫算もない、凡べての行動が瞬間的である、其の考へも亦、朝と晩とで著しく變る、要するに开は輕燥浮薄で、思慮に乏しく、事を過まら易く又た倦み易く、しかも其の云爲行動に、一貫の趣意の無いところが、一大缺點である、故に多血質の者は、充分この點に心して、輕佻に流れぬやうにしななければならない。

第二、神経質——神経質の特相には、多血質の夫れに似たところがある、其の多感にして、些細の事に心を動かす傾向あるは、稍や多血質と同じである、けれども神経質の者の心を動かすや、多血質の者の夫れに比して聊か遲鈍ではあるが、併し深くして強い、一たび其の心を動かしたことは、容易に之れを忘れることが出来ない、しか

も長く之れに執着して離れない、蓋し多血質の者は、常に耳目の奴隸となる傾きあるに反して、且つ神経質の者は、素より靜觀的冥想的である、前者は客觀的に偏し、後者は主觀的に偏する、前者は常に快活であるが、後者は常に憂鬱である、前者の感情は一時的であつて、パツと燃え立つかと思ふと直ちに消え去ること、紙の火に燃ゆるやうなものであるが、後者の感情は永續的であつて、一たび熱すれば容易に冷めざること、鐵の赤熱せられたるが如きものである、此等は二者の相異點である、ところで神経質は、餘り好ましいものではない、特に女の神経質は目出度くない、然しながら男の神経質には、時として非常の天才があつたり、又た非常の學才があつたりする、たとへば彼の釋迦基督の如き大宗教家を始め、古來の大哲人大科學者大藝術家と言ふやうなものは、大抵みな神経質の人に多い、併しカーライルの妻君が、英國の年若き女子に對して、「決して天才の妻となる勿れ」と言つたのに徴しても分るやうに、天才とか學者とか言ふやうなものは、所詮家庭的には不向きな人間である、彼等は畢竟野

の人であつて家庭の人ではない、彼等は家庭の人として餘り面白いものでない、第一神経質の者は氣むづかしくて困る、御機嫌が取りにくくて困る、けれども妻君にして若し能く良人に仕へる道を知り、よく良人を慰め得るだけの資格を持つて居れば、男の神経質はさまで家庭の幸福に關係するものではない、并は言ふまでもなく家庭の不幸が、専ら妻君の如何に依るものであるからである、素より妻君は家庭の中心人物であるだけに、又た其の愉快と幸福との源泉であるだけに、其の神経質は最も忌むべきである、ところで男性的の神経質は、大いに取るべき點があるが、婦人の神経質に至つては、殆んど何等の價値がない、蓋し婦人の價値は、元來その快活優美なるところにある、然るに神経質は、此の美點を滅却するものであるからである、しかも神経質の婦人は愛嬌が無い、其の多くは顔色蒼白であつて、肉落ち皮膚に艶やが無い、或る者は額上常に青筋を現はして居る、且つ眼は吊り上がつて、口元に峻がある、そして快活でない、何時も憂鬱な顔をして居る、我が強く負け嫌ひで、傲慢で、自惚が強く

て困る、逆らへば直ちに反抗する、賞めれば圖に乗る、加ふるに嫉妬猜忌の念深く、陰險にして邪推深い、唯だ無暗に勝氣で剛情で、人に服するを無上の侮辱と心得て居る、彼れには自己の非を觀するの能力が無い、何事に於ても、自分は正しくて、相手は間違つて居ると思ふ、其の座作進退に優さし味なく、其の言語は荒々しい、此の種の女は家庭の妻として最も不適任なものである、斯う言ふ女は、元來母婦氣質では無くて、娼婦氣質である、飽くまで我儘勝手な生活を求むる、されば人の妻として良人に侍づき、或は嫁として舅や姑に仕ふるやうな事は、彼の女の到底甘んじ得ぬところである、斯かる女子が一朝誤まつて人の妻となる事あらんか、彼の女は其の家庭をして、所謂嬈天下たらしめずんば止まない、今の世、此の種の妻君に乏しく無い、實に忌まはしき限りである、故に神經質の人は、よく自分の氣質を自覺して、努めて其の缺點を取り去るやうに注意せねばならぬ、蓋し氣質と言ふものも心の持ちやうでは、随分これを矯めることが出来る、ところで神經質の者の最も注意すべき點は、努めて

氣を快活に持つこと、心を平靜溫和に持つこと、我儘傲慢の念を抑制すること、充分攝生に心を用ひて常に身體を健全に保つこと等である、素より自分一個の氣質の弊は、單に自分一個を傷つくるばかりではなく、引ひて周圍の凡べての人々に害を及ぼすものであるから、大いに自から省みて修めねばならぬ。

第三、膽汁質——此の質の者の特質は、外界の刺戟に應ずることが、甚だ活潑であると同時に、又た甚だ強い、之れを多血質の者に比する時は、餘程強い刺戟で無ければ、充分の反應を爲さないが、併し一旦反應すると、甚だ確實にして且つ持久的である、故に膽汁質の人は彈力性に富み、意志が甚だ鞏固である、随つて些細なことに驚かない、さればと言つて無神經なのではない、素より感ずることは能く感ずる、併し自制力強く、又た自己の常に取るべき態度を充分に自覺して居るから、決して騒がないのである、だからして政治家や軍人などには、極く適しに氣質である、古來の英雄俊傑は、専ら此の氣質の人から出た、故に膽汁質は即ち最も男性的の氣質で、従つて

女性には殆んど稀れである、蓋し一家の主人たる者は、一方には妻子を提さげて、他方には社會と戦はねばならぬものであるから、是非膽汁質の人であつて欲しい、そして如何なる困難とも戦ひ、又た如何なる苦痛をも切り抜ける底の、飽くまで男らしい人であつて欲しい、でなければ一向頼みにならぬ、猶ほ又た一家の隆盛を計ることも出来ぬ、併し唯だ一つ、膽汁質の人の缺點とすべきは、とかく亂暴に流れたり、破壊的になつたり、冷酷に傾いたりすることである、だから彼等の間には、往々にして大酒家であるとか、但しは豪遊家であるとか、且つ無慈悲冷酷なる専横家であるとか言ふ者があり易い、たとへばローマのネロ皇帝の如き、我が國の清盛の如き、何れも膽汁質の人間である、唯だ徒らに剛に走つて、勢ひ柔を忘れる、されば妻子が路頭に迷はうが、親が苦勞をしようが、親戚知友が迷惑をしようが、とんと一向に構はぬ、しかも自分の事業、自分の利益、自分の名譽の爲めには、たとひ百千萬の人間を犠牲にしても構はぬと言ふやうな具合で、血も涙も無いと言ふところが、膽汁質の人に往々

見るところの大缺點である、思へば人間、唯だ強いばかりが偉いのではない、徒らに剛なるが必ずしも俊材なのではない、妄りに人を犠牲にするのが強がち偉大なのではない、素より人としては血も涙も無ければならぬ、又た物の哀はれを知らなければならぬ、謂はゞ剛の中に柔を宿し、威あつて猛からざるところが、人間には最も大切である、だからして膽汁質の人は、深く此の點に心を用ひなければならぬ、ところで世には、男勝りと言ふ女がある、之れ大抵膽汁質の女である、そして時に世は、此の種の女を稱讚することがある、併し吾人は取らない、言ふまでもなく婦人の價值は、婦人らしいところにある、夫れなのに、婦人が男子の如くあつたからとて、何の價值があるか、素より男子らしい人間は男子だけで間に合ふ、何も婦人までが男性化する必要はない、第一それは天意に戻る譯である、凡そ世の中は、駄のみでも駄目だし、柔のみでも駄目である、即ち二者具足して、相扶け相補はねばならぬ、と同じく男子と婦人と、相異なる此の二性が協同して、ともに相助け合つてこそ、人生に調和もあ

り、味ひもある、斯くして二者は、何所までも異なつて居らねばならぬ、されば女らしい男の忌むべきが如く、男らしい女も亦た忌むべきである、蓋し家庭は、男女両性相集つて共同の生活を營み、相互に相待ち相扶け合つて、そこに圓滿なる福樂を齎らすのである、そして人間、活き甲斐ある快適の生を送り得るのである、然るに二者、若し其の性を同じうする場合には、互ひに相衝突するばかりで、到底愉快な家庭を結ぶことが出来ない、故に妻君が胆汁質であり、男性的であることは喜ぶべき現象でない、ところで若し然う言ふ傾向のある婦人は、自から深く戒めて、出過ぎた態度や放膽な行爲を充分に抑制し、何所までも女性的な、優さしい點を發揮するやうに力を用ひねばならぬ、されば男勝りだなど、自から信じて、殊更ら男めいた態度を取るやうなことは、婦人として半文の價値も無き次第であると同時に、又た人の妻として一家の主婦として寸毫の價値もない、俗に「女さかしうして牛賣り損なふ」と言ふことがあるが、女だてらに男氣を出す程、有害にして而も無益なるものは無いから、深く心すべ

きである。

第四、粘液質——粘液質の特質は、刺戟に對する感情および反動の遅い上に、又た甚だ弱いところがある、故に容易に外界の事物に動かされない點は、胆汁質の者に似て居るが、併し活氣乏しく、強きところ無き點は甚だ違つて居る、しかも粘液質の者は、薄すばんやりして居て、まるで馬鹿のやうである、又た神經の鈍い點から言ふと、慥かに一種の馬鹿である、そして恰も氣の抜けた麥酒の如く役に立たぬ、蓋し男よりも女の方に此の性質が多い、たとひ良人に如何に虐待せられても、如何に世人から後ろ指さされても、又た如何に主人から侮辱を蒙つても、一向に感じが無く、平氣で居ると言ふやうな者がある、之れ粘液質の人間なので、女中だとか、貧乏長屋の女房さんなどに屢々見るところである、然しながら男子の粘液質には、時として西郷南洲のやうな人物の出来ることがある、けれども普通の場、餘り望ましいものではない、特に婦人の粘液質には困る、氣が利かなくて用が足りない、客が來ても應對さへ旨く

出来ぬ、良人の世話でも子供の面倒でも充分に行き届かぬ、第一無精で弱る、汚ない事を一向苦にせぬ、且つ神経が鈍いから、良人の身に大事が起ころうが、一家の上の不都合が生じようが、平氣で鼻唄を歌つて居る、こんな事では、到底家を治める譯に行かない、總じて粘液質のものは、感情平坦にして刺戟の反動が鈍いから、自然身邊の事物に對する注意甚だ尠なく、萬事平和と圓滑を好み、激越なる極端的云爲行動を厭ひ、常に謙讓であり中庸であるので、極度の過失に陥ひるやうなことがない、夫れが爲め従つて英斷に事を處し剛毅に活動を進むこと能はず、多く向上の精神に乏しく、難局を切り抜けて發展の域を建設するが如き潑瀾たる活力を有することが出来ないから、粘液質に富めるものは、其の改善を計らんが爲めに、宜しく注意力を涵養し、眞摯と活動を以て事物に當るの習慣を養ふべきである。

一と口に言へば、氣質と言ふことは、氣分の性質と言ふことであるが、詰まり吾人が先天的に受けて來た個人々々の心的様式と言ふのである、即ち人は其の胎生の始め

に當つて、一定の生理組織を享受すると同時に、又た其の人の固有な或る精神狀況を發現すべき細胞を享受するのであつて、夫れに依つて發現された精神狀況が、直ちに其の人の回想精神とも、また其の人の氣質とも稱せらるゝのである、けれども此の氣質の本體である其の人の固有精神は、其の人の生涯に向つては原始的のものであるが故に、其の人の生活、運命、事業などは、皆な此の氣質から割り出されるので、其の精神發動の諸状態が、一々これに支配されるのであるから、氣質は其の人に對して最も大切なものと言はなければならぬ、ところで猶ほ一つ、付け加へて置かねばならぬことは、結婚と氣質とに就てある、素より男女兩性相集つて、茲に完全なる人格を成す譯であるから、二者は飽くまで各々の補缺たることが必要である、即ち一方の足らざるところは、他方で之れを補ひ、他方の足らざるところは、一方で之れを補ふと言ふ關係が無ければならぬ、故に氣質に於ても、二者は全然相反して居る方が宜いで、良人も妻も同じ氣質と言ふのは、家庭の和樂上より言つても、子供に對する影響

から言つても、餘り感服出来ないことである、蓋し男子が膽汁質であれば、妻は多血質なのがよい、又た男子が神経質であるならば、妻は寧ろ粘液質に近いのがよい、其の他、凡べて自分の氣質とは、反對の氣質を持つて居るのが、最も理想的である、それで無いと、家庭に於て調和が取れぬ、併し詮じ詰めて言へば、男性の特質は膽汁質であり、女性の特質は多血質であるのだから、男子は妻を選ぶに多血質の者を以てし、女子は良人を選ぶに膽汁質の者を以てすることが、先づ大體に於て、無難であると思ふ、要するに反對の氣質を選ぶのが宜いのである、蓋し吾人が生活の本位たる家庭を形ち造る根柢は、言ふまでもなく良人と妻とである、即ち男女の結合である、されば賢愚貧富の差別は別として、配偶者選擇の適不適が、直ちに生活の幸不幸に及ぼすことの如何に深大なものがあるかを思ふて、其の生活をして、眞に豊富に快適に圓滿ならしめたいと希望せらるゝならば、先づ其の獨身生活を離れて、自己の家庭を構成せらるゝ前に方り、よく熟慮考察すべきである。

第二十章 戀愛至上主義より見たる人間論

人の貴賤に論なく、國の東西を通じて、男女の性愛には、永久不滅の力が動いて居る、人間の燃ゆるが如き情熱と、感激と、憧憬と、欲望との白熱化せる結晶とも見るべき戀愛には、悠久永遠の生命の力が籠つて居る、されば全身を投げ出して、我が愛人の魂の中に没入する、之れ人生至樂の極致であり、無限の満足ではあるまいか、然り、戀愛は人生最高の幸福にして、また強烈なる人類の情熱である、戀人同志が一心同體となつて、我が愛人の爲めには、身をも心をも捧げて惜しまぬと言ふ究竟に達したるとき、茲に神人合一、涅槃に於けるが如き宗教の極致と一致するものである、眞の戀愛三昧に入り、此の醍醐味の甘き香に酔へる人々は、一國宰相、巨億の富を有するものよりも、更に得意の境遇に置かれてあるものと言つて宜しい、戀愛と言ふ言葉は英

語の所謂ラブと言ふのが夫れで、日本語では戀は兩性間の性的關係を意味し、愛は純潔な肉を離れたプラトニツクな意味に用ひられて居るが、根本に於ては凡べて性慾的動物的内容に立脚したものである、廣い意味で戀愛とは性慾の美的發露に外ならぬので、男女兩性の一種の欲求的心理現象である、そして其の發作の動機にも種々あつて、必ずしも一律に見る譯にはゆかぬけれども、要するに内在せる性慾と外圍の刺戟や自然の誘惑物との一致とでも言はうか、孰れも一種動物的自然性であるが、神聖且つ理想的に此の要求を完うせんには、必ずしも嫌厭すべきではなく、否な寧ろ前述の如く人生の大道を踏むものとも言へよう。

然るに墮落の青年男女が不潔な劣等な徑路によつてのみ性慾を發露するは、全然獸性であつて、眞の戀愛たる要素は毫も含まれないのである。動物類とは異つて靈性あり良心あり反省ある吾等は、此の點に鑒みて、大いに慎戒しなくてはならない、彼の文化的ならざる動物に近い野蠻人などは、吾等の耻づべき一種の戀愛をする、凡べて

強奪的な腕力を以て強制的に行ふので、動物と何の擇ぶところはないのである、獨逸の人種學者の報告によると、或る野蠻人で、二人の男性が一人の女性を得んことを欲する場合には、双方から二人の男が一人の女の手を把つて引きくらを行ひ、勝つた方が其の女を占有するのださうであるが、實に言語道斷のことである、然しながら教養ある文化的新人にして、尙ほ且つ權勢とか金力とか、爵位とか學位とか言ふ一種の腕力を以て、清貧なる高潔の人格者と競争を試み、彼の女の弱點なる享樂心や虛榮心に附け入り、巧みに目的物を我が有にして戀の勝利を誇るが如きは、強奪的強制的に戀愛を遂げる野蠻人等と何の擇ぶところがあるまい、开は姑らく措き、文明國の人々にありては、此の戀愛なるものが、精神的に進化して、彼の性慾の如きは、遙かに此の戀愛の陰に匿かれて、容易に其の本能を認めるのに苦しむことが往々ある、中には全然精神的意味に壓倒されて、肉慾の要求とは没交渉とさへなつたものが往々ある、そして之れが果して戀愛であるかと思はれる程、デリケートな事實と合致したのもあ

る、生活が複雑な爲めに、手取り早く運べないのであるが、併し孰れにしても、戀愛は其の初めに溯れば、性慾の上に立脚したもので、之れに精神味や靈味の加はつたものである、そして其の加はり方の少ないものは劣等な野蠻人や下等な動物的の劣情に過ぎないが、相關的に兩性が靈味を加へ思想を加へて理想の境に立脚地を求めんとするものは進化した教養ある人の戀愛である、人間が性慾を意識して、性の感覺が開いて來れば、従つて他を愛するの欲望が起つて來るのは當然なことである、で戀愛は如何なる徑路から起つて來るかと言へば、人間の感覺から主として起つて來ると、周圍境遇上の同情同感から起つて來るとの二つある、蓋し下等動物が兩性相引く最初の感覺は嗅覺であると言つた學者もある位で、嗅覺、視覺、聽覺、觸覺等すべてが性慾を感じる道具であつて、進化論者に言はせると、人類も初めは嗅覺が性慾を感じる一感覺であつたらしい形跡があるさうだ、然しながら視覺によつて性慾を感じることに、即ち戀愛を發作するのは、今日社會一般の風潮であつて、視覺の歡合、視覺の快樂、視覺

の満足、之れが即ち多くの戀愛の第一歩である、されば彼の社會の男女が美粧し美扮し美飾して、色彩の艶麗を競ふのを見ても了解が出来る、其の他聽覺によつて戀愛に陥る青年男女が無數にあることは、彼の音樂家や歌劇俳優や美音家などの周圍を吾々が觀察すれば直ちに知ることが出来るので、人も知る露西亞の文豪ツルゲネーフの如きは、美しくもあらぬ音樂家の肉聲に魅せられて、熱烈な戀に溺れたのである、また接吻なるものは、母子の唇と唇との接觸に源を發し、遂に異性間に行はるゝに至つたものである、それから周圍境遇の上の同情に起る戀愛は、比較的幼稚なものと劣等なものともあつて、何等根據のない少年少女が幼な馴染みの一步一步と心胸相觸れ、肝膽相照して遂に其の原因をなすに至るものである、また良家の處女等が自意識もなく、愛の何者なるかを解せざるに、周圍の誘惑が近因となつて、墮落の深淵に陥るが如きは、父兄及び各自の大いに誠むべきことである。

ところで戀愛の目的は、要するに肉慾の満足と精神の満足との兩方面にあるので、

肉慾の愛情にも、精神的の部分が含まれて居るし、精神的の戀愛にも、一步深く切り入れば肉的部分があるのが戀愛の徑路である、唯だ精神的の快樂を追ふ戀愛であれば、崇高な美に撲たれるのであるけれども、其の基礎は不動なものではないのである、尤も斯う言つた性質のものは、場合に依つては犠牲的献身的の熱情もあり、神聖な気分もあるが、一旦その熱情が冷却するやうな場合があると、まつたく無關係のものとなるのである、彼の年少者のうひ／＼しき戀愛は、多く精神的であつて、唯だ只だ甘い蜜のやうな小説的のドリームを心に描いて、對手の異性から精神的の愛情を享けんことを希ふのであつて、何等肉體の上に性慾の自覺を有して居ない、だから失戀などした場合には、可なり深刻な悲哀を感じるが、夫れは詩のやうな悲哀であつて、文藝的な哲學的な煩悶懊惱である、併し一旦肉體的に入つた戀愛であれば、夫れが浮氣な唯だ享樂主義のものでない限り、比較的堅固なものが多いのである、精神的戀愛が順調に進行して、肉體の上に統一すれば、茲に靈肉合致した終局が來て、光明的な結婚と

もなるのである、そして圓滿な家庭を作るやうになるのである、即ち眞の現實界の生活と結合されて、戀愛もまた茲に確乎不拔の確實性を具備するに至るのである、此の故に余は彼の夢幻的のロマンチックの戀愛を以て最も美しい神聖な戀愛であると言ふ人の心が理解されぬ、吾々の生活が來つて道德も哲學も倫理も凡べて其の上に築かれるやうな戀愛でなくては到底高級な戀愛とは思はれぬ、世間でよく言ふ神聖な戀愛とは何んなものであるかと言ふに、單に性慾的な肉慾を離れて居るものならば神聖だと思ふかも知れないが、決して然うではないのである、神聖の文字を附すべき所は肉の如何では無くて、戀愛の自覺の如何であり、道德の如何であり、生活の如何である、素より肉と靈とは戀愛上の二大要素には相違ないが、肉のみの戀愛は下等であり、動物的であり、墮落したものであると同様に、精神だけの戀愛も形式的で、皮相で、幼稚であると言ふことが出来る、されば理想のある、目的のある、道德的の戀愛は、どうしても**生活上の戀愛**であつて、孰れの點に於ても、兩性が合致した生活を此の天地

間に送るやうになつて、茲に始めて神聖な戀愛と呼ぶことが出来るのであると思ふ。彼の歐洲に於ける人類改造論の先驅者であるところのユレンケー女史は、「社會を改良して、美しい完全な人格を出現せしめるには、兩性間の戀愛問題から初めなければならぬので、眞の戀愛が社會に行はれ、ば、人類は進化の理想が成就されるのである。一體兩性の神聖なる戀愛は、人間生活の目的である、然るに今日行はれて居るところの結婚などは、たとひ此の戀愛の脈があつたにしても、要するに不健全の分子を多量に含み、社會制度や道徳も亦、戀愛の本質を無視して根本の重大な意義を没却して居るので、人生は少なからず發達を阻害されて居るのである、凡そ戀愛程人生に感動の深いものはないので、眞の戀愛にのみ男女の生活力が含まれて居るのであるし、眞の清い人格を生むのは、此の戀愛に過ぎないのであるから、人類社會の發展の理想を成就し、他に自己満足の充實を現實するには、唯だ眞の戀愛に頼る外はないのである、之れが完全に實現されて、初めて社會と個人の目的が一致するのである、今日ま

での戀愛が誤まれた戀愛であるから、従つて結婚も誤まれた不自然極まるものであつて、離婚なども、遺憾ながら、道徳が之れを防ぐだけの權威を持たないのである、しかも戀愛は餘程嚴肅な重大なもので、人生の生活の根源は、すべて茲に歸着すると言つても差支へない位である、換言すると戀愛中心の人生は、戀愛が人生であると言ふことが出来るのであつて、人生の一切の風俗、習慣、制度、文物は、凡べて此の戀愛觀から表はされるべきもので、文藝も、科學も、哲學も、宗教も、皆な悉く此の根本的の戀愛觀の上に築かれなければならないのである、されば一切の生活に涉つて之れを統率して居る眞心の戀愛は宗教であつて、神聖なものであるから、人生は此の戀愛の中に神も信仰も見出すべきである」と言つて居る、ところで金子筑水氏は之れに附加して、「此の戀愛生活を根本から改良することは、新文明の光りを作ることであつて、今日の戀愛生活の頹廢の状態を、宜しく進歩發達させなければならぬのである、けれども戀愛生活そのものと、廣い人生の生活とは異つて居るものであつて、一

切の複雑な精神生活は、戀愛生活とは區別して置かなければならないのである、人生の生活は必ずしも戀愛が中心であるか無いかは兎に角として、更に他の男性的の生活があるのだから、凡べてを戀愛生活の一色中に混じ去らないで、人生の眞の人格を造ることが人類生活の最大事であるとすれば、戀愛生活は其の手段であつて、目的ではないから、其の間を區別して置かなければ^ない」と言つて居る、それから厨川白村氏は、「——生の欲求は、やがて人間の色々な創造生活となつて現はれる、そのなかで最も大きな最も自然な、そして最も深い欲求は、新しい生命の創造である、人間が新しい生命を創造し、子孫といふ形で自己を永久に保存する事は、異性との結合によつてのみ成される、そこに戀愛は生ずる——兩性間の戀愛が性慾に根ざしてゐる事は今人の誰しも疑はない所であるが、唯だ夫れが動物とちがつて、人間への進化と共に、淨化せられ醇化せられて最高至上の道德となり藝術となつてゐる事は考へて見ねばならぬ——現代の最も進んだ考へ方から言ふと戀愛の心境は即ち（自己放棄に於ける自己

主張）だと見られてゐる、おのれの愛する者の爲めにおのれの全部を捧げる事は、つまり最も強く自己を主張し肯定してゐるのである、戀人のうちに自己を發見し、自己のうちに戀人を見出したのだ、この自我と非我とのびつたり一致する所に、同心一體と言ふ人格結合の意義がある、それは即ち一方から言へば自我の擴大であり解放である、小我を離れて大我に目ざめるからだ、宗教の法悦も戀愛の三昧境も同じである、宗教家が求むる大悟徹底とか、或は神の國、彌陀の淨土に達すると言ふ心境は、完全なる自我の解放、眞の自由生活に外ならぬ、それは唯だ一つ全き自己犠牲自己放棄によつてのみ到達し得られる絶對境である」と言つて居る。

愛さへあれば、たとひ女が、藝妓や娼婦であつても、我が家の妻として、何んの耻づるところがあらう、いくら醜業婦だつて、それが人間である以上、神や佛の目から見れば、同じく人の子であるから、眞に悔ひ改めて眞人間になつたとすれば、何んとかして之れをよい方に導き、人間らしい生活をさせたいものである、親の身としては、

不具な子ほど可愛い、盗みする子は憎くなくて、緇打つ人を憎むのは親の情である、神や佛は、斯う言ふ境遇な人ほど、憐み給ふに相違ない、身は従つても心までは従はぬと言ふものがある、カイザルのものはカイザルに返せ神のものは神に返せではないが、靈性の獨立を主唱するものである、我が肉體は汚れて居ても、眞に靈性は清い――と信じて疑はなければ、开が不純な血も肉も浄化されるであらう、たとひ罪人にして、心から本當に懺悔して、廣大無邊の慈愛にすがれば、神も、佛も、直ちに人の罪を許して、温かき大自然の懷ろに抱き給ふ、即ち心の目を開いて自覺した時が、肉體の浄化された時であつて、よし肉體は汚れて居ても、決して心は汚れて居ない――と言ふ信念　たとひ悪人でも既に悔悟して、心に南無と佛を念じ、神よ救せと頼めば必ず救はれると言ふ信念が尊いのである、此の信念なるものは素より元始的事實であつて、内而生活の花であり、且つ悟るべくして言ふべからざるものである、尙ほまた直覺的神秘的であつて、眞理以上のものであるから、斯かる消息を得たものでなければ

ば、到底永久に味識することは不可能であり、理論的ではなく、神秘的詩的のみにみ解する者のみの味識する所であつて、實に哲理科學を超越し、彼の生理學者や心理學者や實驗心理學者などの一歩も踏み入るべき範圍でない。されば愛のあるところ、結合した男女は、即ち神聖の夫婦である、たとひ夫れが既に男を知れる女だらうが、幾人も妻を持つた男だらうが、純眞の戀によつて成立し、眞の一夫一婦であるなら、公然手を相携へて、神の御園を逍遙し得られる、若しまた如何に童貞を持つる男でも、純潔を保ち來れる處女にせよ、眞の愛が無くして、同棲したとすれば、それは忌まはしい姦淫である、故に十年同棲の夫婦でも、愛が無くなつたら、相離れても差支へない、そして他に愛する對手が見つかつたら、遠慮なく其のものと結婚することだ、然う斯うして居るうちに、双方が年を老つて、生殖の力が衰へてしまへば、あとは茶呑友達でなことで、死ぬまで何うか斯うか一緒になつて居られようから、御方便なものである、だから若い間だけ、戀が冷めず、過まち無くして行かれ、ば幸ひである、よく淨

これは、愛の神聖性を強調して、純潔さを説く文章の註文として書かれている。

此の文章は、愛の神聖性を強調して、純潔さを説く文章の註文として書かれている。これは、愛の神聖性を強調して、純潔さを説く文章の註文として書かれている。

瑠璃に出る文句だが、二世も三世も女夫ぢやと思ふて居るに情けないとか、此の世は愚か五百生まで變らぬ夫婦なんて言ふのは、佛教の「唯心の淨土」を客觀したり、輪廻轉生から來た思想であつて、釋尊の眞意ではないのである、开は姑らく措くとするも、人間が死んで天國や淨土へ行くと、其の肉體は直ちに靈化されるから、男女の區別がなくなつて、皆な一律一體に同性のものとなる、此の故に基督教でも、男女の再婚を立派に認めて居るのである、余は哲學者としての立場から、人間の未來、死後に生活があるか何うかと言ふことに就て考察すると、世の宗家などの言ふやうな、天國とか極樂などの無いと言ふことを斷言するものである、人間の生命なんてものは、一言にして云ふと、彼の線香花火のやうなもので、パチ／＼跳ねて美しく燃えては居るが、やがて火の氣が失せると灰になつてしまふのと一班、此の世に生存して居る間だけしか意識はないので、肉體の死と共に、其の精神もまた消滅してしまふものである、斯く觀じて、夫婦と言ふものが、此の世だけのものとする、勢ひ愛のあるところ

る勝負とならざるを得ぬ、清いとか、汚れたとか言ふのは、つまり氣の持ちやうで、彼の賤が伏家も、詩化して見れば、俗惡の金殿玉樓に優るが如く、凡そ結婚に取つて一番重大な愛さへあれば、對手が處女であらうが無からうが、再婚でも三婚でも差支へないではないか、要するに男女二つの魂の溶け合つたのが、即ち戀愛の成就、結婚の證左であるから、彼の虚飾的な結婚式なんかは素より不必要である、唯だ开が知己友人に紹介するの意で、其の經濟の許す範圍内に於て、單なる披露の宴を張るは人々の自由である。

たとひ公爵令嬢だつて、世界的大學者だつて、女工さんだつて、車夫だつて、戀愛の本質に差別はない、今や世を擧げて偽善虚偽、皮相だけ綺麗に、薄すッべらで小慥巧に、不安定な、胡麻かしの、精神的その日ぐらしの生活をして居り、しかも國と國、人と人との交際は愚か、自己の全生命を捧げ合ふべき、夫婦間にさへ權道が用ひられ、技巧が弄ばれて居る、早い話が、良人は友を訪ねるやうな振りをして外出し、待合の

四疊半で藝妓を相手に花柳情調に浸るが如き、妻はまた墓参にでも出かけるやうに見せかけて、其の實は劇場裡の人となり最良役者に恍惚として居るやうなものもある、ところで其の一例としては、人も知る芳川鎌子と自動車運轉手、松井須磨子と島村抱月、原阿佐緒と石原純、白蓮女歌人と某法學士、波多野秋子と有島武郎、武者小路の三角戀愛は何うだ、开は愛なき、形式的な、媒妁結婚の、缺陷に對する反映ではないか、さすれば上流階級などの家庭に、眞の夫婦婦和、良人の悲しむ時には妻も隨つて歎き、妻が嬉しさを感ずれば良人も共に喜ぶと言ふ風に、美しき一心同體、眞の戀愛に立脚した、所謂苦樂を共の、實を舉げ得るものは恐らく曉天の星だらう、想ひ起こす遠き昔日の頃、彼の門閥とか家系とか生れとか言ふ階級的差別が劃然として區別されて居り、絶対に打ち越え難い溝渠を作つて居た徳川時代ですら、尙ほ且つ「戀に上下の隔てな

絶對に見解の下に、戀の神聖と愛の自由とを默許した形になつて居たのである、
 況んや人格本位、實力主義によつて、昔日の門閥とか家系とか生れとか言ふやうな階

級的差別は全然その意味を失墜してしまつた現代に於ては、眞に戀愛こそ絶對的に平等相であるから、宜しく戀人同志は开が地位の程度や貧富の懸隔などには顧慮せず、己れを愛する者の爲めに全生命を捧げ、性的にも靈的にも、至上の幸福と無限の満足を得なくてはならない、茲に注意すべきは、人間味に富める下層社會に於ける人々の戀愛關係は、开が赤裸々の野趣滿々の裏に、科學の宗教に對するが如く、上流階級に於ける男女の夢想だも及ばぬ自然なる情合、純眞なる感激、憧憬、唯信の絶對價値の上に築かれて居る、たとへば姑の面倒から、學校へ行く子供の世話、嬰兒に對する取り扱ひ、良人の身の廻りに至るまでの心遣ひは並み大抵なことではない、それに三度の食事、洗濯物、少なからぬ家族の着物を縫ふ外、子供の小遣錢の料にもとて、裁縫の賃仕事を勵み、また折りをり店へ出て商ひをする、眞に良人の職業を理解し、そして之れを助けて成功せしむるやうに心がけ、我が着物一枚ねだるでなし、物見遊山に行きたしと求めず、唯だ良人の愛に浸つて、思ひ思はれる温かい情合を味はつて満

足して居る良女房を見る時、余は眞に涙ぐましい迄の心強さを感じる。

ところが貧乏人は世上の譬への通り子澤山で、子供が殖えれば殖えるほど勢ひ貧乏の上塗りとならざるを得ない。其の結果生活難に陥り、快適の生を送ることは不可能であらねばならぬ。統計の示すところによると、日本は世界一の多産國であるが、両親の榮養が不良であるところから、また同時に世界一の多死國であることは考ふべきである。且つ無産階級の人々が、頻りに子供を産むのはよいが、生活難の爲め思ふやうに教育も出來ず、延いて其の生計を幾分助けさせようとして、未だ義務教育も終らぬうちに、工場へ通はせて賃銀労働をさせてるやうなことは世間普通事とされて居る。中には男の子を小僧に出すのもあり、女の子は遊藝を仕込んで藝妓の下地ツ子にする。世に無智や低能兒や不良少年や賣春婦などの絶えないのも故なしとせぬ。尤も社會的地位ある富める資産者絶対に優良であり、社會的地位なく貧しき無産者必ずしも不良であるとは言へない。否な寧ろ知名な人の方に悪事を働くものがあり、無名な

者の方に比較的善人があるやうな場合もある、ところで彼の優生學上からホツプハウズ教授は、「吾人は社會に有効なる性質を備へて居る所謂良種の人々の子孫は、次第に之れを社會に繁殖せしむるやうにし、之れに反して社會に有害な性質を備へて居る人の子孫は、なるべく之れを絶滅するやうにし、斯くて出來るだけ良種を子孫後昆に残して行かうと期待するものである」と言つて居る。若し夫れ此の點に見て、謂ふところの貧乏人の子澤山から、やがて人口が過剰になれば、夫れに伴ふべき食糧が不足せざるを得なくなつて、智識階級は就職難に陥り、労働階級は賃銀の低下を免れず、果ては淺ましい共喰ひの醜態を演じ、精神的にも物質的にも苦痛と弊害とを嘗めなくてはならないから、我が子に充分の榮養を與ふこともならず、且つまた其の教育も満足に出來ない結果、勢ひ優良ならざる人間を造らざるを得ないので、何とかして之れが救匡の策を講せざるまい、然るに制慾は不自然であるから、生殖せずして本能を充たすやうにし、之れによつて自分の力の及ぶ數だけの子供に全力を注いで完全の

教育を授け、社會の人員が過不足なく調節せられるに於ては、夫れが爲めに國民の體格は優良となり開が健康は保維され、随つて死亡率の遞減するに至つることは確かであつて、漸次に一國の文化は進み、一家の經濟は豊かとなり、斯くして快適の生を送ることが出来るやうになるのである。

翻つて惟ふに、人生問題は取りもなほさず社會問題であつて、また國家問題ともなるのである、眞に社會が理想され、藝術化され、道德化されたならば、勢ひ社會を構成するところの個人の生活も道德化され、理想化されるのは當然なことである、近代の社會思想は餘程戀愛の進化を認めて來て、戀愛の根本は性慾であり、肉の欲望であつて、動物から人間に進化した、精神的の色彩が加はつたのであると言ふことに略ぼ一致して居る、昔の人のやうに戀愛の爲めの戀愛としか理解出来ぬやうな單純な考へを抱くものは少ないのである、孰れも複雑な性質に及ぼして生活の問題に堅く結びついて居るのである、だから年少者は夢幻的の戀を胸裡に描いても、忽ちの中に物質の

方に破られて、空しい幻影を虚空の一角に描いて居るのである、そして直ちに自覺の聲によつて戀には何等の永久性の無い平面になり勝ちの淡い夢に過ぎなかつたことを悟るのである、空想によつて見た異性は、美の神であつても、教育によつて、科學によつて養はれた眼や、五官を辿つて、異性に對する時に來る戀は何であらうか、夢の如く、日夜描いた幻影を刻々に破壊して居るのみで、唯だ空しく残るのが胸底一塊の性慾の要求——夫れが今日の兩性の思想であつて、幻影的の戀愛をするには餘りに前途が見え透いて居るのである、精神の戀、靈の戀はどれ程までに肉を超越し得られ、また果して超越することが幸福であるかどうかも疑問であるし、情死をするほど調和して居るやうに見えても、眞に兩性の戀が極致的の靈肉の調和に達し得たものであるかどうかも甚だ疑はしいことである。

第二十一章 優生學進化論上より見たる人間論

自然界は一の生存競争の巷であつて、鳥囀へり、蝶飛び、花が咲くからと言つて、自然は楽しい所と思ふならば誤まりである、彼の鳥囀へり、蝶飛び、花が咲くにも、如何に大きな生存競争が起つて、夫れが爲めに多くの弱者が犠牲になつて居るかゞ、少しく裏面に入れば分るのである、たとへば草や他の植物は鳥獸の食物となり、昆蟲は動物の食物となり、小さい動物は食肉獸の腹に葬られるのである、また水中に於ても同じことで、一寸の魚は一尺の魚の食物となり、一尺の魚は海獸などの食吞に委して居るではないか、されば地球の萬物が凡べて生存競争の爲めに、意識的に、無意識的に、間接に、直接に、弱肉強食の傾向をなして止む時がない、若し植物が滅亡したならば、鳥獸は凡べて滅亡し、吾々人間までも到底生存することは出来ないのである、

そして人間の社會も亦、生存競争の社會であつて、其の競争と戦つて自己の安全を計らんとするには、勢ひ身體の健全な、頭腦の優秀な、新しい思想の所有者であり、且つ智識の逸出したものでなければならぬ、唯だ一時の欲望の爲めに身心を消耗したり、害悪と知りながらも自己を傷けるやうな弱い人間では、容易に斯かる激烈な競争に勝つことは出来ないで、随つて滅亡の谷に墜落するより外はないのである、しかも社會は進歩して一時も停止する事がなく、無限の時間を通じて、無限に進歩し發達するのであるから、自己の後繼者を造らんとする者は、其の後繼者をして、吾々よりも進歩し發達した子孫としなければならぬ、此の競争社會に健全な子孫を得んとするには、第一に健全な生殖を遂げて、健全な教育をなさしめるより外はないのであるから、無益な盲目的の本能と性慾とは、愉樂としては大なるものがあるにしても、却つて害悪に流るゝの外、利益のあるものでないから、吾々は智識的に考へて、神聖な性慾の目的を誤まりなく遂げなければならぬのである、尙ほ且つ新文化人として、大切な人生

の目的を考へなくてはならない。蓋し人生の一大根本の事實と意義は、性慾を措いて他に何物があるであらう、何人も否定することの出来ない嚴正な自然の攝理は、凡べて性慾に胎して居る問題である、國家社會をして健全な發達と進歩とを完からしめるのも、飾りなく言へば皆な此の性慾問題の上に繋つて來るのである、ところで泰西文明國の教育界では、性慾教育の必要を認識して之れを實施しつゝあるのである、元來日本では此の動物的自然性の通用に對して、善導を試みると言ふよりは、寧ろ壓迫に壓迫を加へて來たのであつて、年少者が之れを意識するやうになつても、何等の考慮をせず放任して置くから、少年少女は唯だ遊戯的に性慾の智識を求めて、非常に惡結果に彼等を導き、彼等は卑猥醜陋の思想を社會から吸ひ入れるのである、そして無自覺の弊害に迷つて、惜しむべき青春の時期を墮落の谷に沈淪させてしまひ、遂には自滅しなければならぬやうになるのである、さもないまでも、悲痛な煩悶懊惱に一生涯を埋没させなければならぬのである、素より年少の時代は物に感動し易い、精神の動搖

する時代であるから、従つて周圍の事物に動かされ易き、意志の薄弱な時代である、中にも性慾の問題には非常に捉はれ易く、此の時期を高尙に安全に經過することが出來れば、人生の第一の危險な關門は通過し得たやうな感がある。

ところで性慾問題が文明國に如何に重大な意義を有して居るかを考へるに、人生、國家、社會、思想の問題は、凡べて性慾と密接の關係があることは言ふまでもなく、従つて此の動物的の光暗兩面への發露は十分識者の考へなければならぬ根本問題である、然しながら不幸にして性慾を教育として年少者に教へることを否認する人があるならば、其の人は保守的な因襲的な道德習慣に捉へられた極く極く頭の古い人であつて、人生や思想や乃至自己の家庭の根本の意義を根柢から理解することの出来ない淺薄な人でなければなるまい、苟くも新しい文化の空氣を呼吸して居る人ならば、眞に自己の家庭問題を根本から考へ、如何に自己が年少の折り性慾問題に頭を苦しめたかを追憶し、最も謹嚴な態度で其の性慾問題を究めるに違ひないと思ふ、若し性慾は自

然に自己が知ることの出来る問題であるから、放任して置けば宜しい、徒らに教育などをして、藪蛇の禍ひを來たす必要がないと言ふものあれば、それは沒常識の甚しいものである。と同時に之れ程危険なことは他にないのである、既にして其の年齢が春情發動期に達すれば、彼等は社會から自然と何を學ぶかを考へると、思はず戰慄を禁せんとするも能はないのである、實際社會が此等の青年男女をして些の過ちなからしめん爲め、如何なる好意を以て善的に導くかも知れないが、开は恐らく性慾を教へるのではなくて、性慾を發露させる手段を教へるに過ぎないであらう、素より神聖な性慾の原理なるものを、人生問題の第一義の眞面目な問題として、何人も否定の出来ない重大な嚴正な一大事實として、延いては社會道德の根本問題として教へるのではない、決して大なる見識を以て彼等を善的に導くのではないから、唯だ自覺のない遊戯的な享樂にのみ走るのは無理もないことであり、政府の當局者が卑猥な小説雑誌を發賣禁止に處するのは當然のことであつて、今日の青年男女が性慾に對して、眞に自覺

的であるならば、彼の風俗壞亂として不名譽なる處分を受くる小説雑誌の如きものは、何等の惡感化惡影響を社會に流す餘地はないのである、即ち此の種の讀物類は毫も刺戟や挑發の効力のない文字の羅列に過ぎない事となるのであらう、されば時流に投じて迎合的な筆者の如きは到底斯かるものを書くといふ元氣さへ起らなくなるであらう、随つて社會の風教問題は、男女兩性の健全な高尚な自覺觀念によつて、益々善良な状態に教化されてゆくことは明白である。

人間は思想ある動物であるから、同じ性慾にしても、他の動物のやうに、性慾を簡單になし遂げることは出来ない、本能的盲目的の一時の快樂を貪る爲めの性慾であるならば、決して幸福な善良な神聖な性慾とは言はれない、今極端に快樂を目的とする人があつたと假定して、日夜享樂に溺れたならば、其の結果はどうであるかと言ふに、却つて苦痛を味はねばならぬ様になるので、吾々の制限された身體を顧みず、周圍を考へず爲すところの享樂は、眞に快適な愉樂ではないのである、唯だ一つの傷を負

ふた時でさへ、其の影響は人々の全身に傳はるやうな調和的に構成されて居る身體に、費消と供給の平均を缺くやうな享樂は、到底根柢から人類を幸福に導くところのものではない、言ふまでもなく快樂は性慾に附屬のもので、決して本來の目的ではなかつたのを、人々が誤まつて爾かく考へるに至つたのである、然らば何の爲めに性慾によつて後繼者を造り、種族の繁殖を計るかと言ふに、不完全な今日の社會をして、一歩一歩と進化發達せしめる爲めである、古來人類が此の地球上に生れてから以來、戰爭をして血を流し屍を積んだのも、皆な自己や子孫の爲めであつて、彼の古代に於ける吾の祖先が、水草を逐うて川を涉り、山を越え、野に谷に、食物の得られさうな、そして我が身に適當な氣候風土のところを選択して居を構へたのは、素より自己や子孫の生存の必要上から來た結果である、しかも彼等祖先が其の間の營々辛苦を経て、上古から中古へと、漸次に文化は進み行きて思想は深遠となり、殊に十六七世紀頃からは、古來迷信し恐怖して接觸することさへも避けて居た、自然界の幾多の現象の神秘

の奥堂の扉を、科學の進歩と研究とをして遂に其の秘密を残るところなく開かしめ、それから様々な機械は發明され、電氣の應用を見ざるところなく、醫術は發達し、商業は隆盛となり、汽車や電車や自動車やは勿論、汽船とか飛行機とか飛行船とか言ふやうな交通機關と、有線無線の電信電話などの通信機關によつて、もはや地球到處、自己と直接間接な關係を有するやうになつたのである、斯くして吾等の祖先が、心の欲するまゝに犠牲を拂つて今日の文明を作つて呉れたやうに、吾等も亦、此の止む時のない社會文明の進歩に對して、幾多の犠牲を拂ふのは當然の義務であり、各自が其の子孫後繼者の爲めに益々開拓の途を築くところあらねばならぬが、之れが吾等の存在するところの意義である、若し吾等が自己の地位を進めて、子孫後繼者の爲めに何等の貢献するところが無かつたならば、今日の社會に存在する意義は没却されるので、職業の高低を問はないし、方法の如何を言ふのでもない、朝に起きて、夜に至る迄、日を逐ふて自己の職務に奮勵するのは、即ち吾等の存在の意義であつて、唯

だ單に食ふ爲めに生存するのは全く無意味なことである。自己の親なり祖先なりは、本能的に盲目的に或る行爲をしたとすると、吾等は其の行爲の中から、眞の生命ある意義を見出して、自覺的に眞善を發達せしめ、改良せしめなければならぬ、善惡正邪の問題は、換言すれば、道徳は時代によつて相違するものであつて、たとへば古代は天動説が眞理であつたのが、地動説に移つて來たやうに、また君主政體では、共產主義や無政府主義が非常に罪惡であつて、共和政體や民主主義の國では、却つて其の主義が歡迎されると言ふやうに、時代と周圍によつて氷炭の差ある次第である、そして吾等が社會の一員として社會の風俗、習慣、法律に従ふのが義務であるが、其の政治法律の形式のみに捉はれて、其の眞の精神を掬むことも出來ずに居るならば、兎に角その風俗、習慣、道徳が却つて人々に惡結果を流すやうなものであるならば、如何に法律制度と雖も、之れを革新しなければならぬのである。素より社會は常に流動的に變化しつゝ行くものであるから、吾等が生存競争をするのに當つて、身體の健、と思

想の健全とがなかつたならば、开が善行良俗の實現上、如何ともすることが出來ないし、また子孫後繼者に健全な身體と思想とを傳へて種の完全を期することは出來ないのではないか、ところで性慾の根本義は、生殖を完全に行ふ爲めの本能であつて、之れを善用して健全な生殖を全からしめ、子々孫々に健全な思想と身體とを傳へるならば、性慾の第一の目的は遂行されたことになる、吾等の日常生活と性慾とは密接の關係があつて、殆んど性慾が其の日の生活の一義ともなることがあるのだから、先づ健全な自覺的な思想を養つて、意義ある自己を知り、夫れによつて生活する時に、其の家庭なり、大きく言つては社會は善良のものとなつて、更に國家なり、將た世界なり、人道なりが完全さるゝ所以である、然るに世の誤まれる考へを持つ人々が、性慾の行爲そのものに伴ふ戀愛なり本能的思想にのみ意義を置き、下劣な肉感的享樂のみが人生の凡へてであるやうに思ふのは、果して何の罪であらうか、社會であらうか、自己であらうか、茲に憂ふべきは個人の思想は自由であるから、一步を誤まれば、直ちに自己中心

の自我満足主義が出たり、自己快樂主義が出たりするから、人々は大いに慎戒するところがなくてはならない。

自我の極端な發展と、自由とを主張するところから、自己を出來得るだけ、本能の赴くまゝに、勝手氣儘に生活せんとする者が出るやうになり、性慾を一步誤まつて、放逸な享樂生活に溺惑しようとするのであるが、何んぞ計らん人生は五十年夢の如く、限りある身體は、無限の快樂の前に、何んの殿堂をも築くことが出來ないで、秋風至るの歎きをしなければならぬのである、それが又た極端に走つて來ると、厭世主義などにもなるので、また現世主義は自己は單に自己のみで成り立つものでなく、自由といひ、平等といひ、之れ自己一人のものでなく、自己は社會の一員であるから、社會的の完全な幸福を求めなければならぬ、そして社會の幸福を自己に分けて、初めて茲に完全な權利や、義務や、自由が生ずるのであるから、自己の要求をなすには、先づ社會の凡べてを完全に進歩させなければならぬ、個人を改良し、善化して、茲に

初めて社會を改良し、善化することが出來るので、随つて國家が改良され、善化されるのであるから、先づ個人の思想を健全にして、高尚な人格を造らなければならぬ、ところが個人の不完全と、不健全とは、前時代前社會の因襲的の教育の結果であつて、肉體的遺傳と共に、精神的遺傳の罪である、だから吾等は肉體的に享けた病的なものは、たとへば結核、癩病、微毒、酒精中毒、精神病のやうなものは、父母の不正な行爲に基くものが多いのであつて、人爲的に牛馬などが優良なものに出來るやうに、人間も其の境遇をよくし、人格を高めて、よい教育を授けるならば、決して効果の得られぬ筈はない、勿論吾等は牛馬のやうな動物ではないから、物質的と同様に、精神的進化を第一としなければならぬのである、彼のアフリカの土人などは、或る點に於ては、殆んど猿の如きものと何等の相違がない、猿は教へれば十位の數は記憶出來るが、アフリカの土人の方は却つて數學的觀念が皆無であるから、到底記憶出來ないやうな次第である、其の場合には形式の優秀ではなくて、内容の優良なものが尊いので

あるから、土人よりか猿の方が一歩進んだものと思はれる、たとひ斯うした無智な人間であつても、靈性を有する以上、漸次に教養して行けば、遂には人間らしい人間になれる、ところで性慾のことや、生殖のことは、人生の第一の根本問題であつて、人生の行爲なり、思想なりの背景は、全く性慾によつて統一されて居るのであるが、今日までは人々が妙な習慣上、此の事を語るのを耻ぢ、且つ恐れて、寧ろ其の方面の智識のないのを誇つて居た位であつたから、甚だ無自覺に、凡べての行爲をして居つたやうなことが澤山ある、今日までの倫理學にしる、教育にしる、何等の直接の關係が吾等にあつたやうには思はれない、倫理學は高尚な理論として、智識的に指南を人々に垂れて居たかも知れず、また教育は智育偏重の傾向を帶び、人間に取つて一番重大な徳育や體育を忽緒に附した感があり、眞に人生の根本の生活に立ち至ることが出来ないであつて、餘りに實社會と懸け離れた迂遠なものであつたのは、單に理想や空想ばかりに流れて、科學的に其の根本の人生問題に觸れることが出来なかつた爲めである。

ある。

第二十二章 科學上より見たる人間論

輓近文明の趨勢は愈々物質慾を増進せしめ、多くの人は道を守り徳を正すを以て痴となし、放慢自適孜孜として、唯だ富を蓄積し遊蕩的享樂を得れば足るかの如き感がある、藁は水上に浮動すれども、眞珠は深く水底に沈むが如く、人は物質的榮華を超越して、更に精神的なる生活の理想を確立するところがなくてはならない、世には千歳経る松さへあるに、朝に咲きて日かげを待たず消ゆる朝顔は、敢果なき生を得ながらも、聊かも他を羨む心なく、朝な朝な快よく見事に咲きて、受け得た天分を盡して枯れるが、之れ花の見する誠である、人間としては尙更のこと、自然の法則に従ひ自己の現在に満足して、其の性を遂げることには努めなければならぬ、夫れは彼の鳥が空

に翔りて一生を送り、魚の水に棲みて生涯を畢るが如きもので、鳥は水を羨まず、魚は又た空を望まぬのが自然の法則である、ところで人間としては、務めの中に生れ、勤めの内に死ぬるものであつて、其の務めに努力するのが自然の法則である、然るに自己の職分を怠つて、唯だ物質的享樂にのみ溺れるが如きは、眞に其の性を遂げるものとは言ひ得ぬのである、然しながら我が社會を歐米諸國の夫れと比較して見るに、精神文明の進まないと言ふのも、社會道徳が劣つて居ることも、單に表面的の或る一部を捕捉して言ふたのに過ぎないので、歐米諸國の社會の裏面を觀察すると、到底我が社會には見ることに出来ぬやうな極端な事實を探知することが出来るのである、たとへば社會を知るのに最も都合のいゝ小説などを見るに、歐米諸國の作者は一般に闇黒面の描寫を好み、挑發的な裸體畫や、神經を強く刺戟する音樂舞踏などを平然と玩味する點から見ても、歐米諸國の社會の一斑を窺ふことが出来るであらうと思ふ。

翻つて考ふると、我が日本の若い男女は、果して人々の言ふが如く墮落して、社會を毒してるものであらうか、成程今日の青年は、昔の青年のやうに、義理人情を尊重しないかも知れない、昔のやうに因襲的の道徳に捉はれるのを好まないやうな、反抗的精神に満ちて居るかも知れない、けれども今日の彼等の頭腦を占領して居るものは、夫れは榮譽富貴の夢ではなくて、眞に生活を凡べての方面から觀察洞見せんとする眞摯の態度のものではあるまいか、殊に今日の青年程、反抗と獨立の精神に満ちたものは他の時代にあつた例がないのである、そして又、教育と職業と生活の矛盾に苦悶して居る青年はないのである、尙ほ且つ物質と精神の矛盾を絶叫して居る青年の多い時代は之れまで無かつたのである、しかも今日の社會は學問偏重の病的思想が深く根を張つて居り、單なる學問の一點のみによつて、人物の優劣を定めようとし、智育即ち教育の如き觀を呈して居ることは前にも言つた通りである、素より教育の目的は、精神上にも肉體的にも優秀なる國民を養成するにあるので、そこで謂ふところの智育と徳育と體育とが、恰も三輪車の如き作用を爲すのである、然るに此の様な智育一點張りの

教育は、人間をして或る一定の鑄型に倣め込まうとするもので、學生等は唯だ學校に於ける講義を暗記することのみに其の精力を消耗せられ、勢ひ肉體的發育を阻害し、従つて其の健康を害するのみならず、遂に精神上にも之れが缺陷を現はし來たり、夫れが爲め大概のものは神經衰弱に冒されざるを得ないのである、それから上級學校への入學試験には頭腦を悩まされるし、折角學校を卒業しても、男は就職難に苦しめられるが普通であり、また女は思ふやうな嫁入り口がなくて知らず識らず年を取るのに泣かされる、夫れを一概に今日の青年を指して、唯だ墮落敗徳を叫ぶと言ふのは、要するに時代と標準とを無視したものであり、甚だ要領を得ないことである、もつとも多數の中には往々新聞の社會種になるやうな突飛な青年もないではないが、夫れとても洵に少數の例外であつて、或は寧ろ深刻に現今の青年を洞察したならば、眞に同情すべき幾多の根本的問題が潜んで居ることを窺ひ得られるのである。

吾々の個人の家庭の状態を観察するに、眞に調和して居る家庭が幾つあらう、父と

母との關係如何、母と自己との關係に思ひを馳せると、まことに悲しむべき状態を目撃せざらんとするも得ないのである、吾々の父は如何にして母と結婚し、且つ家庭を作つたのであるか、そして又た吾々を生んだのであるかを想像して見る時に、殆んど吾々の家庭は悲劇の偶然的の出來事に過ぎないと言ふやうなこともある、今日の青年の自覺の一つは、生活と言ふ事と、凡べて人間が社會的に存在する以上には、性と言ふものに力あらしめることである、人間の性慾は、前にも述べた通り、動物と共通のものであつて、動物にあつては人間のやうに生活が複雑でないから、性慾の目的を達するのにも極めて無難作である、時としては優勝劣敗的に競争忿亂が起らないとも限らぬけれど、別に社會的問題となることはない、然しながら高等動物である人間は、社會的動物と言ふたところで、動物などの社會的とは全然意味が違ふ程に複雑な道德的の立場に立つて居るのである、社會の要素である所の夫婦關係にしたところで、動物の夫れとは意味は同じでも立場が違ふのである、動物の夫婦は唯だ本能的欲望の生

活であつても、人間の夫婦は進化した複雑な合理的な道徳的の生活で、殆んど或る場合には欲望としての色彩を超越した靈的な生活をするではないか、動物であるならば、両性が成熟期に達すれば、性慾の本能を達することが容易であつて、唯だ自然のまゝに調和した性慾を遂げるのである、が人間は生殖器の成熟を見ても、社會状態が複雑で、道徳に叶つた結婚を待たなければ、此の自然性の調和を得ることが出来ないで、不本意ながら不自然な性慾の自己満足を行ふのである。しかも社會の生活状態が年々困難を極めて來るので、結婚をして子女を生み養ふことの出来ない成熟期に達した若い男女は、如何にして圓滿な性慾の満足を得ることが出来るか、特殊な境遇にあるものであるならば、禁慾生活によつて、不調和ながらも、社會に何等の害惡を來たさず、性慾を壓迫することも出来ようが、一般的人々は、到底裏面のない道徳的の性慾壓迫を遂行し得られるものではない、却つて性慾上の紊亂と、肉體と靈との不調和や、不健全な結果を社會一般の上に表現して來るのは事實である、唯だ性慾の爲め

の性慾を達する爲めには、自己満足の弊習があるし、物質的の強制または暴力によつて満足を計る爲めに、年少男女も、老いたる両性も、社會上の罪惡と道徳上の紊亂をなし、夫れが爲めに社會的犯罪、不義不徳の大部分は根本を此等の狂弄的性慾渴望者によつて展開されつゝあるのだが、外國などによく例のある妊娠制限や墮胎許可制の如きは、如何に夫婦間の性慾本能と種族保存の不調和を示して居るか分るのである。

凡べての法律の犯罪にしても、道徳上の罪惡にしても、开が根柢なり裏面なりに、性慾の潜んで居ないものは稀れである、自己の保存と本能の充足の爲めに、人は働いて食物なり、衣服なり、住居なり、生活上の必要物を得なければならぬし、また種族の生殖と子孫の繁榮の爲めには、妻を嫁つて家庭を作り、自己の第二の建設をするのであるが、自己の保存と、本能の充足と、生活上の必要物を容易に得ることが出来ないで、人々は激烈な生存競争を試みざるを得ざるの餘儀なきに至り、社會の凡べては之れ弱肉強食の一大戰場と化し、修羅の巷たるの觀を呈して叫喚呻吟の聲は到る處

に響き渡つて居る有様である、斯くて劣敗者となるもあれば、負傷して斃れるもあり、之れに反して勝利の聲を揚げ、富とか權勢とかも占有して得意なものもあるし、但し又は堂々の陣を構へて戦ふことの出来ない爲めに、何等かの不正な裏面的手段によつて自己の欲求を満足させ、遊蕩的享樂を貪らんとするものが續々として發生するのである、其の結果は現時に於ける國民道德性の弛緩が案外驚くべき度合にあることを指示されるのである、素より孰れの時代にあつても、斯うした方面の缺陷は免れ難いものであるが、取り分け現時に於ては最も甚しいものがある、彼の議會に於ける議員等が黨派的感情に驅られて罵詈咆哮を事とし國政を遊戯化して眞面目に慎重審議の實を擧げず、一國の宰相が單に議會さへ切り抜け得さへすれば足れりとして議員の質問に對し不得要領な不親切な答辯を試み以て的の急所を外づさんことを念とするが如き、しかも多數黨は開が議員の頭數の多いのを利用して黨利政策を發揮し政治上の曲事を遂行するが如き、たとひ如何なる惡法も自黨發展の上に於て便利なりと見れば遠慮なく

之れを通過させるが如き、遂に國民をして議會に對して絶望の嘆を抱かしめ、識者は國民の選良として議政壇場に立つを潔よしとせざるが如きは兎もあれ、政府當路者と結托して不正の利得を占むる政商富豪、夫れ等から賄賂を貪つたりするやうなことは、殆んど罪惡とは思はぬげで平然と公行されて居る、彼の郵便局員にして爲替や有價證券を横領するものもあれば、また鐵道驛員にして貨物や小荷物を抜き取るものもある、此等は素より一部の罪惡に過ぎぬのであるが、之れを要するに生活の向上と物質の不足なる現代人生活の矛盾が、其の思想を惡化せしめたるものに外ならぬのである、權力の分配と富の分配、之れこそ實に孰れの時代にあつても重大問題であつて、しかも夫れは何時も未解決の懸案でなくてはならなかつた、然るに現代人としては、其の全力を傾けて此の二問題に肉迫した、そして論議を去つて實行に移り、もはや開を從來の如く懸案とすることを肯んせすに、右から左へと解決すべく試むるに至つて、此の二つの問題は、最も熾烈な爭論の焦點となつたのである、即ち治と被治、富と貧、資

本と労働、地主と小作、夫れに因襲打破とか差別撤廢とか言ふやうな問題が入り亂れて、恰も混戦状態を爲して角逐すると同時に、全世界の形勢は急轉直下の勢ひを以て轉回されつゝある、しかも一方駭々乎として一刻をも休まない文化の力は、其の思想に鞭うち物質を勵まし、滔々として有らゆる一切のものを開發し盡さうとして居る、此の際に於ける現代人の立場は、右顧左眄これ違あらずと言ふ有様で、神經過敏となり、やがて神経衰弱を惹起すると言ふことは、素より數の免るべからざるところである、生活の向上と物質の不足は、其の兩方面からして現代人を脅威しつゝある、生活の向上は現代人の理想とするところであるが、物質の不足は此の向上心を満足させない、併し其の不足の物質、適從して行かうとするには、現代人の心は餘りに現實的である、心は餘つても行ふところが足りない、否な足りないのではない、行ふことが出來ないのである、斯うした關係から、不満は煩悶を生み、煩悶は不平を生み、不平は自棄を生み、遂には思想的にも道德的にも頹廢が生ぜられて來て、謂ふところの綱紀

紊亂などが踵を接して指點されるやうな結果が生ずる、苟くも口を開けば直ちに現代人は、自らも他も稱して文化の民であると言ふ、素より夫れに相違ない、世紀を稽ふれば恰も二十世紀で、科學も既に最盛期に達して居るから、此の場合に生存しつゝあるものは、確かに文化の民であらねばならぬ、ところで此の文化の民としての人々は、其の實質に於て果して文化的資格を得て居るものであらうか、言葉を換へて言つたならば、謂ふところの文化の民としての現代人は、果して其の文化の冠稱に背かぬものであらうか、之れは其の皮相を去つて、充分冷靜に考察すべき問題でなくてはならぬ、此の如き思想上の根本的頹廢は、偶々以て文化作用に於ける一種の副作用と見るべきものであるが、此等の有害なる副作用を除去した上でなくては、眞に謳歌すべき文化は認められぬのである、たとひ其の名は如何に文化であつても、其の側面なり裏面なりに、其の本作用を害する分子が附隨されて居る以上、文化の民であり、現代の向上人であると誇ることは出來ぬ筈である、今や労働爭議や小作爭議や失業者救済の叫

びや水平運動やなどの大なる活劇は、國民環視の下に、社會的大舞臺に於て盛大に開幕されつゝある。生活の向上と、一視平等の思想と、人心の不安定とは、斯かる乾坤一擲の活演劇をさへ敢行するものであることを忘れてはならぬ。有らゆる殻を破つて、正味眞劍の態度を示すところに、人間の偉いところも見られ、ば、恐ろしいところも見られる。徒らに因襲の綱を使つて、美しい文化にのみ信賴して居ることは、極めて危険であり亦た無謀でなくてはならぬ。斯う言ふ時に吾々は、文化の假面の下に潜む悪魔の俤を想像せぬ譯には行かぬのである。

ところで人々の思想が、何等かの形式によつて外部に現はれないうちはよいが、其の手段行爲が、社會の秩序を保つやうに定めた法律なり、規則なりに牴觸するならば、之れを犯罪として處罰することになつて居り、并は言ふまでもなく國家の刑罰權に屬し、刑事政策上の然らしむるところである。しかも國家は世の犯罪者を處罰して居るのに拘はらず、年々犯罪者が増加して來るのは洵に歎かましいことではないか、勿論

犯罪の中には、心にもなき過失によつて法規に牴觸した爲めに形式上犯罪となるものがあるし、また義理人情等の精神的道德の爲めに犯罪を構成するの餘儀なきに至るものもあつて、遂に一命を絞首臺に委するやうなものがないでもない、之れは單なる形式上からの犯罪者であつて、其の内容思想の上からは却つて道德の大局と一致して居るものがある、如何なる時代に於ても、法律と倫理道德思想の間には矛盾があるもので、其の矛盾が一般的に感得されて、其の出來事が例外でないやうになれば、法律なり倫理道德思想なりの上には、當然變化が來なければならぬのである、だから法律の如きものは必ずしも完全な永久性の眞理を含んだものではなく、人間の幸福と便利の爲めには何時でも修正や改造の出來るものである、で犯罪人を一々調査して見ると、先天的遺傳のあるものでない限り、多くの犯罪は社會的の欲望から來るのであつて、中には生活難の結果から來たのではなくて虚榮心や反抗心からして様々な犯罪を爲すものが澤山ある、然しながら後天的に一時の發作によつて犯罪を構成するところの窃盜、

詐偽、殺人、強掠等の原因は生活の欲望の發展か、さもなくば性慾を根本原因として居るものが多いやうである、故に警察に拘引されたり刑務所に收容されたりした犯人に就て調査すると、此の事實が最もよく確かめられるのである、世上の譬へに「犯罪の陰に女あり」と言ふことがあるが、男子にしる、女子にしる、遠因か近因かに必ず異性が潜んで居ることは事實である、或る統計によつて犯罪の社會的關係に就て調査したところ、季節の上から見ると、性慾と、生活と、社會的關係などが充分考察されるのである、日本と歐米とは、風俗や氣候が違ふから、兩者が全然同一であるとは言はれぬけれど、大抵は類似して居るのである、しかも個人的・自然的な生理上の犯罪は、全然性慾に基因するものである、それから夏期は社會の物質生活の競争が餘り激烈でない季節であるのに、加へて生理上氣候から受ける刺戟の甚しい時期であり、性慾旺盛の時期であるからして、隨つて性慾の犯罪の最も多い時期である、殊に女性が懐胎するのは、此の季節を以て最も多いとされて居る位であるから、夫れに伴つて

犯罪も亦、姦通強姦とか、痴情殺人とか、種々雜多の性慾に關したものが非常に多いやうである、ところで今假りに未婚の處女が、或る男子に暴力を以て凌辱された場合に處する方途を考へて見るに、素より節操は人——特に女子の人格的生命である、之れを蹂躪せらるゝが如きは、畢竟我が絶對價值たる人格を無視され、且つ其の生命を奪はるゝものと謂ひつべきである、既に何物にも換へ難き生命を掠奪せらるゝに當り、死を賭して抵抗せず、暴力の爲めに知覺を失せるの故を以て、無抵抗の處行を是認せんとする、开は餘りに自我の價值を無視した舉動ではないか、然しながら宗教的に觀ると、佛教で言ふ懺悔、基督教で言ふ改悔、眞に悔悛すれば復活の恩寵ありとさへ言はれる人の子、ましてや非合意的の場合に於ては、一層道德的責任なしとも言へる、斯くて其の罪が消ゆれば、童貞の男子を戀し且つ之れと結婚する資格が無くはないが、开が兩性の結合される以前に、豫め對手に其の事情を知らしむるのが穩當である、先づ心の秘密を打ち明け、开が自由なる裁斷を請ひ、戀人または配偶者たらんとする男

子が同情して、其の不純を寛容すれば可なるも、若し認容を拒まば、氣の毒は氣の毒なれど、油断して侵された我が身を責めて、断念するところがなくてはならぬ、尙ほ且つ夫れが人妻であつたやうなら、良人は宜しく我が妻の災難に同情して其の不幸を慰むべきであるが、世の中の事は口で言ふやうに然う易くゆきかねるのが普通であるから、若し其の良人に寛容と理解とがなければ、妻は退いて徐ろに我が復活の方途に就て考へなくてはならない、そして又た未亡人や離縁になつた女性が再婚するやうな場合にも、よく世間には一旦良人を持つた事を隠して處女を装ふて結婚するやうなものがあり、且つ戀人や情人のあつた事を秘密にして嫁ぐやうなものもあるが、之れは甚だ宜しくないことで、單に婦人の惡徳であるばかりでなく、知れたが最後、夫れが爲めに一生の幸福を失ふに至る事は一目瞭然である、素より男子としては、女性が自分と戀仲になり夫婦となつてから、他に戀人や情夫を持つたとすれば、眞に不貞・憎むべきである、ところが然うではなく、戀し合ふ以前、結婚以前に於て、既に戀人や良人を

持つたことがあると言ふのだから、之れは一概には責められない、けれども處女と信じて裏切られた悲哀な心持、愛憎の葛藤、理性と感情の矛盾衝突、此等のものが相錯綜して殆んど氣も狂ひさうであらう、素より我が妻の心地、理性は之れをよく諒解して居るのだが、さて感情が之れを許さないと云ふやうなことになる、言ふまでもなく妻の過去を許し、そして其の愛の甘泉に溶け込みたく思つても、自分以外に、他の男と關係があつたと言ふ不快な感、憎惡の念に驅られて、思はず懊惱せずには居られず、人生の不幸これに如くものがないのである。

元來性慾は本能であつて、子孫を得る必然的手段である、だから性慾は子孫を得る爲めの本能ではない、ところが子孫を得る爲めに性慾を行ふと考へる人が世間には澤山ある、けれども之れは性慾の意義や性質を全然無視した説で、換言すると、本質と結果とを混同したものである、性慾は要するに性慾であつて、自己の満足と快樂との外に目的はない、中には生産を目的とする人があるにしても、性慾の高潮防ぎ難き

時に於て、尙ほ子孫を念頭に描いて居るものは恐らく天下に一人もあるまいと思はれる、开が證明を一步進んで具體的に言ふならば、生殖器に異状あつて、到底子女を得ることの出来ない女性があるが、其の婦人は良人に對して全然性慾的關係を斷つことが出来ようか、恐らく子女を得る望みのない兩性であつても、其の自然性には如何とも抗することが出来ないであらう、若しまた生産以外に性慾の意義がないと言ふ人に、充分なる多數の子女があつたならば、此の人はもはや性慾を發露させないであらうか、生活の餘裕があればまだしも、現在有する以上に子女を得ることの不必要な兩性は、全然性慾を斷つてしまふであらうか、身體が健全である以上、決してそんな事はないのである。今日歐米や我が國などでも大分問題になつて居るところの産兒制限論を見るならば、一層此の間の消息が明瞭にならうと思ふ、勿論英國などでは妊娠制限論は新らしいものではなく、今から三十年も前に議場で論戰の花を咲かせた位で、もはや識者の間に一定した意見が出来て居るのである、しかも英國などの妊娠制限論

は如何なるものであるかと言ふに、貧民の生活を救済するには、第一に子女を二三に止めなくてはならぬ、たとひ貧民でも、二三の子女ならば生活の困難もなく、罪惡を犯すこともなく、教育も十分に出来るから、従つて社會上の幸福を來たし得ると言ふのである、素より有産者の社會にあつては、性慾に依らないでも、種々な物質によつて、人生の享樂を得られるのだが、無産階級の人々は、物質の満足がなく、唯だ夫婦の性慾に依つて、唯一の快樂と満足とを得て居るのは事實である、だから勢ひ多くの子女を生産するやうなことになる、元來妊娠制限論者の説も、社會本能であるところの性慾の自然性を否定するのではなく、人間である以上は、性慾の満足や快樂を得なければならぬことは言を要しないので、殊に無産細民は、性慾の満足を唯一快樂として居るから、夫れに伴ふべき子女の産出は十分に嚴格に取締り、以て完全な健全な子女を得なければならぬと言ふのである、然しながら之れが爲めに起る幾多の弊害のあることも事實であつて、今日の歐米諸國で實際に妊娠制限を行つて居る所は至つて少な

いのである、彼の野蠻未開の國では、人工的に妊娠を不可能にして、社會の安全を計つて居る所があり、中には墮胎を平然として行つて居る習慣の國もある、ところで土耳古では胎兒を法律上五箇月までは生きたものと認めないで、夫れ前に墮胎するものが非常に多いのである、千八百七十二年コンスタンチノーブルで墮胎の爲めに法廷へ引き出されたものが十箇月間に三千人以上あつたさうである、夫れが爲めに私生兒は殆んど無い位で、結婚は一つに性慾の満足の爲めであると考えて居たのである、且つまた泰西文明國にしても、相當教養ある立派の女が、墮胎したものをライン河に捨てたやうなことをさへある、夫れが官憲の知るところとなつて、河床を搜索したところ、其の婦人と無關係な屍胎兒が一日に二十五個も出たやうなことがある、我が國にも夫れと同じやうなことがある、嵯峨の尼寺の椽の下から、多數の嬰兒の骸骨が発見されたやうな事實もある、たとひ尼僧にしる、未亡人にしる、生きて居る以上、人間として本能に勝てないのが自然である、斯くまで偉大なる原動力を胎藏する人間の本能、

即ち性慾なるものは、食慾と共に人間生活に於ける根本的欲求であつて、人生に有する欲望中に於て最も強烈な利刃の如きものであり、其の悪用は忽ちにして社會人生に害毒を及ぼすから、謹嚴な態度を以て餘程慎重に考慮する所がなくてはならない。

且つ夫れ社會政策上、一方では生産の過剰から生ずる犯罪の多くなるのを恐れて、人口問題とか食糧問題とか言ふ點から、避妊法によつて性慾を享樂主義の立場から行はうとする思想家もあり、之れを必要とする實行家もあると同時に、また家族主義の立場から、一方では妊娠の不可能の爲めに、兩性間に性慾の満足を得て居るにも拘はらず、破境の歎を見るやうなことも屢々あるし、或は蓄妾して子女を儲けようとして居るやうなものもある、今日では人工的に避妊も出来る代りに、また人工的に妊娠も出来る時代であるから、家庭の平和上、蓄妾する様な事は絶対に同意が出来ぬのである、若し骨盤が狭くて分娩すると生命に關するやうな女性であつても、性慾の抑壓が出来ぬことは勿論であつて、斯かる婦人は人工的に避妊するが利益であるけれど、分

婉に何等の支障がない完全の人々が、性慾を行ふと同時に、避妊を目達とするやうになれば、生活上或は社會の現在の罪惡を多少弱める効果はあつても、思想の上に於て、恐るべき社會思想を起すのではあるまいか、第一性慾を全くの快樂のみに考へて、眞面目な人生問題や、家庭問題を無視するに至るのではあるまいか、歐米中、最も盛んに避妊法の行はれて居る佛蘭西では、年々と出産の數を減じて、一國の盛衰興廢にも關する問題となつて居るではないか、素より开は他に種々の關係もあらうけれど、性慾を唯だ快樂の方面にのみ解釋して、妊娠を避ける思想の結果であることは勿論である、ところで翻つて考ふると、眞に道德的戀愛に依つて、夫婦關係をなして居るものが、果して社會にどれ程あるであらうか、今日の社會は、戀愛を無用視する程生活の問題に禍ひされて居るが故に、家庭の根據は唯だ子女と言ふ者の上のみ存して、肉體上精神上道義心を喚起するものであるから、若し避妊を主として唯だ快樂に向つて兩性の性慾を一致せしめやうとするならば、茲に家庭制度は俄然として崩壊するやう

な酸鼻の状態を呈するのではあるまいか、尙ほ且つ斯かる夫婦間の關係が、今日に於ける家庭制度の動搖を招かずして、斯の如き避妊を眞面目になし得られる程、平然たる餘裕をもつて性慾を遂行しつゝあるであらうか、但しまた夫れ程に、社會道德と教育とが發達して居るであらうか、今日に於ける社會の一般の家庭を觀察して見るならば、皮相は如何にも圓滿な和樂の風を裝ふて居ても、更に奥深く内部にまで立ち入つて銳利の眼光を投げると、到るところ悲惨な悲劇の幕によつて蔽はれて居るではないか、彼等は青春の時代に清い純眞な戀愛の夢を胸に描いて、スキートホームの理想を實現したいと期して居たにも拘はらず、开が結婚後に於ける家庭の状態は、恰も秋風凋落の野のやうな慘憺たる光景を呈して居る、唯だ餘儀ない斷念に依つて、名ばかりの夫婦の關係を保持して居るに過ぎず、僅かに慰安を子女の上に繋いで居るのである、故に彼等は出來得る限り充分の性慾を遂げて、多くの子女を得る事に依つて慰安を得て居るのであるから、避妊法によつて唯だ性の享樂に耽るやうな遊戯的な餘裕の

あることが出来得るものではない、或は上流社會の教育ある家庭などには、其の様な事が實行し得られなくもないが、併し彼等上流社會の兩性は安逸な生活を貪つて居るが故に、知らず識らず肉體の退歩に向つて居り、眞に心から多くの子女を得んと欲しても能はざるやうな状態だから、此等に避妊法の必要はなく、自然が立派に避妊を爲さしめつゝあるのである、また無産階級の細民社會の兩性としても、斯かる人工的妊娠制限法を行ふことによつて、自分等の生活の困難を緩和し、夫れによつて優秀健全なる種族の存続を圖り、以て社會改良を期さうとするやうな道德的な餘裕のある者から此の性慾の問題を解決することが出来得るであらうか、先づ高級の教育が一般に普及して人々の道德心が向上しない限り、今日のところ恐らく不可能事であらうと思はれる、それから墮胎の罪惡であるが、之れを犯した者は死刑に處した國があり、ベルシヤや猶太などが即ち夫れである、もつとも墮胎を奨励した國もないではないが、夫れは殆んど稀れに見る例外である、彼の基督教國などでは堅く墮胎禁制の主義を取

つて居るし、日本の法律でも之れには峻嚴な制裁を加へることになつて居る、けれども尙ほ社會には秘密に行はれて居るやうである、此等はおもに生活上の立場からして其の犯罪を餘儀なくされたものか、また社會とか人生とかいふ根本的思想から來たものかと言ふと、必ずしも然うではなく、多くは性慾を濫りに遂げた結果、开が敗徳行爲を蔽はんとする淺ましい皮相な考へに基くものであるからして、斯かる無智なものには、避妊法を行はせるやうな自覺を興へると言ふことも、一步を誤まらば悪用される危険があるから、寧ろ出来ない相談に近いものではあるまいか、ところで斯うした社會の風紀問題を考察する場合には、單に婦人のみを論難するのは其の當を得たものではないのであつて、女性は獨立的に社會に存在するものではなく、素より男性あつての女性であると同時に、また女性の爲めの男性であることは疑ふ餘地がない、此の男女兩性が共同合致して、初めて社會を形成するのであるから、其の關係の密接なことは言ふまでもないことであつて、女性の風紀問題は取りもなほさず男性の風紀問題で

あるし、女性の性慾問題は即ち男性の性慾問題であらねばならぬ。

第二十三章 性教育上より見たる人間論

性慾の知識を子女に授けることの利害に就ては、頭腦の新しい教育者の間には既にして其の必要なることを認識されるに至り、今日では其の教育方法如何と言ふところまで輿論が進んで居て、中には自己の確信のもとに开を實行して居る教育者もある、一體歐米諸國で此の問題が盛んになつた原因は、醫學や生理學の進歩からして青年の身體健康の調査をした處、多くの青年は神經衰弱であるのに驚いて細密に調査した結果、其の原因が學科の過重ではなくて、まつたく自瀆の罪にあることが發見されたからである、之れが爲めに道德問題から青年疾病の根本原因を救匡するの急要なることが世の識者や教育界の輿論となつて、遂に性慾教育の實施を見るに至つたのである、素より

性慾問題は人生根本の重大問題であるから、之れが完全に解決されるのは、健全な戀愛と結婚（愛と結婚とは依らなければならぬのであつて、換言すれば、健全な性慾思想が社會の一般に遍在されるやうにならなければならぬのである、従つて青年男女を善く此の方面に指導しなければならぬのであつて、文化を誇る泰西先進國などに、戀愛を健全にするのが、社會人類改善の第一歩であると言ふやうな思想家が生じたのも、蓋し偶然ではないのである、元來東洋思想の道德は孰れも消極主義のものであり、支那などでは儒教から來た男女七歳にして席を同じうすべからずと言ふ根本思想が、甚だ不自然な偽善的のものとして、中にも神經の鋭い男子などになると、まだ七八歳であるのに、其の母親と散歩同席することさへ耻かしがらうなのがある、況んや長じて青年となり、何等かの用件の爲め、異性と同行しなければならぬ必要事が起るとか、單なる一片の交際上、對座して談話を交はすやうな場合があると、周圍は極めて神經過敏の状態に陥り、人々の目は殆んど之れを戀愛と同様の意味に解するやうな有様である、そ

れから若い未亡人などであると、其の家へ何の關係もない若い男子が用事でもあつて出入りしたり、途中で偶然に異性の知人に會して立ち話でもして居たとか、外出の場合に少し念入りに化粧して美々しく盛裝でもして出かけるならば、近所の人々は夫れを直ちに妙な意味に取り、目を丸くしてヨリ監視を嚴にするやうな状態である、更に極言すると、夫婦の間でさへ、相携へて人の前に出ることを憚り、遠慮するやうな感情が到る處に認められて居る、之れは全く性慾の解放がないからであつて、若し頭腦の新しい時代思潮に觸れた人であり、眞に性慾と人生の生活とを自覺した人であるならば、如何に東洋の道德が不自然なものであり、文化を誇る日本人の中にも、まだ此の様な無智な無理解な頑冥な分らずやが殘存して居るかに驚かすには居られないのである、然しながら性慾を解放して、之れを子女に教育することは、極めて嚴肅な問題であつて、いやが上にも慎重に慎重を加へないと、飛んだ惡結果を齎すことは明らかである、だから之れに就ては、十分な注意と、幾多の條件とを附隨させなくてはならない、之れは學校

で教育すべきか、家庭で教育すべきかと言ふと、西洋ではおもに家庭に於て其の教育を受ける方針であつて、母親は娘に、父親は息子にと言ふやうにするのである、たとへば母親が娘に教育する場合には、人間は何處から生れて來るのか、又どうして生れるのかと言ふことから、生理的に人體を説明する、植物の種子が生ずる前には、長い間の生殖作用によつて成熟して種子となつたのであるが、人間も亦た之れと等しく母胎に存在して、或る一定の時機が來ると、胎兒は外界に獨立して生息するやうになり、茲に初めて母の胎内を出づることになるのである、だから母と子供とは異心同體であり、血も細胞も、全く同一體から分割したものであつて、産と言ふもの、苦痛と、成育の苦心とをよく物語る、それから夫婦の由來と意義とを説明し、植物や動物は唯だ一意本能的であるのに對して、人間の精神的であること、愛情の貴重なことを説明するのである、そして女子の身體の發達すると言ふことは、母となつて更に新しい芽のやうな子孫を生む爲めに結婚しなければならぬ爲めであることや、母となるには、心

と身體とが健全な清潔なものでなければならぬことを教へる、殊に子女を生むに、部分の説明をよく了解させ、出来るならば、母は自分の産の時などには娘を傍へ置いて、よく現状を目撃させることを可として居る人もある、また父が男子に教育する場合にも、母の娘に於けると同様であるが、唯だ主とするところは、植物などの雄蕊と花粉の作用から、種子の貴重であることを附加して、人生の幸福と否とは種子即ち男精の健全と否とにある、故に呉れぐれも自重して、決して不潔な不衛生な危険な花柳界に出入してはならぬこと、這は眞に人として不道德であり、罪惡であるばかりではなく、恐るべき病毒に冒され、優秀な子女を儲けることが出来なくなり、延いて家庭の平和を害し、人生の幸福を失ふに至ることを述べるのである、ところで之れに反し唯だ消極的に性慾の大事を隠蔽するならば、少年少女は甚だしく好奇心に驅られ易いものであるから、随つて性慾に對する智識、人生根本に對する疑問の不安によつて、社會の恐るべき誘惑に耳を傾けるやうになるのである、次に學校の教師が其の生徒に對

して善導的に性慾の智識を授けることは、比較的容易であつて、科學的に之れを教育することが出来るのである、若し生徒が青春の時機に向つてゐる頃であるならば、生理上肉體に一大變化が來てゐることを自覺させて、此の時機が人生に最も大切な期であるから、斯かる機會を善良に道德的に經過し得ることは、人間一生の幸福とも成功ともなるのである。

肉體と精神の一大變動とは、言ふまでもなく異性を愛慕するの情と、生殖器機能の成熟することであつて、即ち各自が肉體的に成熟して子孫を生ずることが出来るやうに凡べて肉體が完全するのである、ところで女が男を慕ひ、男が女を思ふことは、ひとり人間のみに限つたことでなく、如何なる動物にも認められることで、之れが即ち生物生々の一大原則である、此の一大原則は、素より何人も否定することは出来ぬもので、此の異性相思ふと言ふことが無かつたならば、少なくとも動物と名づけらるゝ生物は、何萬年も何千年も以前に夙うに滅んでしまつて居るのである、イヤ何萬年も

何千年も以前に滅んで居るところではなく、如何なる動物の出現をも見ることが出来なかつたに相違ない、そこで異性相思ふと言ふことは、しかく極めて重大なるものであつて、生々の機能としては、人間が何物よりも一番進んで居るが如く、此の異性相思ふと言ふことにしろ、何れの動物よりも、人間が一番進んで居るのである、言葉を換へて云ふと、一般の動物としては、單に異性なるが故に相思ふと言つた調子で、至つて無作法千萬なものであるが、其所へ行くと追がに人間で、吾々が異性相思ふと言ふにしても、其所には分量もあれば秩序もあつて、決して他の一般動物のやうな無秩序無作法のものではない、何にせよ、人は一定の時期に達すると、此の性の發現、即ち春機發動期といふ時期に入るのである、それは邦土や氣候や風俗や又は其の人々の身體の工合やで、多少の遅れ速さはあるが、先づ男子であれば十五六歳、女子であれば十四五歳が普通とされて居るのである、此の性の欲求は、理解的意識よりも、寧ろ性としての衝動から起ることが多いのである、素より衝動と言ふのは、何等かの刺戟

に對する反應的亢奮であつて、此の反應的亢奮は、往々無意識の間に来るのである、ところで性の衝動の起因は、學問上これを二種に分類することが出来るので、即ち一は精神感應による衝動、また一は肉體的刺戟による衝動である、そして精神的感應による衝動と言ふのは、精神に何かの刺戟を受けて、夫れに反應して起る性の衝動であつて、之れは一に内的衝動とも言ふことが出来るのである、尙ほ肉體的刺戟による衝動と言ふのは、肉體的に何等かの刺戟を受けて、同じく夫れに反應した結果起る性の衝動であつて、之れは前者に比して、同じく一に外的衝動とも稱すべきものである、要するに前者のは精神的衝動、後者のは機械的衝動と目すべきもので、其の主因に相違する點はあつても、開が結果たる衝動に於ては同じものである、よく耳にする話であるが、何が不足で富豪の娘が其の雇人と駆け落ちしたり、また有爵者の家族が身分の賤しいものと心中したりするのであらう、それが自由戀愛とでも言ふやうな意義ある素質を帯びたものであれば格別、無意識的に唯だ異性なるが故に結合したと言ふの

であるから、ちよつと考へると不思議な感がするが、隅田川の水が満潮時に逆流するが如く之れにも明白の理由がある、第一には、令嬢だつて若様だつて人間だと言ふことが理由である、第二には、春が来れば梅だつて櫻だつて花が咲くのだと言ふが理由である、第三には、咽喉が渴いて仕様がなけれど、あたり近所に清水は無しと言ふ場合には、苦しさの餘り田甫の畔を流れてゐる怪しげな水も旨く飲まれると言ふのである、第四には、面白さうなものだと思つても、見る可からず聞く可からずと固く戒められ、ば戒められる程、見たい聞きたいの情が募つて、つひ内證で戒めを破つてしまひたがるものであると言ふのである、第五には、ましてや夫れが生れ持つた止み難い人間の本能であつて、しかも血の湧き立つ年頃と来て居るのだものと言ふのである、ところで人の子が、既に一定の年齢に達し、茲に其の性の本能からして、春機發動期の境に入り、心に異性を思ふといふことは、自然の導き來つた一定の徑路であつて、此の際に於て心に異性を思つたからと言つて、何も夫れが罪惡でもなければ、過失で

もなく、また素より耻づべきものでもない、否な寧ろ人の子が一定の年齢に達しても、此の性情が無いとなつたら、それこそ由々しき不思議であつて、斯くの如きことをこそ、却つて耻づべきことゝしなければならぬ、然しながら人の子が如何に此の時期に達したればとて、夫れに對して理法上の秩序と抑制とを保持するところが無かつたならば、結局は其の身を破り、其の家を亂し、遂には人生をして淺ましくも動物化させてしまふことになるのである、ところで性の欲求、即ち異性を愛慕するの情は、素より動物的のものであるけれども、人間は尊い靈的な思想を有してゐるから、此の動物的愛慕の情を高尙に導き、進化させてこそ、初めて人間の價値があるので、若し其の情慾に精神が打ち勝たれず、餘儀なく自瀆を試みたり、性的不徳な行爲をするのは最も罪惡である、故に各自が社會へ出て、自から獨立して生活が營み得られるやうになれば、茲に人々は結婚して子孫を儲けることが容されるのであり、それが自然であり人間の踏むべき道である、ところが不幸にして自瀆の弊に陥り、或は背理なる同性愛に

溺れるやうなことがあると、折角成熟した身體や其の諸機關も不自然な習慣に馴れて、愈よ人生の暗黒面に沈んで行つてしまひ、遂には全く自滅しなければならぬやうな事になるのであるから、最初に先づ此の悪習慣に陥らぬやうに用心しなければならぬのである、言ふまでもなく青春の時期に於ては、萬物生々の理と言つて、繁殖の本能を發現する季節であるから、此の時代に處しての若き人々としては、兎角本能に左右され易く、また其の本能に對する自制的理智性と、防衛的理智力に薄いのであるから、人間の一生涯中、最も危険なる境地にあるものと言はなければならぬのである、之れを要するに生々の意義を有つて居る青春機にある人々は、何所までも其の意義を尊重し保全し、やがては又た夫れを助長完成せしむべきもので、开は眞に若き人々の取るべき最大の義務でもあり、また一面には權利でもあるのである、然るに徒らに漫然として其の身を破り、其の精神を破るやうなことがあつては、一には开が父母長上の心に背き、二には天地自然の生々の大理にも背き、また最後に自分自身に背くもので、

之れほど重大なる過失は無いことになるのである、そこで又た一面から見ると、世間の親とか長上とか言ふものは、心に其の子女を愛することは知つて居ても、行ひに其の子女を救護することを知らぬものが多いのである、否たとひ夫れを知つて居るにしても、性的智識などは、殊更に授けずとも、いつか時が來れば自然に分るであらうと言ふやうな考へからして、充分に开が心を子女に向つて打ち明けることもせず、知らず識らずの裡に其の必要な施設をも與へ得ずして、漫然として子女を其の放漫なる、若しくは不適當なる動作の下に、緊要なる時期を空過せしめると言ふのは、實に遺憾と言はなければならぬのである、しかも青春機にある子女が懐ろにして居る利刃、其の恐るべき危険から逃れ去ることを爲し得ぬ子女に對して、世間の親たるものが、夫れを黙々に附し、殊更に目を蔽ふて見ず知らずの態度を取つて居るのは、つまり其の子女を、知りながら危険の地に置くやうにも見えて、人生としての施設方法に機宜を得た完全なる仕方であると言ふことは出來ないのである、茲に於て性慾教育の必要が

生じて來るのであるが、即ち教師は理義の眼の上に立つて、尊重すべき生徒の上に大なる慈愛の心靈を捧げ、最も嚴肅なる態度で他の言ひ明かし得ざることを善導的に打ち明けて、自衛的警告を與へなくてはならなくなる次第である。

一體學校で性慾の智識を生徒に授ける場合には、其の擔任の教師に就ては人格の高邁なるものを選ぶ必要があるので、若い輕卒な教師に斯かることを教へさせるのは極めて危険であり、一步を誤まると生徒等の嘲笑を買ふことになるのであるから、寧ろ生徒の尊敬する校長か、さもなければ比較的年長の眞面目な教師に教育させるのが可いと思ふ、ところで性慾の智識を少年少女に授ける時機に就ては餘程の考慮を要するので、獨逸などでは比較的早いさうであるが、これは寧ろ好ましいことではなく、多くは春機の發動して來た時に、少年少女は此の性慾に對する智識を知らうと欲するのであるから、其の以前に無理に之れを教育することは當を得て居らぬものと言はなければならぬ、早い話が御飯の食ふ方法も知らぬ中に、御飯とはドンナものであるか

と説明したところで、何の役にも立たないと同様に、要求もないものに之れを教育するのは無益であるから、稍や遅い方がよろしく、適當の時期に於て爲すべきものである、其の時はなるべく適度の運動をさせて、少年少女の精神を淨化せしめ、衛生上からも、道徳上からも、出來るだけ注意して教育を施すのである、併し人によると學校よりは家庭の方がよいと言ふ論者もあるが、日本の家庭の制度を見ると、親子や夫婦や兄弟や姉妹などが晝夜ともに同居してゐる状態であつて、年少者の前に、親や年長者などが無遠慮に如何はしき言動を敢てして毫も意に介せぬやうなものもあるから、子供なども其の間に餘程悪い影響を受けると思ふ、それに家庭だけではなく、一般に社會が腐敗して居るから、家庭に於て折角完全な教育が施せたとしろ、外へ出て惡風に襲はれると、意志の薄弱な若い人々の心胸に、直接間接に宜しくない影響や印象を與へるのは止むを得ないことである、ところで吾々日本民族の祖先のことを書いた「古事記」を見ると、吾々の祖先は猛烈な生活慾のあつた民族であつて、あらゆる物を自己の生活に

統一しようと努力した民族であり、生慾と性慾の發展以外には何物もなかつたと言つても宜しいからであるから、民族の發展と膨脹の爲めに最も肉的思想を持つて居たのである、然るに平安朝時代になると稍や性慾的な人間の生活が美化されて來て、「伊勢物語」などの半分は、皮肉的な男女の野合の状態は餘程淡泊なものに考へられたのである、また今日の近代作品にも増して最もよく男女の性慾を描寫した「源氏物語」になると、吾々が其の全篇を通して享けるインスピレーションは、平安朝時代の風俗習慣でなくて、現代の吾々の生活と共通なる人生の根本思想であるところの性慾の思想であり、情的生活の内容であり、斷たんとして絶ち得ざる性慾の悲劇であり、自由な性慾の發露と生活の方面に表はれた道徳の衝突で、永久に亘つて變りない人生の生活に對する思想と現實の矛盾衝突史である、彼の「枕草子」などは細心に此の性慾的描寫をボカして寫生風に書いたものであるが、篇中には極めて短かい精しい觀察もあり、殿上生活の女性等が群集しては男性達に浮薄な行爲や言動を弄する滑稽など

ころが能く印象風に書かれ、それが多く和歌の遣り取りなどが中心になつてゐて、餘り周圍や生活を眞面目に考へないところの上ツ調子の感覺的の性慾であつたのである、ところが戦争の絶間のなかつた源平時代になると、文學も又た其の影響を受けて、戦争の記録であるやうになり、一般の思想も殆んど殺伐な野蠻な血腥いものとなつて、センチメンタルな女々しい消極的な性慾だけを公卿公達の間で僅か残したばかりであるが、唯だ「平家物語」だけが平安朝式の性慾を音樂的の文學の中に美化されて表はされたに過ぎないのである、稍や時を経て南北兩朝時代になつても、矢張り武士の全盛時代であるから、性慾は比較的裏面的であつて、興味も乏しい上に、一般に禮儀作法などが八釜しかつたものであるから、上流階級の文藝は餘程淡泊であつたが、唯だ下層社會の俳諧などが性慾を赤裸々に發表して居り、殊に川柳などは甚しく露骨で殆んど讀むに堪へざる程のものさへあつたのである、それから又た徳川時代に至つて、彼の有名な「好色一代男」の情的生活を想像すると、全く開放された積極的の極端な

る獸的性慾の本能生活に現實の歡樂を味ひ盡した感覺主義の思想が窺はれるが、其の性慾的な本能主義と相對して、一方には古い因襲的、道德的、宗教的思想から脱することの出来なかつたロマンチックの濫い義理人情を重んじた厭世的戯曲が現はれ、斯かる思想から近松は主として戀を描き、其の本質の性慾の方面は描寫しなかつたのである、それに彼の「八犬傳」の毒婦舟虫が淫を賣る邊は性慾描寫の特色の一面を表はして居るもので、現代に至つて外國文學の翻譯が盛んになるに従ひ、「一人女房」だの、「三人妻」だの、「魔風戀風」だの、「第三者」だの、「女難」だの、「運命論者」だの、「正直者」だの、「薄團」だのと言ふやうな作物が現はれ、并は生慾と性慾とが如何に人生自然の裡に大きな脈を引いて動き働いてゐるかを描寫したものである、素より此等は何れも歐洲大陸の文學思想の影響であつて、トルストイにしる、ゴリキエにしる、ハツプトマンにしる、ゾラにしる、ルラーにしる、イブセンにしる、モウバサンにしる、バルサツクにしる、ダヌンチオンにしる、アルツイバーシエフにしる、近代人の生存慾

と性慾の煩悶の多い複雑な思想状態を深く描寫して居るのである、ところで獨逸、佛蘭西、伊太利などの文學に現はれた性慾觀は、露西亞ほど革命的な荒々しいところ、即ち全人格的のところはないが、社會問題の提供として面白いのがあるので、茲に獨逸戯曲作家の雄たるウエデキンドの脚本「春覺醒」を例證として擧げて見たいと思ふ、此の戯曲は三齣十九場から成り立つてゐて、なるべく讀者の自由な想像を招くやうに、人物の説明もないし、舞臺面の説明も簡單であるから、初めて見るものなの、シエクスピヤの作やゲーテの作などを讀み慣れて居るものであると、果然自失を禁せられぬくらゐに短いアツケない場面をさへも入れてある、其の筋を荒くつまんで言ふと、性慾の發動して居る少年少女に、父兄や監督者や教育家などが明確な性慾の智識を與へないから、それが原因となつて、遂に少年少女は悲惨な運命を招來すると言ふ風な一種の社會劇である、此の作の主要人物なるメルヒオルとモリツと言ふのは、まだ學校に通ひつゝある男生徒であつて、年齒も僅か十四五歳の子供である、前者は頭腦の極

めて明晰な學校の成績も至つて優良な少年であり、其の性質が科學者であつて、書物や説明圖や自然界などに興味を抱いて居たが、殊に性慾と言ふものに對しては甚だ物質的思想を持つて居たから、人生も自我も戀愛も皆な性慾の満足に外ならないと言ふやうな人生觀を持つて居たのである、之れに反して後者は腦力の鈍い學術の劣等な子供であつて、性慾問題に心を勞するやうになつても、メルヒオルのやうに科學的の智識がないから、其の煩悶を仲の好いメルヒオルに打ち明けて生殖器の説明畫を描いて貰ひ、それで人間性慾の自然性や人類繁殖の理由を知つたのである、けれどもモリツは元來がロマンチックの少年であるから、メルヒオルのやうに冷靜な思想を持つことが出來ず、そして女性を尊敬し、神聖な少女の愛情を讚美する風があり、謂はゞ性慾の爲めに男子が女性と結合するやうなことは道德に悖る悪事であると考へてゐたから、性慾を行爲に依つて流露させるやうな事はしなかつたのである、ところが同じ學校のウエンドラと言ふ美しい女生徒も、また情慾の智識に乏しく、之れを人に

訊いて見ても教へて呉れぬところから、何時しかメルヒオルと親交を結ぶに至つたが、それと同時に全く人間が變つてしまひ、今迄の少女の心は失せ、好んで長い着物を纏ふやうになり、遂に妊娠するに至つたのである、またモリツは學校の試験の爲め、一心不亂に勉強したが、其の甲斐もなく落第したから、自暴自棄の結果、全然學校を廢して亞米利加へ高飛びしようと言ふ心を起し、旅費の工面をメルヒオルの母に乞ふたところ、却つて其の無謀を戒められたので、深い失望と厭世に陥つた末、遂に我が身を死の淵に投じたのである、そこで自殺したモリツの遺品を調べて見ると、メルヒオルが描いてやつた黙過し難い説明附の猥褻畫が発見されたが爲め、學校の校長や教員は非常に驚いて、メルヒオルを會議室に呼び入れて訊問したところが、其の答辯が餘り大膽であつたものだから、懲戒の意味で遂に退校されたのである、之れと同時にウエンドラを妊娠せしめたことも兩親に知れ、メルヒオルは感化院に送られることになつたので、それを避けんとして英國へ逃げ去らうと計劃したが、遂に事成らず窮命さ

れてしまつたのである、斯くメルヒオルが感化院へ送られた時には、ウエンドラは妊娠の身を床に横たへて居たが、母は其の娘の汚辱を何所までも隠蔽したい心から、之れを墮胎させたところ、不幸にも其の體質が弱かつた爲めに、終に慘絶な最後を遂げねばならなかつたのである、幾程もなくしてメルヒオルは感化院から脱走し、モリツが埋葬してある墓場へ来て、其の幽霊と問答をしたのである、そして苦悶の極、身も如何に處すべきかの良心に苛責され、遂に死を決心したが、翻つて考ふると死ぬことも出来ず、再び現實の人生に歸つて、眞理ある人生を科學的に研究することを思ひ立つたと言ふのである、然うした作者が描いて居る人物は、凡べて少年少女であるとは言ふものゝ、眞面目な人生問題に觸れて居るから、何所か暗陰な悲惨な影が付き纏つて、近代的の科學と人生の接觸しない矛盾を十分に描かれてあるが、斯く少年少女をして悲しむべき運命に遭逢させたのは、之れ取りも直さず开が父兄や監督者や教育家等の責任であり、思はず前途有望な青年男女をして墮落せしめ、滅亡せしむるに至る

と言ふ覺醒を促すために書いたものである、故に這は素より少年少女達の見るべきものと言ふよりか、子弟の教育に腐心して居る父兄教育者の讀物と言ふべきであり、語を換へて言ふと、性慾に對する智識思想の普及されないことから起る悲劇を問題として、社會へ提供したものであると言ふべきである、此の種の作物は、其の作爲的態度が眞面目にして且つ嚴肅であり、昔の爲永春水派のやうに、單に性慾の發露の方法を快樂的に遊戯的に示したものは全然その立場を異にし、唯だ人間は社會の一部であつて、彼等が社會に存在する第一の關係は性慾であるから、人生を論ずる場合には、是非とも性慾を明かにしなければならぬと言ふ考へに外ならないので、其の立場を議論として社會に發表したのではなく、最も例證的に痛切に解釋する爲め藝術思想に依つて説明をしたのに過ぎないのである。

惟ふに人間で一番大切なものは權勢でも無ければ富力でも無く、また科學に依つて學者となるよりは、先づ人間その者と自己の思想とを研究する必要がある、前述の藝

術思想に依つて見ても、性慾は本能として、社會の到る處に發露されて居ると同時に、夫れに依つて社會國家の眞の幸福を傷けて居るか、風紀を害して居るかと言ふことが分るのである、けれども小説に依つて性慾の放縱と危険とを指摘して、正常な其の歸趣方向を示さんとするのを誤謬であるやうに言ふ人もあるが、決して其の様な理由のある筈はなく、たとへば性慾研究を試みるに當り、實際の材料を得て、之れを作者の主觀により描寫するならば、當然その間に同情も出て來るし、問題も、道徳も、凡べてが含まれて來るに相違ない、何となれば、开は素より社會の出來事であつて、天上の理想界の出來事でも地獄の中から取つた材料でもなく、現在作者が立脚し、生活して居るところの活社會から得た材料ではないか、眞に根本的に深刻に社會の性慾を觀察するならば、作家の頭腦に幾多の矛盾した事實を照映せしめるのは當然であつて、社會は事實矛盾に依つて満たされて居るではないか、然しながら作家が一步を過まつて、風俗を壞亂するやうなものを描き、以て性慾の方向を誤まり、世の青年男女を誘

惑するやうな文字に満ちて居るならば、之れは其の發賣を禁止されるのが當然である、素より國家の立場として、官憲の職掌として、斯の如き作物に對しては、峻嚴なる監視や制裁を加ふべきものであり、また社會には随分この様な取締りを要するものもあつて、何等かの營利目的の爲めに、臆面もなく故意に風俗を壞亂するやうな事柄を筆にして恬として耻ぢないやうなものもあるから、此の様なものに對しては、當局として及ぶだけ开が鐵腕を伸ばすべき要があらねばならぬ、ところで今日の青年男女が、性慾に對して眞に自覺的であるならば、風俗壞亂として處分される刊行物の如きものは、何等の惡感化惡影響を社會に流す餘地はなく、即ち刺戟や挑發の効力のない文字の羅列に過ぎないことになるので、従つて無耻なる筆者の如きも到底斯かるものを書くことが出來なくなるのである、また翻つて考へると、たとひ青春期に達せんとする少年少女が見て、思はず亢奮を感じ、心を躍らせるやうな幻影を浮べるものであつても、更に开を超越して、作者が社會の讀者の前に提供せんとするところの眞面目な問題や、

思想や技術があるならば、害のある以上に、益の有るものであることは論を俟たず明白であらう、凡べて一つの事物の影には、二つの意味があつて、人の生命を害する毒薬も、之れを善用すれば人を助けるところのものとなり、たとへば不眠症のものを熟睡せしむるモルヒネや、煩悶苦痛を救ふところの阿片なども、多量に服用すれば生命を毒すると言ふことは皆な人の知るところで、およそ害毒ばかりの外、用途のないと言ふやうな物の世界にあることは珍らしいと云つてもよいからである、言ふまでもなく小説などよりも、生きた小説である社會の印象の方が、少年少女に對して餘程悪感化を及ぼすやうであるから、父兄なり主婦なりが然るべきものを選択してやつて、なるべく赤裸々な筆法で戀愛などを描いてない以上は寧ろ讀ませた方が可からうと思ふのである、开は兎に角、我が國には、性慾のための教育といふものがない、科學による智育もあるし、取善の目的たる德育（その實効は別問題として）もあるし、また生理學上から見るべき體育もあるが、人生の一大根本の事實と意義とを存する而も嚴

正な自然の攝理であるところの性育なるものがない、然るに歐米の教育界では、始め性慾教育が大なる杞憂を招いたに拘はらず、今日では既に成功の域に達したと言ふことである、されば我が教育當路者に於ても、腫物的に性慾そのものを恐れずに、進んで之れを教材の一要素と看做し、开が供用上の指導を完全にすると云ふ態度に出でたならば、少年少女は自動的に注意もするであらうし、謂はれなき悪感化をも回避すると言ふ根本的理性態度を探ることも出来るに相違ない、要するに若い人々に充分な知解を與へず、全く此の方面に對して彼等を無智にして置かうと言ふ方法は、最も姑息の手段であつて、生理上青年男女が其の方面の知識を渴望するのは自然であるから、如何に之れを禁止し、防壓したからとて、到底人間の心霊の行動にまでも干渉と束縛は出来る筈のものでなく、却つて前述のウエデキンズの戯曲の如き悲劇を構成するやうなことになるのである、だから若し子女が一定の年齢に達したならば、小説にしる、新聞にしる、親の方から進んで之れを叫ましめるくらゐに、若い人々の前に此の方面

の知識を提供して、夫れに伴ふ性慾の弊害を防ぐ意志の訓練と倫理道德を根本的に教へるのが可いと思ふのである、然るに唯だ譯もなく無暗に之れを防壓したり、徒らに放任して置くなどは、まつたく姑息な手段と言ふの外はないのであつて、宜しく高尚な實際的の倫理道德的教育を授けつゝ、換言すれば眞面目な精神教育を施しつゝ、一方には物質的の根本問題を教へるより外は方法がないのである、たとへば假りに、或る青年が生殖器に對して様々な知識を得んことを渴望して、夫れを知る時機がなく、依然として迷つて居る場合、若し之れを或る人が懇切に、衛生と道德との立場から、其の生殖器の濫用と、人生の心的状態の影響や、且つ弊害をよく説明したならば、此の青年は却つて重荷を卸したやうな安心を得られるのではあるまいか、ところが上述の如き知らうとして苦悶して居るのを、放任して置くのは、唯だ好奇心を増長させるに止どまつて、何等の益のあるものではなく、早晚知らなければならぬことであるから、寧ろ其の場合に知らせる方が得策であると考へる、殊に今日の如く、世界は駭々

たる文化の洪波に浸され、民衆は滔々たる思想の流れに乗するの時に方つては、素より教育の方面としても、世道人心の歸趨に察して、其の主義と様式を改むるの要あるは勿論、更により突き進んで有らゆる因襲から脱離すべきであり、また從來に於ける其の皮殻を破らなければならぬのである。

第二十四章 兩性問題より見たる人間論

人間が此の世の中に處して行くには、唯だパンのみを以て生きるものではなく、人間は人間らしく、凡べての關係と、總べての情趣とに生くべきものである、しかも凡べての關係と總べての情趣に生きるものであるとしたならば、其の關係のあるところ、その情趣の發するところに順應適從して、始めて其所にパン以外の人間の生活が見出されるのである、言ふまでもなくパンは肉體の糧であつて、情趣は精神の糧である、

そこで此の肉體の糧と精神の糧とを混同融合せしめて、茲に一個の全生命を完からしむるは、關係の黏合質を適法に調和しなければならぬのである、此の見地からして、人事と世相とを見ると、其所に大なる工夫と按排の必要なることが認められる、即ち此の意味に於て、社會の青年男女は、その異性を研究しなければならぬのである、單に異性を研究せよとばかりでは、一向要領を得ないであらうが、何れにせよ、或る時期に於て、新家庭を作り、人生の大義を理想的に顯現せしめ、完成せしめなければならぬ青年男女に取つては、眞に理想的無缺陷の配遇者を選択し、神聖なる己れの愛を注ぐと共に、また對手の愛をも完全に理法的に享受しなければならぬ運命を有つて居るのであるから、自己の愛の對象として異性の總べてを研究し知悉して置くことは、決して無益の業ではないのである、素より女性には女性の心理があると同様に、男性には又た男性としての心理があるのは、茲に呷々するまでもないところではあるが、苟くも對象を異性に求むる運命にあるものが、異性の如何なるものであるかさへ

知らないやうでは、將來百年の運命を共にすべき場合に立つても、決して双方理解し合ふやうな理想の境地に達し得ることは出来ないのである、之れを世の中の實況に見るに、夫妻の間の葛藤とか、家庭間の不和合とか言つたやうなものは、皆な此の不知不解の點から生ずるのが、その大部分を占めて居るのである、即ち男子としては其の妻たるべき女性と言ふもの、心理や個性を諒解せず、また女子に於ても其の良人たるべき男性と言ふもの、心理や個性を知了して居ないところから、時には種々の不諒解が生じ、時には個性と個性の氷炭相容れざると言つたやうな衝突などが出現せられ、之れが爲めに双方の意思は次第々々に齟齬の迷雲を以て蔽ひ隔てられ、一朝事ありし際に、開がゆくりなくも爆發して、遂に犬猿的紛争を惹起するのを通例として居る、然るに若し男性にして眞底から女性を了解し、女性にして根柢から男性を知解して居つたならば、決して斯かる忌まはしき事件は醸成されるものではない、言ふまでもなく湯は何所までも湯を以て立ち、水は飽くまでも水を以て立たうとするところに、兩

者の個性が相一致せぬ點を生じ、如何に思考し協料しても、到底兩者の冷熱を其の儘にして融合させることが出来なくなるのは見易き道理である。が若し一轉歩の眼識を以て、湯は其の個性に於て熱きもの、水は其の個性に於て冷たきものと言ふことを充分に了解したならば、決して井を其の儘に結合せしめようなど、言ふ無分別なる思考も起ることなく、寧ろ湯の熱さの半ばを割きて水に與へ、水の冷たさの半ばを分けて湯に加へ、斯くして双方を混同融合せしめて、其所に過熱と過冷を棄てた渾然たる溫和な一個の液體を生せしめると言ふことになるのである。夫れと同様に、兩性間の事も其の通りで、兩性の各々が、到底單獨に生活すべきものでなく、必ずや結合を要しなければならぬものであると決定された以上は、單に男性は何所までも男性として立ち、女性は飽くまでも女性として立ち、その個性は一步たりとも相手方に譲ることが出来ぬと言つたやうな、不理解不徹底な不都合の遣り方はすべきものではない、即ち男子としては、其の男性たる個性の半分を女子の爲めに滅却し、また女子としては、

其の女性たる個性の半分を男子の爲めに滅却して、斯くて残された個性の半分づつを結合せしめ、そして渾然たる一團の新個性を鑄出すべきものである。此の工夫によつて、その理想的融和を完成せしめようとするには、先づ其の先決問題として、互ひに異性の上に就て根本的に其の通有性やら個性やらを了解しなければならぬ、ところで異性を研究するには、先づ其の前提として、男性と女性との心理的區別の存することを洞觀しなければならぬのである、元來女性は其の心理に於て感情が勝つて居り、男性は同じく理性が勝つて居るのである、即ち何事にも拘はらず女性の心意は、一に感情によつて左右さるゝことが多いので、こゝらが男性と女性の心理の分量的相違點と言つて宜しいのである、感情を主として動くのであるから、女性の觀察や思念は、表面の平らなところに多く働いて居るが、男性の夫れは、理智を主として動くものであり、表面よりも寧ろ裏面に深く突ツ込んで、働かされて居るのは實際である、感情に勝つて居る

からして、女性には同情が多く、涙が多く、愛が多く、容認が多いのである、理智に勝つて居るところから、男性には冷観が多く、批判が多く、打算が多く、反抗が多いのである、之れ即ち男子の意思は強剛であり、女子の意思は柔和である所以である、女性が萬事に就て緻密であるに反し、男性は極めて粗雑であるが、之れも其の性態の然らしむるところであつて、女性の注意は總べて部分的の細小に及び、男性の意思は常に總體的の大ざつばなところにのみ働かされるからである、要するに女性は抽象的觀念に秀で、居るのであるから、兎角小膽になり易いのに反し、男性は具體的觀念に富んで居るので、動やともすると放膽的氣分に満たされて居るのである、此の積極と消極、陽性と陰性の相對的心理が、やがて男性と女性の相對的心理を示すもので、此の呼吸をさへ呑み込み、夫れを根基として靜かに觀察したならば、異性そのものを知るに最も容易であると思ふ、男子の通弊と言ふものが、常に理智の過働と言ふ點に存するのであつて、之れと同様に、女性の通弊と言ふべきものは、感情の過働と言ふと

ころに存するのであるから、男性に向つては其の理智の過働を撤廢すべきを要求すると共に、女性自己としては、定限を超えたる感情の過働を控制するを肝要とするのである、素より之れは一般的普通ののもので、人心の同じからざるは、猶ほ其の面に於けるが如く、各人各個によつて必ず多少の相異なつた觀念があり、性情があるから、皆な悉く之れに同じと言ふ譯には行かない、言ふまでもなく人類は、如何なる場合にも、その單獨と言ふものは許されて居らない、即ち個人と個人の相對的結合により、茲に一の相對人格を現出すべきものである、果して然りとせば、其の相對人格を作為する上にも、其の包容力、其の化合力、其の合働力を作為するやうに、豫め用意して掛からなければならぬもので、此等に注意すると言ふところが、取りも直さず異性を研究すると言ふ要約に合すべき緊要なる點なのである、天を仰げば蒼々として高く、地に俯せば綿々として長く、悠久なる天地、その來たること遠きを思ふ、しかも人類この間に生じて、天を見、地を觀て、長なへに其の類を傳ふ、之れ實に我れありて宇宙を

知り、我れありて天地を観るものではないか、然り而して此の我れを生せしめしもの、實に生類兩性の賜物にして、我れは兩性の結晶體であることが知り得られる、我れは兩性の結晶體である以上、既に單性より生じたものではなく、また單性としてのみ生活すべきものでもない、之れを化學上の原則から言へば、一原子の炭素は、よく二原子の水素と結合し、斯くしてよく種々雑多なる炭素化合物なる複雑的産物を成出するのであるが、單體獨立の許されて居ない生物界に見ても、個々人生の結合が如何に意義あり、如何に緊切なるものであるか、想像されるのである。

今の時代は昔の時代と變つて、若い處女としても、進んで異性たる男子と交際して行くようにしなければならぬのである、昔の事にすると、女子は何所までも内輪に身を持ち、異性たる男子に伍して交際することなどは、此の上もない罪惡であり、不道德であるやうに考へられて居たのであるが、モウ當今の進歩した時世では、此の様な偏狹な考へや仕方は、間違つたものになつてしまつたのである、が若い女が

若い男など、交際するにしても、其所に一つの確乎たる理法と注意とを備へて居なければ、往々思ひも寄らぬ不結果を醸し出すことになるのである、西洋などでは、婦人が隔てなく男子と交際して、しかも其の間に何等の支障も弊害もないので、之れは實に人生の一美事であると言はなければならぬ、デ此のやうに異性同士が交際する場合に、何等の不結果をも生み出さないと云ふことは、彼等歐米の人々は、幼少の時から異性と交際することに馴らされて居るからである、其所へ行くと、我が國の女性などは、最初からして男子と交際するやうなことがなく、男子としても同様、女性と交際することに馴れて居ないところから、偶々或る機會があつて交際でもすると、双方とも物珍らしいところから、往々飛んでもない結果を生み出すことになるのである、即ち男女の交際に馴らされた歐米人は、女性として男性を見ても、男性として女性を見ても、別段物珍らしいとは思はず、つまり平氣の平左で交際して行くのであるから、別に間違つた感想などを起さずに、奇麗さつぱりと交際して行くことが出来るのである。

る、斯く平氣の平左たる氣風を養ふには、よく男女間の關係を呑み込ませる必要がある、夫れでないと男は強い感想を女の上に逞しくし、女も又た男の上に強烈なる興味を持つやうな事になつて、堅く性の異なることを考へ、遂に思はぬ不結果を將來することになるのである、と言つても、絶対に自由なる交際をさせることは、素より弊害がある、何しろ男女は其の根本に於て、性を異にして居るのであるから、餘りに自由な交際の下に、其の接近が絶対に開放されると、茲に放埒な行爲を敢てすることにならぬとも限らない、故に女性をして男性と交際せしむるにも、其所にキチンとした規律を設け、或る一定度以上の放漫なる接近を許さぬやうにしなければならぬ、即ち歐米あたりにしても、若い男女間の交際には、必ず相當なる監視を附するのが通例である、だから結婚前の若い女性が男子を訪問する場合には、一定の場所に於て一定の時間に公開的に接近させる、また既に結婚した女性などが男子を訪問する場合には、其の良人と共に打ち連れて出向くようにするので、此の様にすると、異性の交

際は何時も規則立つた公開的のもので、何等の秘密をも發生せしむべき餘裕がないのである、異性の交際なども、餘りに夫れを疎隔したり束縛したりすると、却つて其所に弊害が生ずる、珍らしいものを見たいと言ふのは人生の通則で、始終見つけて居ると餘り見たいとは思はないが、殊更に夫れを見る機會を興へないと、遂には衷心から夫れを見ようと欲求することになるので、此の點は、男女交際を研究する上に、最も必要な事項なのである、しかも異性と交際する場合に、注意すべき事は、性的衝動の發現を豫防することを專一とせねばならぬ、そこで此の豫防法として必要な事は、双方とも相手方たる異性の性的野心を挑發せぬ様に心懸けるのが肝要である、即ち此等の諸點を完全ならしむるには、何うしても其の徳性と言ふものを涵養し、造次にも顛沛にも、一に道義徳性によつて行動すると言ふことが必要であつて、凜然侵すべからずと言ふ態度をば、相互の守るべき金科玉條とせねばならぬのである、男性なり女性なりが、斯うした理解の下に交際する以上は、決して思ひ寄らぬ不成績に墜ちることとな

く、安心して神聖純潔の關係を保ち得べきことは、素より多言を要せぬところで、斯くの如き舉措こそ、眞に文明國男女の取るべきものである。然るに異性に接する時に、直ちに其の性交的觀念に支配されるやうなことは、實に陋劣も甚しいもので、眞の文明國民としては、耻づべき矛盾の事とすべきであるから、高潔純眞なる男女等は、篤と此の邊の道理を理解し、寸毫も誤まらぬと言ふ確實なる地歩の上に立たなければならぬ。

更に猶ほ一步を進めて考へると、歐米では盛んに男女混合教育を實施して居るが、日本の教育の立場から之れを見れば、甚だ異様の感に打たれざるを得ないのである。併し日本とても田舎などでは、小學教育に此の男女混合教育を實施して居る所もあるが、何等弊害があるやうにも聞かず、却つて男女生徒間に競争心などを起して性的の影響は別に起らないのである。素より男女共學は泰西文明の理想であるから、米國にしろ、獨逸にしろ、何れも此の兩性混合教育を行つて全く開放主義を取つて居るが、

夫れが爲め米國などでは兩性間の緊張力が弱くなつて、異性に對しての感動力や神經が餘程衰へて居ると言ふが、之れくらゐの弊害は仕方ないことであらう、并は言ふまでもなく物質的文明が進歩すれば進歩する程、男女間に職業的競争が盛んになつて、兩方から生活の侵略を行ふべく餘儀なくせられる結果、兩性間に性的の羞耻や尊敬などを重く拂つて居る譯にはゆかない事と思ふ、斯くて兩性間に弊害がなく、共に馴れることが出来るならば、之れくらゐ結構なことは無いのであつて、日本の如く性の美を慕ふが爲めに、兩性間の親密を夢想するやうな場合とは天地の差である。我が國に於ては偶々兩性が接近するのは、唯だ性的の爲めであるやうに思はれて居るが、夫れは素より人間の自然であるのに、今日の青年男女は他動的に嚴として離隔を餘儀なくせられて居るので、勢ひ様々な矛盾の起るのは無理もないことである。早い話が、異性間に於て何等の意味もない單純な用でもあつた場合に、口で言へば何の手間暇も要しないことを、會談する機會がない爲め、止むを得ず手紙に書いて用の次第を陳べ

れば、直ちに戀愛的の色彩を帯びたものと誤解されるではないか、だから日本に於ける青年男女の交際は、性的の關係か戀愛的の關係でないものはなく、社會の嘲笑を買うても意に介せず超然として道徳的に高潔な交際をする様なことは實に莫迦々々しいと考へるものが多いのである、日本以外の諸文明國が、自由に男女の交際を獎勵して居るのに、何時まで我が國では男女間を離隔して居ることが出来るか知れないが、早晩開放される時期が到來することは必然の數であらう、此のごろ日本に於ても、男子の大學に於て僅少の女子に聽講を許すことになつたが、近き將來に於て高等教育や中等教育の全般に亘つて兩性の混合教育が實施されるやうになるか何うかは分らないが、全く性的の關係を離れて男女兩性の間を隔てる門扉が表面的に公々然と開放された日は、やがて又た日本の教育界に於ける社會經世上の一大問題となるのである、然らば此の若き男女兩性の距離を今少しく密接にして、其の混合教育をして完全無缺なる効果を擧げしむるには、如何なる方法を採るべきであらうか、之れ實に社會經世家が

十分なる考究を要するところのものであり、殊に身、育英の業にある者は、大いに研究しなければならぬ一大問題である、しかも男女兩性の混合教育に就ては、歐米諸國に於ては既に開が成功の域に達したのであるが、我が日本の如きは其の根本思想に於て男女兩性に對する見解が歐米の夫れとは全く趣を異にして居るから、幾ら泰西に於て夫れが成功したからと言つて、直ちに其の儘移して以て之れを實施すると言ふことは大いに考慮を要することであらねばならぬ。

ところで翻つて又た青年男女の交際に就て再考すれば、先づ之れを東洋流に言ふと、「男女七歳にして席を同じうせず」と言ふ語は、東洋殊に支那を中心として、男女兩性の上に下された根本の思想である、支那の文物制度が日本に輸入されて以來、我が國に於ても亦、此の思想によつて男女の兩性間は最も嚴格に區劃されて、男子は男子、女子は女子と言ふ風に、生れながらにして全く異なつた性と運命を持つたものとされ、到底これを融合せしむることは出来ぬものとされて居たのである、這是素より男女兩

性に對する根本の思想であり、また一面に其の性の接近よりして起る種々の本能的衝動をもつて罪惡としたからであるが、此の様な不具な消極的な思想は、何時までも勢力を持続することが出来ないのは理の當然である、果然明治維新の變動に遭逢しては、其の舊來の固陋なる思想を打破し去らんとする勢ひ凄まじく、滔々として西歐文明の流れが急激に押し寄せ來たつた結果、長く因襲的否な寧ろ惰性的に發達して來た我が國の道德、宗教、教育の上にも大なる革命が起つて、茲に新舊思想の衝突の悲劇が演ぜられるやうになつたのである、其の種々なる事例は、枚舉に遑ない程であるが、其のうち最も大なる問題として取扱はれて居るのは、即ち男女兩性の接近問題である、何れの時代でも、其の時代の中堅となり、進歩改革の先驅者たるものは、即ち青年である、たとへば明治維新の改革にしろ、謂はゞ青年の手に依つて成就されたものであり、當時青年の勢力はなかく大したものであつて、青年にして直ちに廟堂に入つた人も随分多かつたのである、ところが此等の青年にしても、何分改革後の疲勞と、新

興國の經營の爲めに、おもはず思想の問題は閑却されてあつたが、稍や經世の策が成り、諸事まつたく整頓するに及んで、茲に暫らく忘れられて居た思想の革命を現實にする事となつたのである、言ふまでもなく人生社會の根本要素は男女兩性であるから、眞に其の根本からして社會を改革し、之れを進歩向上せしめようとするには、此の兩性の融和發達を計らねばならぬ事は今更暇々を要せぬところで、昔から政治の進歩した國では、大なる政治家は大なる教育家であらねばならぬと言はれて居り、一國の隆盛を計つた大政治家は皆な此の教育の問題に腐心した人々である、夫れかあらぬか、維新の功業が成ると同時に、各方面の人々が新興國の文明を増進したいと思ひ、西歐諸國を漫遊して其の文物制度、人情風俗を視察して歸朝し、第一に我が國の習慣風俗が歐米の夫れとは全然異なつて居ると言ふことに氣づいて、大いに教育の獎勵や風習の改革を企てたのである、先づ在來の衣類住居を歐米風の洋服西洋館に改め、社交の如きものも、舊日本に於ては殆んど見られなかつた宴會だの、夜會だのと言ふ風な會合

を見るやうになり、其の當時に於ける所謂ハイカラも續出したが、根が僅かに皮相な視察くらゐに止まつたハイカラ主義の鼓吹は比較的勢力がなく、却つて古き慣習によつて固められた老人輩の言説に其の耳を傾けるものが多いところから、斯うした急遽な改革運動は忽ち非難攻撃を受けて火の消えたやうに敗れてしまつたのである、けれども其の後多くの留學生が泰西諸國へ派遣せられ、彼等は二年三年乃至五六年も彼の地の文明的教育を受けた結果、大分新思想を抱いて居る上に、日常目撃する其の文明國の習慣風俗が一々彼等留學生には新しい眞實な事のやうに思へた爲め、夫れ等の者が歸朝すると、皆な一樣に古俗の改革を叫んだのは素より其の所であり、言ふまでもなく彼等留學生の其の多くが青年であつたから、舊日本に於て守つて居る舊道徳が如何にも究屈でならないので、之れまで道徳は萬古不易のもの、やうに思つて居た古老を新文明の新空氣に觸れしめようとしたのである。爾來數十年後の今日に至つても、猶ほ此の問題は解決されず、徹頭徹尾一貫した主義方針に據りて、經世家が之れを處

置するでもなく、育英者が又た斷案を下すでもなく、依然として未解決の裡に葬られて居るが、事實は着々進捗して今日では青年男女の接近が大分現實されて居る、しかも如何にして此の男女兩性の接近問題を解決し、之れに對して如何なる處置を採るを可とすべきかを考慮しない日本の所謂先輩古老は、事實上兩性の接近が現實されつつあるのを見て今更のやうに驚き、無策にも唯だ危険呼ばゞりをして居るに止どまつてゐる状態である、然しながら此の固陋な頑冥者流が見て以て危険なりとする男女、殊に青年男女の接近すなはち交際は、引ひて社會改良と國運の進歩發達とに大なる關係を有するものであるから、唯だ無暗に危険呼ばゞりのみして、之れが根本的解決に手を下し得ぬのは、實に不見識であり又た不親切なことである、此等の頭腦の古い連中が何等の高い意見を持して居る譯でもなく、唯だ漫然と偏狹な議論を以て時代思潮に抗するの愚も憐むべきであるが、夫れかと言つて又た歐米思想直輸入のハイカラ黨が唱導して居る極端な意見なども、謂はゞ通り一遍の漫遊や單なる書物の翻譯やによ

つて窺ひ得た淺薄な皮相的觀察であつて、何れも共に正鵠を失したものと云はねばならぬのである、ところで誤まりのない判断を下し、之れを論定せんとするには、餘程慎重な思考と、深遠な見識とを要することは勿論であるが、开を種々の方面から觀察して、四圍の事情を顧みることとも又た一層大切なことであり、加ふるに根本的に徹底的に深刻なる考察をして見なくてはならないと思ふ。

輓近我が國では、古來から隔離されて居た兩性が、相互に其の門扉を開放して、無條件に接近しようと言ふ急激な思潮の推移に際會して居るのであるが、今俄かに男女が思ふ儘に交際する結果として、往々その間に弊害の生ずるのは數の免れぬところであるから、世の父兄と共に、一般識者の甚だ憂ふるところも亦た實に茲に存するのである、然らば此の男女交際は斷じて不可であるかと言ふに、決して左うではなく、社會は素より男女兩性が本位になつて成立して居るものであり、今後とても益々この主旨に依つて社會を形成して行くのでなければ、到底文明世界に國を立つることは

出来ないのである、だから此の男女交際は益々繁盛ならしめねばならぬのは勿論の事で、殆んど自明の理ではあるが、さればと言つて現在のまゝの男女の思想・意志では不可であることも亦た言ふまでもない次第である、前にも言つた通り、「男女七歳にして云々」と言ふ事は東洋に於ける古來からの教へであつて、然うした籠鳥的不自由な道徳を甘受して今日に至つたものが、今俄かに其の羽翼を自由に伸ばして男女が思ふ儘に交際するやうになると言へば、従つて又た夫れに伴ふ弊害の起ることも見易い道理であるから、一面に此の男女兩性の自由交際を促すと同時に、また一面に相互に於ける高潔純眞の品性を保持せしむる上に於いての、種々なる條件が必要であらねばならぬ、先づ女性各自が目覺めて自主的人格を保有し、彼の名玉の温乎として清く和らぎたる光りあるが如く、陽に燦然たる和徳を具して、陰に毅然たる氣象を備へ、以て开が内面に嚴として侵すべからざる威信を潜在せしめなくてはならない、然うした態度を常に持續するならば、無暗に男子の爲めに輕侮弄辱を受けるやうな事は無

いであらうし、しかも女性の體力が弱く、智慮が浅いからと言つて、男子が我意を振ふやうなことは無くなるであらう、また男子にしても、女性は自己の半身たるべきものであり、之れなくしては社會を形成することの出来ないものであるから、开が人格の高貴を認め、處女の純潔を尊むこと神の如くし、人妻をして其の高節清操を保持せしむるやうにするならば、茲に自然と圓滿な交際が行はれることになるのである、けれども彼の東洋風の男女席を同じうせずでは、到底社會を進化せしめ、發達せしむることは、全然不可能であると言つても可いと思ふ、言ふまでもなく男女の兩性を相調和せしめ、融合せしめ、統一せしめて、以て社會を向上せしむると言ふのは、社會改良の根本的解決である、しかも我が國の現状では、青年男女の自由交際は愚か、まだく東洋固有の男尊女卑の風があつて、之れが爲めに家庭の圓滑を缺き、常に風波が絶えないと言ふやうな例は事實として随分に澤山ある、デ先づ男子が女子に對し、女子が男子に對しての根本的思想の改革を要するとは、最も進歩徹底した識者の説である、

斯くして在來の固陋な思想が革められなければ、男女交際は既に皮相的の事で、如實に兩性の圓滿なる調和融合を期し、社會の發達進歩を助長せしむる事は到底望まれな、い、されば男女互ひに自重し、輕薄なる言動を避けて、相尊敬すると言ふ念慮を失はないやうにする事は必要である、彼の男尊女卑の僻見を挾みて、一方は自ら尊いものとし、他方は又た卑しいものと假定して居るならば、既にして同等の交際は出来ないものである、以上の理由に依り、第一の解決法として、男尊女卑の迷信を排除し、此の新しい眞實なる思想を有つた男女によつて形ち造られたる家庭を以て、社會改良の端緒としなければならぬ、然るに今や世を舉げて偽善虚偽、上ツべだけ綺麗に薄すツペらな小伶俐に、不安定な胡化似的、精神的その日ぐらしの生活をする爲めに、人と人との交際は愚か、自己の全生命を捧げ合ふべき夫婦間にさへ、權道が用ひられ技巧が弄ばれて居る、早い話が、良人は友を訪ねるやうな振りをして外出し、待合の四疊半で藝妓を相手に花柳情調に浸るが如き、妻は又た祖先の墓參にでも出かけるや

うに見せかけて、其の實は劇場裡の人となり自己の好む俳優に交感的無線電話をかけるやうなものもある。开は言ふまでもなく愛なき、形式的な、媒介結婚の缺陷に對する反映だらう、だから上流階級の家庭に、眞の夫唱婦和、良人の悲しむ時には妻も隨つて嘆き、妻が嬉しさを感ずれば良人も共に喜ぶと言ふ風な、美しき異體同心、所謂苦樂を其の實を擧げ得るものは恐らく多くあるまい、ところが無産階級者の間に於ける家庭生活は、其の赤裸々な野趣満々の裡に、恰も科學の宗教に對するが如く、上流階級に於ける男女の夢想だも及ばぬ自然なる情愛、純眞なる感激、憧憬、唯信の純對價値の上に築かれて居る、しかも妻は眞に其の良人の職業を理解し、そして之れを助けて成功せしむるやうに心がけ、唯だ異性の愛に浸つて、思ひ思はれる温かい情合を味はつて満足し、良人は又た其の妻を心から可愛がり、开が節操を絶對に信じて疑はず、些細な事でも互ひに相談し合ふと言ふ眞實があつて、家事万端を一切任して安んじて居るのを見受ける、翻つて考ふると、男女が互ひに慕ひ合ひ、眞に身と心とを捧ぐる

事によつて、其の信樂の絶對境に入らんとするは、これ取りも直さず人間の戀愛である、此の戀愛は人生最高の幸福であつて、开が愛人の爲めには身をも心をも捧げて惜しまずと言ふ究竟に達したるとき、茲に神人合一、涅槃に入れるが如き宗教の極致と一致するものであるから、眞の戀愛三昧に入り、此の醍醐味の甘き香に酔へるものこそ、一國の宰相の地位を得たことよりも、巨億の富を有したることよりも、より更により得意なるものであらねばならぬ、されば人間の燃ゆるが如き情熱と、感激と、憧憬と、欲望との白熱化せる結晶とも見るべき戀愛には、素より永久不滅の力が動いて居り、異性が其の全身を投げ出して、我が愛人の魂の中に没入してこそ、まつたく人生至樂の極致、無限の満足を味はひ得るのである、しかも此の戀愛は、現在の自己を、未來に、無窮に永續せしめんとする、種の生存と言ふ、根柢深き本能の上に立脚するものである、故に男女の戀愛は、性と靈との合致、生殖と人格との調和によつて成立するのが本義である、言ふまでもなく戀愛の神聖と尊嚴とは、其の沒我的なる愛に在りて、且

つ又た純美にして至高なる戀愛の極致は、異性が共に思慕し、相牽引して、思想も、趣味も、肉體も、生命も、有らゆる一切のものを捧ぐることに、彼の敬虔なる信徒が、其の宗教の純對權威に全身を没入して、唯信の妙境に逍遙するが如きものである、斯くて戀愛の三昧も、宗教の法悦に於けるが如く、慕ひ焦がる、男の胸に安住し、愛し思ふ女の心を得るは、此の世からなる神の國に入り、目前たる淨土に達するに等しきものである、這般の消息は、唯だ神を信じ佛に頼るものと、また自己を愛する者の爲めに自己の全部を捧ぐる者とのみの味識する神秘の絶對境である、夫れ神秘は語るを得ず、絶對は總べてを超越する如く、此の戀愛の靈域と、そして宗教の聖地とは、冷やかなる哲理や科學の蹂躪を許さざる禁苑である、されば戀愛は、活ける眞の宗教であつて、強烈なる人類の一情熱である、素より兩性の神聖なる戀愛は人間生活の根源であり目的であつて、眞の戀愛にのみ男女の生活力が含まれて居り、従つて高潔純眞なる人格を生むのも亦た此の戀愛に過ぎないのであるから、男女間に神聖なる戀愛

の成就を見るや茲に清純なを家庭が作られ、之れが理想的に圓滿に完全に實現されるれば、初めて社會と個人との目的が一致するのである、蓋し惟ふに人間が幸福である事と、不幸である事とは、之れを思想的にしては信仰、生命と言ふやうな事に對する確固たる觀念の樹立如何に存するけれども、社會とか生活とかいふ物質的方面から考へると、家庭の善惡と言ふことが非常に力があり、否な寧ろ家庭の善惡の如何は人間の思想をも支配するものである、しかも家庭は有らゆる人道の要素が備はつて居り、即ち親子間の道德、夫婦兄弟姉妹間の道德、雇主と召仕との道德、其の他社會百般の道德、人間生活、修養上の問題、一つとして交渉の無いものはない、故に信仰を積んで生命の不死なる所以を體得し、幸福の生活を得ると言ふことも、結局は家庭訓育の力に俟たねばならぬので、家庭の改善は國家政策の出發點である、若し家庭の改善を爲さずして社會の改良、國家の發展、人類個々の進化を希はんとするのは、恰も木に依つて魚を求めようとするのに等しいものである、言ふまでもなく人間は學校からは出

ないので、成る程學校では教育は授けるが、併し人間根本の生命に關しては何等力を盡すところがない、だから良き人物は良き家庭から出るし、悪しき人物は悪しき家庭から出るので、人間何人か家庭の感化を受けないものがあらう、素より家庭の善悪は子孫の盛衰に影響するのは勿論、引いては又た國家の消長に關係するので、即ち家庭の善悪は個人と社會と國家とに對して重大なる意義を有するものである、されば基督も「善き樹は善き實を結び悪しき樹は悪しき實を結ぶ」と言つたが、家庭と人との關係も又た然りで、之れ大なる社會教育の一大主眼點である、ところで家庭を圓滑にするには、主として男女間の調和を計らねばならぬ、即ち男子をして女子とは如何なるものかと言ふことを十分知らしめ、また女子をして男子の性情を全く知解せしむるにある、斯く男女兩性間の意志を疎通せしめて、相援け相思ふと言ふことが互ひに相一致しなければならぬ、此の途に一步を進めるの策は、即ち男女間の交際の外はないのである、言ふまでもなく男子には男性があるし、女子には又た女性があつて、何れも

心理上の作用や經歷の相違や體質の反異などが、各々特色を有して居るから、兩者が相互に此の特色を知悉しなければ、到底圓滿なる一致は保てないのである、然るに一面の識すらない男女が、偶々知人などの媒介によつて縁組をし、其の結婚後、何かの動機で衝突をした結果、離婚とか自盡とか殺害とかの如き悲劇を生むのは、双方に心情の疎通を缺いて居つて、喜憂相分つ事が出来ないからである、其の苦痛と惡感とは、著しく個人的の發達を阻害するものであつて、大にしては國家社會の沈滞を來たす事となる、之れを救ふ道は、唯だ兩異性をして互ひに相知らしめ、相容れしむるの外はないのである。

然らば如何にして此の兩異性を相接近せしめ、相知らしめ、相融和せしむべきかと言ふに、之れを家庭に於て爲さしむるのが策の上乗なるものである、併し我が國の家庭では、概して男子が女子に對して頗る冷淡である、そして其の間には嚴然とした區別をして居る、然う言ふ風では異性相倚り、相助くる道に對して大なる阻害を與へる

ものである、斯かる風習が除却されぬ以上、圓滿なる家庭を形作り、兩異性を融和せしむる事は至難である、されば一家の父母たるものは、之れに對して極力注意を拂ひ、進んで兄弟と姉妹とを相親ましめ、互ひに相寄り相導き相理解し合ふやうにさせ、以て开が同情を疎通せしめなければならぬ、斯の如くにして異性の情誼を學び、自然に之れを知覺して、相融和することが出来るのである、これは最も根本的に必要な點であつて、漸次に慣熟するやうになれば、年頃になつて良人を選び妻を擇む上に於ても誤まりを生ずる事はなく、隨つて家庭の圓滿と和樂と清純とを來たすやうになる、恁うして歩一步を進めて行くに従ひ、親戚知己の間に於ても、开が家庭間の交際をする機會を利用して、互ひに男女の子供を伴ふて相往來すれば、茲に大なる男女兩性の圓滿なる交際を進歩せしむる事が容易の業となるのである、ところで歐米諸國の男女が今日のやうに平等圓滿なる交際を爲すに至つたのには、夫れ相當の徑路と歴史とがあるのであつて、曾て米國から英國へ渡つたとき見聞して大いに感じたことがある、其

の當時、滯留して居た某家の娘が、縁があつて、或る佛國人と婚約を結んだのである、其の約婚期間中、彼の女の配遇者たらんとする佛國人は、暇ある毎に、巴里から倫敦まで來て、未來の我が妻なる人の家を訪れたのである、其の時は、兩親初め一家の者は舉つて此の若き男女の交際の親密なるべきやう眞に心から祈り、努めて其の機會を作つてやつたのである、そして此の若き男女が相携へて自由に外出することも許し、また或る場合には、其の兩親が此の若き男女をば共に自動車に同乗せしめて、公園その他風景の佳い所へ遊びに連れて行つたのである、それから食事やお茶などのやうな場合にも、すべて一家の人のやうに振る舞ひ、何等の隔意なく遇する親しさ加減は、傍から見て居ても實に羨しい程であつたのである、デ或る時、其の娘に對して、「許嫁の男の方からは時々たづねて入らッしやるのに、何故貴嬢の方からは巴里へお出かけにならないのです」と問ひ試みると、娘は微笑しながら、「佛國では未婚の若い男女が二人で外出することを許しませず、必ず母なる人が共に連れ立つて監督する常習であり

ますから、到底自由の交際は望み得られませんし、従つて相互の性情を洞察する上に不便であり、自分達の意の如くならないからで御座います」と答へたのである、之れ即ち佛國の少女等は、英國の夫れの如く信用し得られないからである、开は暫らく措くとするも、青年男女が父兄若しくは母姉の監督に依つて僅かに其の品行を保護されると言ふ如きは、未だ低級な道德の社會たるを免れぬのである、素より歐米諸國に於ける男女交際を自由にするが如きものは、自己の責任と、社會の制裁は甚だ強いので、若し萬一この爲めに身を過つやうなことがあれば、其の結果は實に恐るべき禍ひとなるのである、だから未婚者が此の一事に對する觀念は、殆んど一の宗教のやうな觀を爲して居るのである、同じ歐洲でも、獨佛などは英國よりも概して親の保護の下にあるから、従つて女子などの責任も比較的軽く、我が日本の夫れに至つては其の責任は最も軽いので、若し其の子女に過失があれば、寧ろ本人よりは、其の監督の任にある父兄母姉の罪の如くせられて居る有様である、デ最初から本人の自治自制的力を無

視して居るのである、苟くも眞に過失を防止しようとするならば、此の自治自制的の感を強からしめねばならぬ、そして成るべく多く自由を與へると同時に、嚴重なる責任と制裁とを作ることが必要である、我が國に於て歐米の夫れの如く男女交際が盛んになつた爲めに、其の弊害の生ずる事が多いと言ふのは、從來餘り長い間この兩性間を離隔して居た結果として免れぬところである、夫れは素より隠せは猶ほ見たくなくなると言ふのが人情の自然であつて、其の反證とも見るべきベンザム氏の説に依ると、眞實の兄弟姉妹間に結婚の欲望がないのは、可婚期以前、即ち幼少時代から通常同棲する爲めであると言つて居る、开は血族同胞であるからと言はんよりは、寧ろ同棲し來たつた爲めであると言はねばならぬ、彼の埃及のトレミー時代の國王や、若しくは和漢の貴族などには、眞實の兄妹の間に於て結婚した例が尠なくない、これ貴族は幼少な時から、兩性の隔離が甚しいからである、ところで男女交際の自然的訓練としては、其の幼少時代から兩性を相接せしめて、女子は女子、男子は男子と言ふが如き事なく、何

等性の差別に頓着せず隔意なく相交はらしめねばならぬ、且つ男女交際が最も盛んに
行はれて、しかも其の弊害が極めて少ないと言はれて居る英國では、唯だ單に男女兩
性が相睦み、互ひに馴れ戯むれると言ふのみに止どまつて居るので、其の間に些しの
戀なる情を交へないのである、之れを換言すれば、インテンションを持たずして、ア
ッテンションを拂ふことを指するのである、究竟するに全く兩性相和して淫逸の念なき
ことは、恰も男子と男子、女子と女子とが戯遊するのと同じであつて、しかも之れよ
りは更に友誼深厚の情に富むものでありたいと願ふのである、けれども又た或る特
殊の人に對しては結婚を求むべきは言ふまでも無いことで、素より慎重な態度によつ
て各異性を洞察した結果から來る戀愛や結婚に對しては、吾人が口を挾むべき限りで
はないのである、唯だ男女が普通の交際を爲すに當つて、輕卒なる戀愛や野合的の結
婚が生せぬやうに自重しなければならぬと言ふのである、これも全然今日の我が國の
社會に直ちに求むるのは却か／＼難づかしい事ではあるが、併し又た其の交際よりし

て起る弊を恐れて、男女の接近を杜絶すべしなど、言ふ頑冥な論者の如きは、これ將
さに水に溺るゝのを危険がつて水泳を禁ずるのと一般であらねばならぬ、もつとも英
國を始め歐米諸國に於ては開が教育の中に宗教味を加へてあり、自己は微小なもので、
神は全能的のものであると言ふ知解を與へて居るから、従つて神を畏れ天を敬ふと言
ふやうな敬虔嚴肅な信念を有し、彼の有名な「凡そ女を見て色情を起すものは心の中
すでに姦淫したるなり」と言ふ基督の垂訓を奉ずるところから、双方とも相手方たる
異性の性的野心を挑發せぬやうに心懸けるので間違ひが少ないものと思ふ、然るに日
本に於て當路者が教育の大本を樹て謂ふところの國民教育の方針を定めたのは將さに
明治五年であつたが、其の當時の決定的方針として宗教と教育とは全然別途のもの
として分離せしめたので、従つて統一せる人格を養成することもならず、又た堅固なる
道德的信念を築き上げることも出来なく、何所までも現實的であり現世的であるとこ
ろから、そこで青年男女が人間としての本能の儘に動くやうな結果に立ち到るのも無

理はないことである、ところで社會改進の方面から考察すれば、何うしても兩性間の交際は必ず開かねばならぬので、之れ取りも直さず大なる政治教育の主要なる事項である、若し之れを開けば開く程、其の弊は減するであらうが、开は即ち自然の必要と、人爲の力とに依つて制裁を形作り、また異性との交際に慣熟するからである、然しながら従來の如く單に兩性を隔離したり、猶ほ且つ唯だ監督者に依つて僅かに之れを保護するが如きは、到底永久的の萬全策ではないのであつて、要は兩異性が自由に相交際しても其所に弊害が起らぬと言ふ事を期せねばならぬ、即ち自から己れを持つること金玉の如く、苟くも之れを傷つけば、終生世に立つ事が出来ぬと言ふ信念をもつて、文明流の交際を爲すのである、しかも今日に於ける社會一般の趨勢は、男女兩性を従來のやうに長く相離隔する事を得ざらしむる状態となつて居るのに、猶ほ且つ依然として「男女七歳にして席を同じうせず」と言ふが如き見解を持つて居るなどは、夫れは實に姑息因循な手段であるばかりでなく、また行はんとするも能はざるところ

である、だから現代の文明的新教育を受けたるものにして、徒らに舊習を朴守するが如きは、實に其の人の識見の低きを暴露するのみではなく、社會の向進歩を阻害する荼毒者なりと言つても宜いのである、要するところは男女の自由交際を公行する前に、先づ男尊女卑の觀念を一掃すべきであつて、夫れと同時に兩性は互ひに持ちつ持たれつとの關係にあることを相理解し合ひ、自分に於て餘るものは之れを他に與へ、また自分に足らざるところのものは他から之れを攝取し、所謂その増減多少を交換して茲は調和的補綴を爲すのである、即ち男子は理智は長けて居るが、情と言ふ色彩に乏しいのだから、婦人は己れに餘つた情を此の邊に加味して、よろしく人生の淡白を補ふのである、また婦人は體質に於て足らぬところがあるから、男子は其の卓越した體力を婦人に假して、克く其の保安的助力を與へるのである、斯くして一長一短、一剛一柔、互ひに其の優れたものを交換するのです、始めて人生の適應した意義に接し得られるのである、故に婦人は何うしても男子の強剛的智的性質の従者とならなければならぬ、

之れと同様に男子は如何にしても婦人の優美的情的性質の従者とならなければならぬ、そして又た男女の道徳は共に同一に嚴守し、一方に要求するところの節操は、同じく他方に於ても之れを遵奉するやうにして、茲に男女兩性は相接近し、眞に有益なる交際を爲すべきである、若し其の間に清き眞個の戀愛が成立したならば、進んで偕老同穴の契りを結ぶべきであり、また然らざる者に於ては親しき中にも謹嚴に兩々品性の純潔を保持して、以て相互に立派な權威ある自主的人格の人たるべきである、斯の如くにして兩異性の性的渴望は先づ精神的に醫充され、堅く兩性間を隔てる門扉は従つて開放され、また長く離間を餘儀なくされて居た男女は自然に接近されるであらう、されば彼の皮相なる見解よりして、徒らに青年男女の墮落を叫ぶ無理解者流の如きは、俱に論するに足らないのである。

第二十五章 結婚問題より見たる人間論

結婚は人倫の大本で、また社會組織の基礎となるべきものであるから、輕忽に附すことの出來ぬ重大な問題である、然るに世間の人達は一時の煩惱の爲め其の容色とか財産とか地位などに眼が眩み、人格の高卑や年齢の好當や血統の如何や病氣の有無などを考慮に置かないやうである、言ふまでもなく結婚ほど人生に眞面目な問題はないのであるが、今日の社會では洵に軽い意味に考へて居る人が多いのである、殊に日本ほど之れを無造作に茶飯事に考へて居るところは恐らく他にはあるまい、ところで社會で考へてゐる正當なる所謂理想の結婚は、然るべき媒妁人があつて見合ひと言ふものを試み、双方で當人も親も、或は當人同志は少しぐらゐ氣に入らなかつたところで、親同志さへ氣に入れば茲に結納が取り交はされ、謂ふところの黃道吉日を選んで三々

九度の式を擧げるのが理想的の結婚である、素より相互の性格も品性も體質も趣味も學力も凡べて異なつた男女兩性が、茲に單なる結婚と言ふ儀式によつて、靈肉の一致と利害の一致とを計らうと言ふのであるから、随分滑稽な事と言はなければならぬ、デ彼の基督が理想とした「二人の者は一體となるべし」と云ふ言葉通り、果しに完全な結婚が今日の結婚の方法で得られて居るであらうか、吾人は之れを隨る怪しむものである、然うした理想的なる結婚が到る處に行はれて居るのに拘はらず、其の反面に於て又た到る處に悪しき結婚の結果である悲劇的離婚が頻々として行はれて居るのは何んの爲めであらう、統計の示すところに依ると、歐米諸國に比較して我が日本は離婚數の最も多い國であつて、社會道德の極めて低い風俗の淫靡な佛蘭西よりも、更により猶ほ一層甚だしいのである、斯かる佛蘭西などに於てさへも、近代的家族制度の破滅は各個人が獨立的資格がないのと、教育程度の差と、家族的團體と、家族の後援に依頼し過ぎるからであると言つて、輓近家族制度の問題は八釜敷くなつて來たの

であるが、日本などでは猶ほ更ら形式的な表面的な問題に依つて家庭道德、結婚道德の頹廢を來たして居るのは離婚數の多いのを見ても分ると思ふ、もつとも然うした弊の宿れる日本の家族制度では、結婚の第一の要件である愛情の問題が、まつたく缺如して居るのではあるまいか、ところで愛情と言ふことは、吾人が精神を愉快喜悅ならしめた原因をば、永く現實的に保持しようと言ふ心象を稱するのである、即ち人が或る快感を惹起したときに、其の快樂の感情をば、之れを起させたもの、觀念と結合させると、先づ喜悅と情念を生じて、次に愛情と言ふ情念が起るのである、故に一たび起つた愛情は、心の喜悅を醸した原因を保持するばかりでなく、また之れを保護しようと言ふ自然的の希望を生ずるのであるが、此の思念の向上したときには、同情的愛情といふ至高な心情をも生ずるのである、デ愛情を發起する状態を観ると、先づ之れを五つの要素に分つことが出来る、即ち第一には生殖本能、第二には覺的、第三には固着、第四には欽仰、第五には同情と言ふことが之れである、其の中で生殖本能と言

ふのは、謂はゞ生理的愛情であつて、しかも性慾から來た單純な異性的愛情を言ふのである、勿論兩性の愛には、其の動機が何れにあるにもせよ、开が根本的本義は必ず此の要素の上にあるものとして宜ろしい、それから覺的とは、前者の生殖本能的感情に、幾分の潤色をしたもので、一方の容貌とか音聲とか、または其の色澤、光輝、容子等が標目とせられるのを言ふのである、之れは一般の動物界にも見受けられるので、羽毛の美を以て偶を呼ぶ鳥類や、鳴聲の妙を以て匹を索む虫類の如き、皆な此の覺的要素に基くのである、次に固着と言ふのは、始終自己に近づけられてあるものが、馴致的に愛情を生ずるのである、謂はゞ所有物の愛玩とか、郷土心の固執とか、または見馴れたものに對する好意などは、皆な此の要素に起因するのであつて、親子の愛情や、情人に對する戀愛の如きも、此の要素に依つて猶ほ更に高められるのである、且つ又た欽仰と言ふ事は、力勢上の景慕であつて、對手の勢力や價值が、自己もしくは他の多くの者よりも優れて居ると思ふところから愛情を喚び起すのである、即ち長上

とか主權者とか師とか偉傑とか超人とか言ふ者に對して起る愛情などは、主として之れに起因するのであるが、世に言ふ神聖の戀愛など言ふのは、此の要素の勝れたのを稱するのであつて、また此の要素より起つたもの、中で至貴至高とも稱すべきものは神に對する愛である、そして終りに同情と言ふのは、自分の心が、他の心と融合一致した時に起るのであつて、各種の愛には、此の種の要素を含むのが多いのである、此の同情と言ふ事は、見やうに依つては、愛情と區別が無いやうであるが、仔細に觀察すると、其の様式に異なつたところがある、即ち愛情の方は狭くて深いのであつて、同情の方は淺くて廣いのである、故に同情は何所までも手を擴げて求めることは出来るけれども、愛情は決して廣義な譯にはゆかぬ、之れと同様に愛情は緊縮性であつて、同情は膨脹性であるから、此の二つのものは明白に區別されるのである、そこで猶ほモウ一步深く突き進んで考へると、親子の間柄に思ひを馳せねばならぬが、此のうち父性愛情と、母性愛情との間には、自から劃然とした區別がある、即ち父の子を愛するのは智的であつて、

また母の子を愛するのは純然たる本能的である、之れを動物社會に見ると、例として男性のものが、幼者の保護や養育に力を盡すものはないのみならず、時としては却つて其の幼者の敵となるやうな行動をさへ取ることもある、デ人類としても、野蠻人の如きは、其の男性は殊に幼者に冷淡であるのは争はれぬ事實である、けれども社會が進歩の域に達して、秩序のある家庭制度が行はれるやうになつてからは、父は其の理解的智力に依つて、母と同じやうに其の子に對するやうになつたのであるから、其の愛情の根本に於ては、確かに打算的であるのは免がれぬところである、故に母の愛と父の愛とに於ては、恰度積極と消極との差があつて、父の方は消極的弱性であると言つて宜ろしい、斯う言ふ工合であるから、母の子に對する愛情は、一切無分別であつて、また盲目的のものである、だから之れを動物に見ると、子を育てる時期にある母獸は、時として身を忘れて其の子を護るのである、たとへば猫が子を乳する時分には、随分猛犬をも撃退する、また卵を覘ふ猫には弱い鶏さへ身を挺して之れと闘ふのは、吾人の常に目撃

するところである、之れは自然の本能性であつて、決して理窟から來たものではないから、其の行爲が盲目的であるのも當然であつて、やがて牝性の天職とも言ひ得るのである、しかも其の絶對的愛情は殆んど極端であるから、高等な人類にありても、母の愛は總べての理性を没却するのであつて、自分の子に對しては其の缺點をすら無意味に看過するのである、即ち婦人は其の子に過失のあつた事を見たり聞いたりする場合にも、其の心の奥底では決して之れを悪いとは思つて居ぬばかりか、種々な理窟をつけて、何うかして善意に解しようと思ふのである、之れは頑是ない子供を養育する上には、實に缺くことの出來ぬものであつて、此の迷執的偏愛があればこそ、何時までも其の愛を渝へることがなく、永く之れを育てたり介護したりすることが出来るのである、だが一利一害は免れぬところで、母性の此の積極的愛情は、一面に子女を養育するに必要であると共に、また一面には子女の爲めにならぬことも多い、それは子女の心性や行爲に悪い點があつても、之れを善しとして扱ふので、其の結果は子女の

悪い心性や行爲を許すやうなことになるから、随つて子女の訓諭など、言ふことは、何うしても彼れ等の所能ではない、これは確かに母愛の一缺點とも言ふべきものである、そこで此の缺點を補ふものは父の愛である、素より進歩した社會——少なくとも野蠻の域を脱した社會——としては、父の子に對する愛も、決して薄いものではないが、其の根本義が智的であるだけに、母性の愛のやうに、盲目的に溺愛に陥らぬのである、だから其の子の缺點なり短所なり又は非行なりなどが、一目瞭然に觀察されるし、其の美點善所なども、比較的公平に見得られるから、育成に子女を愛護する爲めに、充分な訓諭や戒飭を加へることが出来る、俗に言ふ「甘やかし」だとか「我が儘育ち」など言ふことが、多く父の居ぬ家庭に實現せらるゝのは、此の邊の消息に由るものである、けれども此の父性愛情が、素より打算的であるところから、時としては又た殺風景に陥ることがある、之れは又た一の缺點であつて、母性愛情の缺點に對立するものと言つて宜ろしいから、詮じて見ると兩者ともに一利一害を存するのである、そし

て又た母性の愛情として、茲に一つ注目しなければならぬことがある、夫れは同じ子であつても、其の養育の状態によつて、开が愛情に深淺を生ずることである、世によくある里子に對する場合、即ち自分の子を一時他人の所へ預けた時に、其の子は平生我が手元に置いたものに比して愛情が薄いのである、此等の點から觀察すると、母の愛情は第一に哺乳、第二に抱擁、第三に接觸と言ふやうに、自己に接近せしめた時に強められるのであつて、漸次に母體を遠ざかるに随つて薄らぐのである、之れは單に子女の育成と言ふ上に必要な愛であることを證據立てるので、自然的本能的愛質である事が分るのである、けれども父の子に對する愛情は、恰度これと反對であつて、其の子の幼少な時よりも、年齢の長ずるに随つて愛情を増すのであるが、之れは元來が智的であるから、双方の意思を通ずる程度に比例して其の愛情を増減されるのである、ところで戀愛は結婚の要素とすべきものであるから、兩性の間にばかり現はれる心象であつて、本能的愛情に屬するものである、之れも又た一般の愛情と同じく、生殖本能、

覺的、固執、欽仰、同情などの要素を分つのであつて、中にも戀愛にあつては生殖本能を第一義とするのである。斯う言ふやうに戀愛は生殖慾即ち性慾の満足の主とするものであるが、一般の場合に於て覺的の要素なども必要である、これは動物全體を通じての性質で、對手方の體貌動作の美觀は、甚しく戀愛の心を挑發させるのである、デ固着と言ふことが、また戀愛心を起す要素となることは、社會の實際に於てよく認め得られるのである、即ち初對面や未だ交際の淺い時分には、別段戀愛の心は起さないで居ても、間斷なく往復するとか、永く同棲するとか言ふことになる、自然に相愛する心を生ずることがある、此等は謂はゆる接近性愛情を表示するので、前の二者と共に戀愛に對する動物的要素と言つて宜いのである、それから戀愛は又た欽仰から起ることがある、之れは相手の能性に心服した結果、开を好むの情合からして、遂に異性慾をも満足せしめようとするのであるが、此の要素と同情的要素とは、ひとり人類にのみ見られると共に、また進歩した精神現象であるから、前の動物的要素に對して一に精神的

要素とも稱せられる、世に言ふ理想的戀愛と言ふものは、また此の様な戀愛を言ふのである、即ち對手を憧憬するところから、全く之れに同化し畢らなくては止まぬと言ふ白熱的情念を生ずるに至り、眞に自我を没却して、全身全靈を擧げて开を信する、そして何所までも戀人と共に歩み、愛する者と共に永遠不死の境涯に入る、しかも戀人の胸の内に安住し、愛する者また我が心の中に生きる底の信仰を有するものである、更に又た對手に歸敬を捧ぐることによつて、其の精神生活を豊富にし、之れに依つて自から慰め自ら勵み、以て世に處する安立の地盤を求むるところのものである、そこで戀愛の究竟的目的は何であるかと言ふに、其の歸着するところは矢張り本能的性慾の満足を得ようとするものである、されば彼の碩學ゲーテが、戀愛は肉體の抱擁に終ると言つたのは、確かに實際を道破したものと云はなければならぬ、世の中には神聖の愛情など、言ふことがあるが、それは確かに理論的命名であつて、決して實際的の命名ではない、其の證據には神聖的戀愛であると言はれて居た戀愛も、开が大團圓は

必ず肉慾の満足を見るのである、併し之れは普通の狀況に就て言ふのであつて、理法としては神聖の愛情も無いではない、即ち之れと色情と相對峙した比較的高潔な愛的徑路と言ふことが出来る、故に色情と言ふことは、直接に肉慾に憧がれるのを言ふのであつて、戀愛と言ふのは其の色情を起す要素に憧がれるのである、だから色情は性的情慾であつて、また戀愛は理想的情念であると言ふことが出来る、夫れ故に戀愛が、最も理想的から起つた場合には、決して肉慾を有するものではない、否な縦ひ之れを有する事があつたとしても、それは人間としての自然であり、また愛好の情念に附隨した陰影的心情の反映であつて、素より性慾の遂行と言ふことは従とされるのであるから、此の様なものこそ、眞に神聖なる戀愛とも稱すべきものであらう、開は兎に角、 愛と言ふことは、實際婦人の全生命であつて、婦人は之れに生き是れに長じ維れに死するものと言つて宜ろしい、されば曾てアーヴキング氏が、男子は利益と野心との動物であつて、彼れ等は其の天性として、極まりのない世の中の競争場裡に立つことを

好んで居る、だから男子としては其の戀愛と言ふことは、其の青春時の表裝的飾物か、さもなくば幕合の音楽に過ぎぬのである、彼れ等は單に名譽と財産と、それから自ら持する地位と、他を御する力とを求めんとするのである、だが婦人の生涯は全部愛情の歴史であつて、情と言ふ事は彼れ等の世界を意味して、彼れ等の野心や奮闘は、實に此の情海にのみ存する、故に彼れ等は隠れたる其の寶を得ようとして、恐ろしい冒險を企て、其の心と身とをば、愛情といふ船に托するを辭せぬ、斯うして一朝、其の船が難破でもしようものなら、彼れ等は一擧して絶望の深淵に沈んで、全く情的の破産を遂げるのであると言つたのも、無理ならぬ事と思はれる、デ其の愛情の一半は(少なくとも)戀と言ふ心情に占領せられて居るのであるが、此の戀の激發した場合には、戀は總べてを排却して、婦人心身の全幅を占めるのである、だから此の場合には、戀は劇甚な主我の本體と融合して、恐ろしい猛勢を呈して、殆んど盲目滅法の觀を示すのであるが、夫れだけに戀をすることが深く、また心を用ふる事も綿密周到

である、けれども主我の情態は、此の場合にも遺憾なく發揮せられるので、戀に對する批判的解釋や、對手者の言動心象などには、まったく無頓着となり終ることが多い、即ち彼れ等の戀が絶頂に達した曉には、自己の戀を満足せしむる外は、すつかり盲目的になつてしまふ、されば彼の「一切夢中」など、言はれるのも、斯う言ふ現象を言ふのである、然るに男子は縦ひ堪へられぬやうな戀をして居るにしても、心の中には應分の理智を持つて居るから、概して彼れ等のやうな盲目的行動は取らぬのである、且つ又た婦人が其の情人に對する信念の如きは、まったく準錯覺や準幻覺のやうな心象の範圍にあるものであつて、婦人としての偏愛は、此の事實を證明するのである、デ異性に對する愛の狀況を見るに、其の眞摯の情態には素より變つたところは無いのであるが、其の固執の様式には、大分異なつたところがある、即ち彼れ等は宗教に對する迷信の如くに、其の男子に對する戀愛は、すつかり感溺性となるのであつて、开が情人の美點をのみ注視するの結果、その他の事柄に對しては全く盲目的であるのを

常として居る、故に其の情人の缺點を見ても、努めて之れを善意に解釋し、毫も非難に値ひせずと言ふやうな偏信を逞しうする、だから情人は他の凡べての男性に卓出するものと考へ、時としては情人の犯罪行爲すらも、極めて都合よく觀察曲解して、自己の胸中には決して罪人で無いと思ふに至るのである、斯う言ふやうに感溺した婦人の眼には、殆んど抜くことの出来ない迷信を宿して、よくよく自分の心で反省するところが無い以上、斷じて情人の缺點を見出し得ない、此の場合に若し他の人が、其の婦人に向つて、开が情人の缺點を説き聞かせても、當に之れに耳を假さないばかりか、却つて其の忠言者を恨み罵るやうな事があるのは、吾人が屢々見聞するところである、然しながら男子の愛は之れに反して、愛と言ふもの、對象物に就ての比較的批判力を備へて居るので、婦人のやうな謂はゞ錯覺的偏愛に陥る事はないのである、けれども此の偏愛と言ふことは、矢張り自己中心主義であつて、凡べてが自分の上から迷出されて居る、故に彼れ等は其の子を愛する上には、糞尿鼻涕をすら汚穢とも思はないが、

さて他人の子となると、却つて極端に之れを憎むことがある、謂はゆる繼母根性と言つたやうなものも、皆な自己を遠ざかつた冷淡から起るのである、斯く論じ來たると、婦人の資性は如何にも偏屈のやうで、また主我のやうであるが、之れこそ眞の婦人の一寶玉であつて、また彼れ等の上に存する貴重な價值であると言はなければならぬ、しかも然うした事實は、決して婦人を汚辱するに足らぬのみか、倍々その價值的眞質を明かにするのである、即ち婦人は或る點に於ては、錯覺にまで赴くと言ふ感情上の素質を備へて居て、其の素質から發揮された拘束的情念や一貫的愛情が、何方かと言ふと兎角、理義的意味の男子を融和し、乾燥した社會に人生の實質を注ぐのを思へば、此等は社會の血液とも、また彼れ等の使命とも言ふべきものであらう、ところで翻つて本論の結婚問題に立ち歸つて考察するに、世の父兄は子弟の妻を見るに愛の目があつて觀ることが出来るか、また新郎は花嫁の凡べてを根本的の愛情によつて計算し得るかは頗る疑はしいものである、と言つて歐米の思想である自由戀愛主義を茲に讚美

する譯ではない、吾人の言ふところの戀愛至上主義は日本の青年男女間に見るやうな單なる肉慾満足的の如き破廉耻な野合的のものではないから、歐米の自由戀愛は兎に角、今の様な日本の自由戀愛は又た甚しい弊害的な墮落したものであつて、彼の唯だ形式一遍な三々九度の盃事的結婚よりも更に悪いことは言ふまでもない、さればと言つて我が國に於ける三々九度式の結婚は在來の習慣上、絶対に當人の自由が束縛されて居て、まるで籤引みたいなものである、先づ青年男女が一定の年齢に達すると、兩親と媒介者が勝手に相談して、彼れなら容貌も十人並で女藝も仕込んであるから忤の嫁に不足はあるまいと來る、又た彼の息子なら家に相當の資産もあつて教育もあるから、我が娘を遣つても苦しからずとあつて、偕て夫れからが見合ひの一條となる、甚しいのになると、男女とも全く未知であるところから、此の見合ひなるものが頗る滑稽であつて、新郎がキチンと座を構へ、媒介者が立ち會つて居る席に、新婦が茶を持つて來るのである、唯だ夫れだけ、しかも茶を置くと、逃げるが如く去つてしまふので、

其の間わづかに數分、それも殆んど無言の行である、そして氣まり悪さ耻しさの爲めに、ロクに顔も見られない仕末である、然るに其の間に親同志でも付き添つて居れば、家に歸つて來てから後、やれ顔立ちが圓いとか、首が細いとか、背がチンチクリンだとか、色が黒いとか白いとか、まるで犬か猫でも貰ふやうな風である、うまく一等籤でも引き當てれば幸ひ、運わるく貧乏籤などを引き當てるゝ俗に言ふ六十年の凶作である、やがて結納の取り交はしの段取りとなり、形式一遍な三々九度の式を行ふので、其の様な事で納まれば四海波風おだやかであるが、素より开が夫婦間に愛もなければ理解もないのであるから、先づ大概は間もなく離婚の問題を生じたり、夫れでなければ種々な家庭悲劇を生まずしては濟まないのである。

ところで若し茲に眞面目な結婚があるとすれば、是非とも愛情と性質と趣味と體格と年齢とが適合した結婚でなければ、結婚の意義は無いものであると思ふ、今日の結婚の有様を見ると、男子は女性の容貌と、親の社會的地位に目をつけ、女子は男性の

爵位、財産、學歷、収入のみに重きを置いて、唯だ只だ衣食住の安全と、开が豪奢とを銜つて社交場裡に虚榮を誇らんとするのが主眼であり、また親は嫁の犠牲的、服従的精神をのみ覘つて居るので、随つて各人が全く異なつた希望と目的とを以て家庭を作らんとするのである、だから各人が未だ凡べてを理解しないで、他人的に構へて居るうちは宜敷いけれども、やがて半年なり一年なりの後に破鏡の歎を見るのは、其の多くが和樂の不可能や趣味の差異や姑との衝突や將た又た性慾愛情の不満足、即ち靈肉の不一致を來たすからである、されば男子が妻を持ちながら不品を爲すのも、また人妻が姦通を行ふのも、共に其の原因は立派に有るのである、決して日本の家族制度が悪いからの事ではなく、歐米各國の風俗人情から出た個人的の制度に比較して、我が國の夫れが一概に不完全であると言ふことが出來ぬのみならず、却つて日本固有の家族制度に、非常に拘すへき和樂團樂の氣が溢ふれて居るのを見受ける、今や我が國の殆んど凡べてのものが歐米の個人主義化を餘儀なくされて、其の結果として家庭に

於ける兩親や他の家族等と、新夫婦との別居は盛んに流行して來て居るが、此の新夫婦の別居と言ふことに就ても短所が餘程あるのは事實である、そして姦通する妻の背後には靈肉の不調和と、性慾の不満足と言ふ缺點があると同時に、また不品行な良人にも妻に對する靈肉の不調和と、性慾の不満足と言ふ問題が甚だ重大な原因になつて居るではないか、しかも青春の血に燃ゆる一時的な熱情と性慾とに驅られた無分別の自由な戀愛結婚の如きは、未だ人格が完全に出來上がつて居らぬ性的智識に乏しい我が日本の青年男女には殆んど罪惡に近いのであつて、斯う言ふ結婚に圓滿な調和した永久性の有つたものは稀れであると言つても宜ろしい、デ自由戀愛の原因は、一つは兩性の美貌から起るのであつて、健全な體質と、高潔な品性と、生活の安定な上の美貌なれば結構であるが、多くは然うした自覺的のもので無いのである、だから美貌の如きは一時の幻覺同様のもので、初めは甚だ心を引くのであるが、馴るゝに従つて心理上の變化から、遂に美貌も美貌と感じないやうに所謂飽きが來るのであつて、之れ

を結婚の第一要件とするなどは全く考へなしであり、それと同時に財産を以て結婚の第一要件とするが如きも又た根本的の誤まりである、然しながら今日は生存競争の激烈な時代であるし、人情の自然として誰しも自から好んで苦痛な生活の辛味を嘗めようと思ふものはないから、生活の手段方法として多少財産は要するけれども、夫れを一直線に目がけるなどは實に沙汰の限りと言はねばならぬ、今日のやうに黄金萬能主義であつて、社會の融通機關である黄金が直接に人生と關係するやうになつたのは慥しかに贅すべきものではない、素より女藝とか男の才能などは必要であつて、女は之れを以て家事に従ふことが出来るからであり、また男は夫れに依つて生活の資を得られるからである、言ふまでもなく容貌は時を経るに従つて衰へるし、財産や俸級は罷り間違へば消えてなくなるものであるが、其所へ行くと人格や品性や女藝や男の才能やなどは、其の人の生命の有らん限り身に附いて居て離れないのである、それから結婚に就て年齢と言ふことも又た大切なものであつて、結婚に適當な年齢は人種、土地、

氣候等の變化に依つて一定しては居らぬが、先づ男子は徴兵検査後から二十四五歳、女子は十七八九歳が結婚の時期であらう、もつとも日本の法律では男子は満十七歳、女子は満十五歳から結婚し得る権利が有るのであるが、男子は徴兵検査後の二十一二歳では未だ生活の完全を保し難い爲めに二十四五歳から三十歳ぐらゐに自然と後れてゆくのである、素より年齢の相違は、時代の相違であつて、靈肉合致の意義を到底擧げる事の出来ぬのは明らかである、けれども茲に例外は文學者、音樂家、詩人、美術家、俳優の如き藝術に生活するものは、永く其の心の若さを保つて居るのが普通とされて居るし、中には若い氣分を保有して居ると共に、其の容貌外見の何時までも若いやうなのがあるから、此等を以て全般を推す譯にはゆかぬのである、デ歐洲に於ける結婚年齢の最下限は、獨逸が女子は十六歳、男子は二十歳で、露西亞は女子が十六歳、男子は州に依つて異なつて居る、また英國は女子が十二歳、男子が十四歳と言ふ風である、併し英國の此の年齢は、生理上からではなくて、習慣に因るのである、たとへ

ば女子に就て考へると、十二歳の妊婦などは、骨盤が未熟の爲めに、生兒の頭を潰すこともあるし、一生歩行が出来ぬやうになつたり、下肢が全く麻痺したり、脚が脱臼するやうなこともあるし、中には死んでしまふものもある、だから早婚は害の多いものであり、兩者が精神上、何等の苦勞がないので、夢のやうな親密から、一時に突發的な融和し難い不和を來たすことが往々にある、いくら法律が許すからと言つて、最も早く結婚することは餘程考へもので、當人同志の間ばかりでなく、延いて子孫にまで大なる影響を及ぼし、生れた其の子供が、身體虚弱であつたり、常に病身であつたりするから、之れを健全に養育することは覺束ないのである、また早婚の者の子に、奇形兒や痴鈍兒が多いのを見受けるのであつて、確かに其の弊害は蔽はれぬのである、夫れに男女双方とも、身體が充分に發達して居らぬうち結婚するのであるから、茲に開が身體の發育は止まり、漸次に其の記憶力は失せてゆくのである、従つて若き妻は學問や技藝も碌に熟達せぬのに早くも女子の養育に心を勞せねばならぬし、また年少

な良人は完全に學業も修了せぬうち既に妻子と言ふ足手纏ひが出来て、相互に何等學ぶところも經驗するところもなく、子供の爲めに生活を犠牲にせねばならぬのは慥かに損のことである、デ若い妻などには、我が子と姉妹のやうなのがあつて、實に滑稽である、しかも早婚の害悪なことは朝鮮、支那、印度などが其の實例を示して居る通り、子孫の病弱と、痴兒の多いのが著しいのを見ても分る、そして又た夫妻間にも、家庭の上にも良結果を與へないのであつて、延いては國家社會にも悪影響を及ぼす譯である、併し晩婚も又た害の多いものであつて、人間は四五十歳になると、身體が稍や衰へて來るから、十分健全な生殖作用を行ふことが出来ぬものである、若し又た年老つた男子が若い女性と結婚すると、精力が急に衰へてしまふし、且つ开が性慾の差異からして、其の家庭には必ず不和を惹起するのが通例とされる、然らば何時までも獨身で居ることは差支へないかと言ふに、夫れは素より不自然であつて、婚期を失した婦女の多くが、概して健康を得て居らぬと言ふことも争はれぬ事實である、ところ

で双方が丁度よい似合ひの年頃であつたとすれば、たとひ晩婚にしても稍や弊は少なからうかと言ふに、男女とも素より年を多く取つて居るところから、相互の性格や識見などが既に固定して居るため、夫婦間の融和や調節を圖ることが六ヶ敷く、其の結果は暖かい愛情に基づいた圓滿な家庭を作ることが出来ぬのである、そして又た晩婚の夫婦の間に生れた子供も、意志が至つて薄弱で、多くは感情が過敏のやうであるから、之れも早婚の子と同様に不健全たることを免れぬのである、唯だ晩婚だけに、父母の衣食が足り、开が社會上の地位が動搖せぬ爲め、子供の性質が、自然と鷹揚に傾くことは確かである、一體動物にも成熟期があるやうに、人間も又た生殖作用を健全に營む年齢に達して、始めて結婚するのが意義あることになるのである、だから性慾を根柢に置かぬ夫婦關係ならば、之れは誤まられたる主従か、友人かの關係に等しいのであつて、何等の價値もないのである、素より生殖作用を營むことは生理上、生殖器に依るのは勿論であつて、生殖作用は人生に於ては精神的愛情の一致を必要とする

のである、されば之れに依つて絶大の快樂を味ふのであつて、唯だ單に生殖作用を行ふと言ふやうな、單純なことでは無いから、健全な且つ清潔なる生殖を行ひ、完全なる人生の快樂を求めんには、是非とも相互の體質及び機關の健全と言ふことを第一の條件としなければ、眞の意味ある結婚とはならぬのである、従つて體質の弱き人々は不妊となり、又た充分な生殖作用と營むことが出來ぬのである、婦人には所謂婦人病なるものがあつて、男子よりも比較的に不健全なものが多いのである、それが爲めに一たび結婚しても、忽ち破境の嘆を見るのは、世間によく例の有ることである、斯かる人は結婚の資格がないもので、永久の幸福が之れに因つて得られると、得られぬとの分岐點をなすものであるから、餘程慎重に考へなくてはならぬのである、併し身體の方だけで言ふならば、女子は十七歳から十八歳の間が、最も發育の大成する時であつて、また男子も二十歳には身長も體量も殆んど大成するのである、デ結婚の効力は、其の時から有る譯であるが、今日十七歳の女子と二十歳の男子とは、何れも共に女學

校や高等學校などの學生であつて、到底獨立した生活が出來ぬのみならず、第一に子女の養育と教育とが完全に行かないのである、爲めに今日の日本は勢ひ晩婚の傾向を帯ぶべく餘儀なくせられ、殊に教育ある男子は、一層晩婚であつて、大學生などには二十八九歳から三十歳ぐらゐの人々も多く、従つて生殖器的活動時期は不自然に短縮されて居る、デ斯かる智識階級は姑らく措くとするも、實際二十歳ぐらゐの若さでは、たとへば商家の店員にしる、自から別に獨立して開店することもならず、且つ工業に従事するものにせよ、一戸を構へて世帯が張つて行きかねようし、また農家の人々にしたつて、同じく妻を迎へて立派に生活し得られるものではない、开は兎に角、何かにつけ、我が國ほど迷信の甚しく行はれて居る所もないので、殊に結婚などに就ては、愚にもつかぬ事にまで御幣をかつぎ、九星が何うの、相性が悪いのと、賣卜者に見て貰つたり、おみくじを引いたりする者もある、しかも十九歳は女の厄であると言つて、此の年には結婚を避ける風があるが、之れなどは殆んど何等の意味もない詰まらぬ事

である、开を年齢からでなく生理上から見ると、十九歳は充實した女子の最高期であつて、まことに惜しむべき好年期である、且つ又た丙午の者は性質が悪いとか、申歳の者は縁が切れるとか、火性と水性とは調和しないとか言ふやうな迷信が到る處に行はれて居る、それから結婚で家の建築のことなどが問題にされるやうな事もあるさうだが、之れに衛生上の考慮が拂はれて居れば、別に災難などの來る筈はないので、所謂かの鬼門なども矢張り一種の迷信である、斯う言ふ迷信の爲めに良縁を破り、婚期を失してしまふのは洵に歎かばしい事であつて、是れを學問的に科學的に研究すると、何等の根據もなく又た價值もないことである、ところで夫れなら如何なる年齢を以て結婚を爲すに適當とすべきかと言ふに、禮記に「男子三十歳にして室あり、女子二十歳にして嫁す」とあるが、早婚と晩婚との中間を取つた適當の年齢は、男子は二十五歳以上三十三歳以下、女子は十九歳以上二十三歳以下である、此の時代には男女とも相當の年齢に達して居るので、既に筋肉は固定して軀幹は至り、思慮は熟し常識に富み、

心身ともに健全なる發育を遂げて居るから、人生の活動時機と見て大差がないのである、されば其の間に生れた子供が、両親の努力性及び忍耐性を承繼し、随つて意志は強健に、智慮敏捷である事は論を要せぬので、世の俊才や偉人の多くが貧家から出た所以も亦た茲にある事と思ふ。

惟ふに女子は嫁して家を治め、兒を儲けて母となり、第二の國民を育つべき義務あるもので、其の不健全は忽ち一家に影響を及ぼし、遂に團樂の和樂を缺くに至るから、たへず攝養の途を講じなければならぬ、男子は亦た一家の柱石で、これが元氣の如何は直ちに家道の消長に關はるものであるから、常に衛生上の注意を怠らぬやうにするのが肝要である、されば男女兩性は其の身體、精神、智識、感情等の凡べてが優美に且つ強壯に調和し、學校時代より成熟期を通じて、生理上圓滿なる發達を遂げるやうに充分意を留め、身心ともに健全の人たることを念としなければならぬ、ところで健康とは如何といふ問題に對し、多くの人は尋常普通の身體であると言ふかも知れぬが、

此の言は其の當を得たものとは言へぬので、何となれば普通と言ふ事と、健康と言ふ事とは全然同じではなく、唯だ一口に尋常と言へば、單に身體の構造や機能の變つて居ないのを指すのである、デ一見して異常のない人でも、其の實甚しく健康を害して居る事もあらうし、また弱さうに見えて居ても日頃健康の人もあるから、唯だ單なる外見だけでは一寸判断がつかかねるものである、だから疾患と言ふものは、別に身體の構造如何には何等の關係もなく、唯だ生活上缺くべからざる諸機關の官能、及び快覺の變動を言ふのである、素より身體と精神とは、常に密接なる關係を有するものであるから、兩者互ひに相扶掖し、相俟つて始めて身體の健全なる發達を遂げるもので、「精神は身體に従屬す」とは千古の格言であるが、彼の世俗の諺にも「健全なる身體には健全なる精神を宿す」とある通り、まだ猶ほ發育時にある青年男女は専ら運動を適宜に試みて、終始精神を快活ならしむる事が必要である、言ふまでもなく筋肉骨格は適度に使へば漸次に肥大を加へて更に其の質は硬く緻密になり、其の肉色は赤み

を帯びて來て立派に見ゆるもので、彼の枯木のやうに瘦せて色の蒼白いのが美人であると言つた時代は既に過ぎ、今日では全く身體の強健と言ふことに重きを置いて來たのは明かな事實である、素より生殖と言ふことは、唯だ種族の増殖ばかりが目的ではなく、一に健全なる子孫を造り出すのが本來の使命であらねばならぬ、ところで茄子の枝には、間違つても瓜がなるものではなく、矢張り茄子がなるのは勿論である、併し時としては進化的に人為淘汰を試みて、茄子の枝に瓜をならしめられ無い事もないのである、たとへば西洋林檎は日本林檎よりも大きくて味がよいし、また西洋の豚は日本の豚よりも大きくて食料に適して居るが、开は素より進化的に人為淘汰を試み來たつた結果で、今も猶ほ益々努力を重ねて良き種類を作らんとして居るのである、之れは一方から見ると、遺傳の力を應用したものであつて、早い話が、日本米が外國米より優等であるのは、農夫が彼の粃を一定の方法に依つて良種ばかりを選択し、其の粒揃ひの種子を苗代田に蒔き、努めて優良な肥料を施す上に、天候や灌漑などに一方

ならぬ苦心を拂ふからである、そこで人間も又た肉體だけは、彼の動植物と同様、機械的に、人爲すなはち人間の力で、所謂遺傳を應用して改良することが出来るのである、今日は黄金結婚か、さもないと不健全な戀愛結婚に忙がしくて、各自の體格に無頓着なのは、實に残念至極のことである、されば農業家が家畜や種子を選択して之れが改良を計るやうに、人間としても又た開が體質や性格を選択して子孫を優秀ならしむるを念としないと言ふことは、青年男女が結婚によつて家庭を作り社會をなす上に於て悲しむべきことである、之れを知らないのは、植物や動物の價值のみを知り、ひとり人間の價值を知らず、所謂外界の價值を知つて、自己の價值を知らないものである、素より人間は進化し發達する爲めに生活するのであつて、夫れが爲めには、家庭も社會も國家も莫大な費用を消費して居るのである、しかも人間は萬物の尺度と昔から言はれて居る通り、萬物の價值の根元である、換言すると、人間があつて初めて萬物の價值がある譯である、故に金銀は人間によつて價值を附けられるものであるのに、

此の金銀によつて人間の心が左右され、黄金結婚の行はれるのは本末顛倒であり、また眞に人間をば價值のあるやうに改良しないで、盲目的婚姻が到る處に行はれて居るのも洵に不思議なことである、されば體質上の病的遺傳なるものに就ては、結婚者の最も注意を要すべきであるは素より其のところであつて、昔から癩病や肺病などに關しては及ぶだけ吟味したけれども、今日では此の他に恐ろしい遺傳病が澤山あるのである、たとへば血管病の如くに血が一度出始めると容易に止まらぬやうなものがある、女子は一代の間病性が潜んで居るけれども、男性にはよく發して夭折するものも多く、之れは全く母からの遺傳である、また佝僂病や眼病や烏目や糖尿病なども遺傳の性質を帯びて居るし、關節炎を誘起する痛風なども矢張り然うである、猶ほ又た肥え過ぎる肥胖病も同じく遺傳病であつて、婦人などには月經閉止後に多く見受けられるのであり、老人になつて連動の少ない割合に酒や營養物などを攝る人にも起るやうである、それから癩癩病者の子孫には白痴が多く生れるので、該病者は一も二もな

く素より結婚の資格がないものである、斯く肉體に遺傳があるやうに、精神上にも遺傳があるか何うかは、今日學者の研究して居るところであるが、精神の遺傳も矢張り物質的の遺傳に伴ふものと考ふべきは言ふまでもない、概して精神上の遺傳も、體かに有る事と斷せられてあるにも拘はらず、餘り社會では注意して居らぬやうだが、結婚上大いに考慮を要すべきことである、即ち父母が精神病であると、其の子も又た精神病に罹り易いのであるが、子供の中には發しないものもある、勿論父が學者であつたから、其の子も同じく生れながらにして學者であると言ふ事はないのであるが、併し學者になり易い可能性は持つて居る、そして此の可能性は、子供の時から教育すると、長じて學者になり得られるのである、若し父が大政治家ならば、其の子も亦た開が可能的な性質を有して居る、故に精神的遺傳とは、父母の精神作用が、生れながらにして其の嬰兒に發露するのではない、されば學者の子にも、間々愚かな低能兒が生れることがある、だから智育や德育や體育などの訓練修養によつて、人為的淘汰を

施すべき必要を生ずるのである、デ父母の思想や身體が不健全の爲めに、其の子女は低能兒であるにもせよ、之れに教育を授けると、稍や良好のものになるのである、また父母の酒精中毒の爲めに、其の子女が白痴であるところから、如何に教育しても、開が精神細胞は普通の者のやうに複雑になることが出来ないで、殆んど手の着けやうのないものもある、それから長命なども遺傳の一つであつて、田舎などには澤山例のあることである、また身長體量なども遺傳するもので、子は父母の何れかに必ず似るものである、ところが稀れには、父母が極めて小男小女であるに拘はらず、偉大な軀幹の子が生れたと言ふやうな例外もある、併し夫れは或は祖父母にあつた體質が、一代休眠して居つて、孫の代に現はれたと言ふやうなものである、且つ又た昔の英雄豪傑には、身體の偉大な人が多かつたやうであるけれども、其の子孫は比較的纖弱で、英雄豪傑たる父の名聲を墜すやうな者の多かつたのは、何んの理由で然るのであるかと言ふと、開は素より品性の問題である、されば彼の「酔ふては枕す美人の膝、醒め

ては握る天下の權」と唄はれてある通り、英雄豪傑の行爲は多く不品行であつて、無自重にも纖弱な美婦女を弄したり大酒を煽つたりするところから、其の影響が直ちに遺傳して悪兒を生ずるやうな結果に至るのである、如何に善良な種子であつても、之れを野放しにしては、自然の悪影響は免れないのであつて、子孫の天然の可能性を發揮せしめるには、矢張り第一の遺傳と共に、第二の天性の改造も亦た必要缺くべからざるものであり、「習慣は第二の天性なり」と言ふのは、即ち此の邊に用ひて宜敷い格言であると思ふ、猶ほ又た世間に偶々見受けられることだが、其の子女の痴呆なのを秘したり、また之れを判然と知つて居ながら、單に開が財産のみを目的として、平然と政略結婚を行ふやうなものもあるが、斯うした結婚は、眞に社會の根本たる完全な家庭をなす所の意義ある結婚ではなく、殆んど言ふべからざる非常識的行爲であり、人生を毒する道德上の罪惡である、よし又た夫れが痴呆でないにせよ、其の性質に奇性のあるものや、先天的に犯罪性のあるものやなどの結婚も、非常な悪い結果を來たすので、解剖

的に此等の者の身體を檢覈して見ると、常人とは異なつた構造があると言ふことが一般に信せられて居る、デ斯うした遺傳病が其の字の示す如く、父祖に在る病毒が残り傳はつて罪もない子孫を苦しめ泣かせるものであると同時に、彼の花柳病も又た人類の生存上最も恐るべきもので、此の種の病氣に罹ると、大抵は其の子女に悪影響を及ぼすのみならず、激烈なる傳播力を有するものであるから、將來父となり母となるべき青年男女は宜敷く充分の注意を以て攝生に努め、斯かる害毒を子孫に遺すやうなことがあつてはならぬ、しかも此の花柳病患者、殊に梅毒や淋病などは、殆んど男子の占有物と言つても宜い程であるが、女性に然うした患者のあるのは、おもに娼妓や藝者や淫賣婦ぐらゐのものであつて、若し妻女が該病に罹るのは、言ふまでもなく皆な其の良人から感染したものである、素より男性はたとへ結婚しても、法律上他の婦人に接するとは自由であるから、従つて此の花柳病にも罹り易いのである、デ然うした病毒が夫婦の一方にあれば、他の一方に之れが感染するのは當然なことである、そして延いて

は一家の將來に永く影響する問題である、併し今日の結婚制度では、此の恐ろしい花柳病のあるのを知ることが出来ないで、結婚後、妻女に傳染してから、初めて良人が該患者であることを知るに至る有様である、斯様なことは洵に如何とも致し難い事相であつて、結婚道德の低級な事を暴露した實に恥づべき次第である、勿論結婚は人倫の大本であるから、双方に於て及ぶだけ慎重に考慮せば、自然に斯かる無責任な事は消滅するのであつて、三年以内もしくは現在に於て罹病なきことを包み隠さず告知し合ふのは、將に道義上然るべきことであり、更に進んでは信を拂ひ得られる確かな醫師の證明書を供すべきである、一體醫師の方では全治後三箇年以上を經過せねば、之れが證明書を交付せぬ筈なのである、夫れは素より此の様な病氣は、たとひ一旦快癒したやうに見えても、三箇年以内は开が病毒の潜伏期とせられて居るからである、デスうした病氣に罹ると、夫れが爲め離縁になると言ふやうな例は、世間に多く見受けるところである、けれども之れは道義上、甚だ疑ふべきことである、若し夫婦が此の

病氣に罹つたならば、ともに其の治療を受くべきが當然である、然るに自己の双肩に繋れる責任を負荷するなく、また开が不徳をも省みずして、我が半身たるべき一人を離縁し、其の爲め該病毒を轉々他に蔓延せしむるやうな結果を來たすことは大いに考究せねばならぬところである。

それから今日に於ける人倫上からも、また法律上からも禁止されて居る血族結婚には、古來無害説と有害説との二種あつて、兩々ともに相下らぬ有様であるが、其の結果は何うも有害説の方が精神上、肉體上まつたく事實に近い確證を示して居る、併し無害説によると、人類は最初は一夫婦から出たものであるから、事實に於て血族結婚が其の根柢をなして居るのは素より其のところであり、そして兄弟姉妹の近婚を重ね、开が氣候風土の變化で斯く様々な人種を造つたものであつて、今日でも尙ほ野蠻國へ行けば、父が娘と婚し、母が子と姻して居る所があるけれども、夫れ等の人々は皆な凡べて健康であると言ふのである、且つ又た彼斯國では、親子の間に生れた子供でな

いと、尊い聖い僧官に就くことは出来ないさうである、現に日本でも、信州の山中などへ行くと、他所の人間と交へない近婚制度の村落を見受けるさうである、开は詰まり經驗的に結果の如何を見た上の説であつて、素より有力な學理的な研究の説ではないのである、之れに反して血族結婚有害説になると、餘程學理的に生理上研究されて居て、植物などでも、自家受精が非常に悪く、出芽と言ひ、成長と言ひ、花の開き工合も、種子の成りやうも、凡べてに於て甚だ宜敷くないやうであり、また動物などにしろ、鶏などは兄弟姉妹の間に生れる子が非常に虚弱であるし、羊でも豚でも然うして出来たものは身體に變調を來たすのであると言はれて居る、しかも血族結婚の爲めに起る人間の害は、聾啞や精神病者や白痴や眼病者などの多いことであり、また多指兒だの畸形兒だのなどが生じ易いことである、デ眼病者は此の遺傳に因つて起るのが四割ぐらゐの數を示して居ると言ふことである、且つ精神病者などは非常に血族結婚に多いのであつて、血族結婚に依つての精神病者は、血族結婚でない者の精神病者の

二倍はあるさうである、ところで癩病患者などは、まつたく無關係の人と代々結婚して、數代の間、血族結婚を避けると、自然に血液が普通になつてしまふさうであるが、其の代はりに、血族結婚を代々繰り返すと、突然癩病などを發生することが間々あるさうである、また家畜類中、馬などは性質の良い血族同士で交尾させて行くと、四五代の間は好い成績を得られるけれども、何時の間にか其の血統に附いて居た悪い性質が次第に現はれて來て、遂には子孫を生産する能力がなくなるさうである、それから血族結婚に次いで八釜しいのは雜婚であつて、之れも有害であるか無害であるか明瞭な答へは出来ぬけれども、動植物に就て見ると、植物類の雜種の中に生ずる間種などは、其の性質が餘り良くないやうであるし、また動物中に於ける魚類などの間種は人工孵化を盛んに今日行つて居るが、开は比較的良好の結果があると言ふことである、デ性質を傳へるものゝ一例を挙げると、馬と驢馬との間種は騾馬と言ふものであるが、非常に伶俐で粗食でよく働くと云ふ其の兩親から享けた良い性質の代はりに、第一子